

道宣著作の研究

——道宣著作序文譯注稿——

研究代表者 大 内 文 雄 編

はじめに

唐・道宣（五九六―六六七）は、唐初期の佛教が持つ様々な難題に、同時代人として取り組み、後世の戒律學、佛教史學へ甚だ大きい影響を及ぼしている。そうした道宣が遺した多種多様な著作群の全體像を把握し、道宣の思想と行動の跡を總合的に解明するための方法として、それらに付されている前序・後序等の序文の讀解作業を會讀形式で行なっている。この研究は、故藤善眞澄氏『道宣傳の研究』の成果を基礎として、道宣の著作そのものの總合的理解を圖り、道宣その人の思想と、彼を取り巻く時代と社會、及び佛教の實態把握を企圖して大谷大學内に發足した二〇一一年度の研究に連續するものである。以下、科學研究費補助金・眞宗総合研究所一般研究・研究課題名「道宣著作の研究」の初年度である二〇一二年度までに實施し、成稿を得た研究成果を本研究紀要に掲載するに當り、その概略を述べる。これらは、隋・唐代初期を代表する戒律學、歷史學、目錄學また思想史に關わる、道宣自身によって述べられた序文等の現代語譯化の第一歩となる研究成果である。共同研究の成果の形式は、いづれも原漢文の釋文・訓讀・譯文・語註の順に作成されている。

道宣の著作は廣範圍にわたるが、およそ以下の四種に分類される。

第一群：戒律に關わる著作群

主著の『四分律刪繁補闕行事鈔』一二卷を始めとして『四分律比丘含注戒本』三卷等の、序を有する一一部が数えられる。これらは數多い道宣著作の中でも最も主要の部分となし、その著述期間もごく初期から最晩年に至る彼のほぼ全生涯にわたる。

これに關しては、戸次顯彰（研究分擔者）が、『四分律含注戒本疏』前序、及び『四分律刪補隨機羯磨疏』序を、松岡智美（研究協力者）が、『四分律比丘尼鈔』序、及び『釋門章服儀』序を擔當し、それらの解讀の結果が共同研究の場に附され、原稿に對する數次の檢討を経て、『釋門章服儀』を除く三點がここに掲載されるに至っている。次の第二群、第三群、第四群に屬する著作についても同様の檢討を重ねて成稿としたものである。

第二群：經典目錄。

これについては『大唐內典錄』一〇卷があるのみであるが、唐代に編纂された經典目錄の嚆矢として重要な位置を占めている。佛教經典の收集保存の基準を示す「入藏錄」はその後の時代に大きな影響を与え、また彼の歴史觀・佛教史觀を知る史料でもある。

『大唐內典錄』序については、大內文雄（研究代表者）が擔當し、成稿としている。『大唐內典錄』各篇の序についても、順次に解讀を進める豫定である。

第三群：史傳關係の著作。

中國佛教史研究の基礎史料となるものである。『續高僧傳』三〇卷や『釋迦氏譜』一卷、『釋迦方誌』二卷、『集神州三寶感通錄』三卷、『道宣律師感通錄』一卷の五部があり、また戒律關係の史傳記錄として『律相感通傳』一卷がある。

第三群については、松浦典弘（研究分擔者）によって、『律相感通傳』序が擔當され、今回収載することができた。また

『續高僧傳』の序及び篇序については、大内文雄(研究代表者)が本學大學院の授業の中で讀解を進めており、『釋迦方誌』の序については次年度において譯注作業が行なわれる豫定である。

第四群：護法・三教論争に關係する著作群。

ここには『廣弘明集』三〇卷、『集古今佛道論衡』四卷が含まれる。中國佛教史・思想史上の最も重要とされる史料集である。

この第四群については、『廣弘明集』總序を便宜的に前・後半に分け、藤井政彦(研究分擔者)、河邊啓法(研究協力者)によって擔當され、また『廣弘明集』卷五の辨惑篇序も總序と同様に前・後半に分け、藤井政彦、河邊啓法によって原稿化されている。更に『集古今佛道論衡』序は今西智久(研究分擔者)が擔當した。今回の報告は以上の三點の譯注にとどまるが、たとえば『廣弘明集』には全一〇篇それぞれに序があり、次年度以降、辨惑篇序を除くものについて順次作業を進めて行く豫定である。

以上のように今般掲載し得た譯注稿は、あくまでも稿としたように試譯として位置づけられるものである。しかしこれらによっても、道宣がそれぞれの著作に自ら付した序文を通して、道宣の考え、あるいは立場の一端を理解することが可能である。以下、この點について一、二の表現を取り上げて指摘してみたい。

一つには、「行事」の語がある。『四分律刪補隨機羯磨疏』序に次のように言う。

近世に逮び、繼ぎて作る者あり、盛んに律文を解するも、空しく辭費を張ぶるのみなり。行事に至りては、未だ其の歸を見ず。

また續いて「具に正量に依り、傍あまなく行用を出だす」とも言っている。いずれも具體的な事柄、作法の具體例を指しており、いたずらな空理空論に依ることの非を鳴らすところなど、あたかも『史記』の太史公自序に言う

我之を空言に載せんと欲するも、之を行事こうじに見すの深切著明なるにしかざるなり。

を髣髴とさせる言葉である。この言葉はまた『廣弘明集』總序にも「其の行事に據る」と書かれ、そこでは「直筆」の語と對應して用いられ、更に『廣弘明集』辨惑篇序では「實錄」の語と共に記されている。「實錄」の語は『集古今佛道論衡』序の冒頭にも見える。戒律の専門家として當然と言えば當然ではあっても、具體的實踐的な姿勢が、このような表現を採用するところに示されているように。

今一つには、「嘉運」の語がある。『大唐内典錄』の序において、道宣は中國に佛教が傳わって以來、「六百年の嘉き運トキが経過した」と言う。三教論争の渦中において指導的立場にあった道宣は、時として儒・道二教の、中でも道教の俗説に對しては舌鋒鋭く論難してやまないが、一方、『廣弘明集』辨惑篇序では、前漢・楊雄の『太玄經』、東晉・葛洪の『抱朴子』や『神仙傳』、そして『莊子』を優れた書として稱揚する。唐初期の三教論争の中にあっても、今を佛教史上の嘉運と捉えると共に、道家の良書には賛辭を惜しまない道宣の均衡に思いを凝らす姿が窺える一例である。

この他に、たとえば『律相感通傳』の序には、著作の自己評價に關するところがある。「聖化を裨助し、幽鬼隨喜し、讚悦せざるはなし」と自負される『續高僧傳』や『廣弘明集』に對し、「律部」の「抄錄疏義」に聊かの見劣りがあるのは、これは道宣の過ちではなく、譯語の問題である、と天人に語らせている。このように翻譯論や天・人の間の交感、あるいは道宣が主張してやまない戒定慧三學の兼修についても、これからの譯注作業の中で、多くの知見を得られるであらう。

以上、道宣の著作序文の總數からすれば、その一部の成果にとどまるものではあっても、今回公表する現代語譯化の手法を序文全體に及ぼせば、その研究成果は學界に裨益するものとなるであらうし、それを目的として行きたいと考えている。

凡例

〔釋文〕

底本は、大正新脩大藏經及び新纂大日本卍續藏經を用いた。

〔校勘〕

校勘に使用した版本はそれぞれ略稱をもって示し、釋文の該當箇所アルファベットを付した。宋・元・明・宮については大正藏の校勘記を援用した。校勘に使用した版本とその略號は以下の通りである。

宋…宋本（思溪版）

元…元本（普寧寺版）

明…明本（萬曆版）

宮…宮内廳書陵部藏本

麗…高麗大藏經再雕本

磧…磧砂大藏經本

中華…中華大藏經本

〔訓讀〕

訓讀文は、校勘に基づき必要に応じて文字を改めたうえで作成した。文字を改めた場合は、語註にてその旨の説明を加えた。

〔譯文〕

（ ）は語句の補足説明を、〔 〕は文意の補足を表す。

〔語註〕

引用文献のうち、Tは『大正新脩大藏經』を、Xは『新纂大日本卍續藏經』を表す。

〈参考〉

解讀を進めていく上で、以下の文献については和刻本も参照した。*大谷大學所藏本については、請求記號を付した。

『四分律含注戒本疏』 *餘大七〇六

『四分律刪補隨機羯磨疏』 *餘大七〇六

『四分律比丘尼鈔』：正徳三年（一七一三）刊本 *餘大八〇〇

『廣弘明集』：承應三年（一六五四）刊本

『四分律含注戒本疏』序 (X39, 710a-712c)

〔釋文〕

四分戒本者、斯乃統萬行之關鍵、寔三乘之階轍者也。昔夢豔告徵、機分利鈍之本。喻金顯道、教無離合之宗。然則二部五部、隨務或張、五百十八、任緣時舉。同孚聲教、竝會眞空、導達化源、通明理性。故能乘津五衆、覆燾群萌、開務攝持、允符玄旨。

至如四分肇興、祖習縣遠、正法初百、便列其宗、斯人博考三機、殷鑒兩典、包括權實、統收名理、集結茲藏、通被時寶。故使韋編成規、欽承無絕。自諸部遠流、咸開衢術、獨斯一宗、未懷支派、良由師稟有蹤、知時不墜故也。

蘊結西土、千有餘年、譯傳東夏、將四百載、諸有傳授、同異非無。元魏季曆、慧光律師、隨義約文、重出一本。首題歸敬者是也。此與姚秦覺明所出頗得相符。高齊末祀、法願律師、誦律計文、又出一本。略於歸敬、首題戒德者是也。斯則三本行世、弘魏者多。見心紛擾、于今未靜。考覈諸集、蓋不足陳、經遠大觀、義無讎抗。

余以暇日、徧覽群篇、互擊波瀾、僅分其異、至於行事、盛結遲疑。豈非單寫本文、通略正解、致令後銳、罔冒愈深。所以敢依律部、具集正經、仍隨本律、卽爲注述。卷成流廣、隨務可歸、至於義理、未遑修葺。今有二三遊學、共結山門、每以戒爲入道之清途、出有之明略。講通既寡、悟入何從。本律廣而難求、斯經約而易授。故不獲已、試復敘之。博要適機、已絕唱于前達、舒演義類、敢程器于將今。且酬來貺、隱括詳後。

〔訓讀〕

四分戒本とは、斯れ乃ち萬行を統べるの關鍵にして、寔に三乗の階轍なり。昔 甦を夢みて徴を告げるは、機に利鈍を分かつの本なり。金に喩えて道を顯わすは、教に離合無きの宗なり。然れば則ち二部・五部は、務に隨い或いは張り、五百・十八は、縁に任せ時に擧ぐ。同じく聲教を孚とし、竝びに眞空に會し、導びきて化源に達し、通ねく理性を明かす。故に能く五衆を乗津し、群萌を覆薫し、開きて攝持に務め、允に玄旨に符う。

四分の擧めて興り、祖習縣遠なるが如きに至りては、正法初めの百、便ち其の宗を列ね、斯の人博く三機を考え、殷んに兩典に鑒み、權實を包括し、名理を統收し、茲の藏を集結して、通ねく時實に被らす。故に韋編をして規を成し、欽承して絶えること無からしむ。諸部の遠流して、威衛術を開きてより、獨り斯の一宗、未だ支派を懷かざるは、良に師稟に蹤有り、時の隆ちざるを知るに由るが故なり。

西土に蘊結してより、千有餘年、東夏に譯傳して、將に四百載にならんとし、諸有る傳授に、同異無くんば非ず。元魏の季曆、慧光律師、義に隨いて文を約し、重ねて一本を出す。首に歸敬と題する者は是れなり。此れ姚秦の覺明の所出と頗る相い符することを得。高齊の末祀、法願律師、律を誦して文を計り、又一本を出す。歸敬を略し、首に戒徳と題する者は是れなり。斯れ則ち三本世に行われ、魏を弘むる者多し。心に紛擾を見わし、今に于いて未だ靜まらざるあり。諸集を考覈すれば、蓋し陳べるに足らざるも、經遠大觀すれば、義として讎抗無し。

余暇日を以て、徧ねく群篇を覽るに、互いに波瀾を撃ち、僅かに其の異を分かつも、行事に至りては、盛んに遲疑を結ぶ。豈に單に本文を寫し、通じて正解を略めるのみなるも、後鋭をして罔冒愈いよ深からしむるを致すに非ざらんや。所以に敢えて律部に依り、具さに正經を集め、仍お本律に隨い、即ち注述を爲る。卷成りて流廣し、務めに隨いて歸すべきも、義理に至りては、未だ修葺するに遑あらず。今二三の遊學有り、共に山門に結び、毎に戒を以て入道の清途、出有の明略と爲す。講通するもの既に寡し、悟入何にか從らん。本律は廣くして求め難きも、斯の經は約にして授け易し。故に已むを獲ずして、試みに復た之を敘ぶ。博く機に適うことを要むるも、已に唱を前達に絶し、義類を舒演し、

敢えて器を將今に程す。且らく來貺に酬い、隱括して後に詳かにせん。

〔譯文〕

四分戒本とは、萬行を統べる關鍵であり、まことに三乗の階轍である。昔「ビンビサーラ王の」夢の中で織り目の細かい綿布が「十八片に分かれて、部派分裂の」徴を告げたことは、機根に利鈍があるという根本義である。「コーサンビーの比丘が闡譯してお互い誹謗し合って分裂したときに佛が「此れも亦是れ僧、彼も亦是れ僧」と述べて在家信者に」金杖「を布施する際は二分するよう」に諭えて道理をあきらかにしたことは、教説に離合のないことの宗義（おおもと）である。そうであれば二部や五部「に部派分裂したこと」は、「各々」務めによって展開したのであり、五百部や十八部「に分裂したという傳承」は、縁によって時に興起したのである。「部派に分かれても」同じく釋尊の聲によって説かれた教えを眞實として、眞空の教えに符い、「衆生を」導いて釋尊の教えの源に至らしめ、あまねく理性を明らかにしている。よって「出家の」五衆を乗せて彼岸に渡らせ、衆生をあまねく包み込み、衆生を開發して攝めたもち、「佛法の」奥深い旨に符合している。

『四分律』が初めて興って、はるか長く教えを傳え學ばれてきたことについては、正法の初めの百年は、すなわちそれぞれが教えをそのままに傳え、この當時の人たちはひろく機根に三種あることを考え、盛んに大小二乗の佛典に鑑み、權（方便）と實（眞實）を包括し、名と理を一つにまとめ、この「律」藏を結集して、あまねく當時の出家者たちの用に供した。よって尊い書物を繰り返し讀むことを規範として、尊い教えとして傳承させ絶えさせなかった。諸部派が長く續いて、どの部派もみちを分かつも、ただこの一宗（『四分律』を傳承した法藏部）だけが支派をもたなかったのは、師から弟子への傳承にたしかな足跡があり、時代の風潮の中で失墜することがなかったことを知るからである。

インドで「律藏が」まとめられてから、千年あまり、中國に譯出されてから、四百年にもなろうとするので、多くの

傳授の際にどうしても異同が生じてしまう。元魏の末頃に、慧光律師が、文意にしたがって文章を簡約にして、再度「戒本」を世に示した。冒頭部に「歸敬」と記されているものがそれである。これは姚秦の佛陀耶舍（覺明）の譯出した戒本とよく一致している。高齊の末頃には、法願律師が、律を誦して文を推しはかり、再び一本を世に示した。「歸敬」を省略して、冒頭部に「戒德」と記されているものがそれである。すなわち三本「の戒本」が世に流布し魏本（慧光の戒本）を廣める者が多い。「諸本によって」自説ばかりを主張する者が多く、今に至っても未だに靜まらない。「だから」諸集を検討してみても、およそ陳べるに足らないところもあるが、大局的見地に立つて見れば、けっして優劣があるわけではない。

私は時間をつくってはあまねく多くの書物を讀み、その都度相互の異同を検討し、いささかその「諸本間の」相違するところを分析したが、具體的な持戒のあり様ともなると、疑惑ばかりが次から次へと湧いてくる始末である。單に本文を寫して、ひろく正しい解釋を略めるものであったとしても、後代の俊英に戒律解釋に關する無知とそれによる犯戒をますます深めさせることになろう。それ故ここは律部の記載によって、戒の條文（戒經）を集め、その上で本律（四分律）に隨い、それに即して注述をつくった。本書が出来上って廣く流布されれば、この四分戒本にしたがうべきであるが、本書の義理を明らかにすると、未だ編纂・補修するゆとりがない。今、數名の同學者と、共に山門に集まり、常に佛道に入る清淨な行、迷いの世界を出る明解な教えを戒とした。「しかし」『四分律』の講説に十分通じている者は少なく、「律學の奥義に」悟入するために何の手立てもない有様であった。本律は内容が廣大で樞要を求め難いが、この「戒」經は簡約で授けて示しやすい。故にやむなく「戒本について」試みにこれを敘述した。ひろく機根にかなう解釋を求めようとしても、すでに先達の教えは絶えてしまっているのので、戒本各條の意味を分類整理して、律僧としてのあり様を後代に示そうと思う。ひとまず人々の要請にこたえるとして、「誤りについては」後に訂正し詳しく述べたいと思う。

〔語註〕

- 1 【二部五部】 小乗部派の數。二部は上座部と大衆部。『四分律含注戒本』序「雲飛二部、五部之殊、山張十八五百之異。取其元始所被、無非計情、窮其要會之心、俱通正業」(T40, 422a)。『大方等大集經』「橋陳如、我涅槃後、有諸弟子、受持如來十二部經、書寫讀誦、顛倒解義、顛倒宣說、以倒解說、覆隱法藏。以覆法故名曇摩毬多。橋陳如、我涅槃後、我諸弟子、受持如來十二部經、讀誦書寫、而復讀誦書說外典、受有三世及以內外、破壞外道、善解論義。說一切性、悉得受戒、凡所問難、悉能答對。是故名爲薩婆帝婆。橋陳如、我涅槃後、我諸弟子、受持如來十二部經、書寫讀誦、說無有我及以受者、轉諸煩惱猶如死屍。是故名爲迦葉毘部。橋陳如、我涅槃後、我諸弟子、受持如來十二部經、讀誦書寫、不作地相水火風相虛空識相。是故名爲彌沙塞部。橋陳如、我涅槃後、我諸弟子、受持如來十二部經、讀誦書寫、皆說有我、不說空相。猶如小兒。是故名爲婆蹉富羅。橋陳如、我涅槃後、我諸弟子、受持如來十二部經、讀誦書寫、廣博遍覽五部經書。是故名爲摩訶僧祇。善男子、如是五部雖各別異、而皆不妨諸佛法界及大涅槃」(T13, 159ab)。
- 2 【五百十八】 小乗部派の數。『大智度論』「過五百歲後、各各分別有五百部」〔大正藏は「五部」、三本・宮本・聖本は「五百部」〕(T25, 563c)。眞諦譯『部執異論』「舊所出經論中亦有十八部名」(T49, 022b)。
- 3 【聲教】 釋尊が聲として説かれた教説。『四分律含注戒本疏行宗記』「教由聲説、故云聲教」(X39, 711a)。
- 4 【覆燾】 おおう。廣くおおい照らす。『禮記』中庸「仲尼祖述堯舜、憲章文武、上律天時、下襲水土。辟如天地之無不持載、無不覆燾」。
- 5 【開務】 「開物成務」の略。萬物の道理を開き示して務めを成し遂げる。『周易』繫辭上「子曰、夫易何爲者也。夫易開、物、成、務、冒天下之道。如斯而已者也。是故聖人以通天下之志、以定天下之業、以斷天下之疑」。
- 6 【允符】 符合する。
- 7 【緜遠】 綿が長いように傳承されていくこと。
- 8 【三機】 聲聞・辟支佛・菩薩の三種の機根。吉藏『三論玄義』「言五時者、……於漸教內開爲五時。一者三乘別教、爲聲聞人説於四諦、爲辟支佛演説十二因緣、爲大乘人明於六度。行因各別得果不同、謂三乘別教。二者般若、通化三機、謂三乘通教。三者淨名思益、讚揚菩薩抑挫聲聞、謂抑揚教。四者法華、會彼三乘同歸一極、謂同歸教。五者涅槃、名常住教」(T45, 005b)。慧沼『金光明最勝王經疏』「若法華經、説有三機。序品云、爲求聲聞者説應四諦法、爲求辟支佛者説應十二法、爲諸菩薩説應六波羅蜜」(T39, 178a)。

- 9 【兩典】 大乘と小乗の佛典。
- 10 【名理】 佛典の名句とその意味するもの。『行宗記』「名、謂詮詮名句、理、謂所詮義趣」(X39, 711b)。
- 11 【韋編】 「韋編三絶」の略。書物を何度も読む。孔子が晩年に『易』を愛讀して、その木簡をとじたなめし革が何度も切れた故事に由来する。
- 12 【季曆】 末年。『行宗記』「季、曆、即末年也」(X39, 711c)。
- 13 【慧光律師、隨義約文、重出一本】 慧光(四六八—五三七)は四分律宗の祖。『續高僧傳』慧光傳「又再造四分律疏百二十紙、後代引之爲義節。并羯磨戒本咸加刪定、被於法侶今咸誦之」(T50, 608a)。
- 14 【覺明】 『四分律』を譯した佛陀耶舍。『高僧傳』佛陀耶舍傳「佛陀耶舍、此云覺明、罽賓人也」(T50, 333c)。
- 15 【法願律師】 法願(五二三—五六一)。『續高僧傳』明律篇論「魏末齊初、慧光宅世、宗匠跋陀、師表弘理、再造文疏、廣分衢術。學聲學望、連布若雲峰、行光德光、榮曜齊日月。每一披闡、坐列千僧。競鼓清言、人分異辯。勒成卷帙、通號命家。然光初稟定宗、後師法律軌儀、大聖徽猷具焉。所以世美斯人行解相冠、誠有從矣。有雲暉願三宗律師、躡踵傳燈、各題聲教。……汾陽法願、昉視兩家、更開覺穴、製作抄疏、不減於前。彈糾覈於律文、是非格於事相。存乎專附、頗滯幽通。化行并塞、故其然也」(T50, 620c)。
- 16 【略於歸敬、首題戒德者是也】 戒本冒頭の偈頌で三寶への歸敬偈を省略して「戒如海無涯…」の戒の功德の偈から始まること。『行宗記』「題戒德者、直云戒如海無涯等」(X39, 711c-712a)。
- 17 【大觀】 ひろく見渡す。ひろく示す。
- 18 【讎抗】 『續高僧傳』玄奘傳「因爾改前舊章、更新戶牖、穿鑿之功、難與讎抗」(T50, 542c)。
- 19 【程器】 自らの度量や意志などを世に示すこと。『釋門歸敬儀』に「程器陳迹篇」という篇があり、この篇名を宋・了然の『釋門歸敬儀通眞記』が「篇名中程、示也。器、謂懷抱」(X59, 517a)と注する。
- 20 【來貺】 人に送る書簡。人から來た書簡。
- 21 【隱括】 詳細にはかる。よく調べる。

(戸次頭彰)

『四分律刪補隨機羯磨疏』序 (X41, 083c-086b)

〔釋文〕

觀夫聖人之利見也、妙以清澄界繫、亡我靜倒、以爲言焉。故張三學之教源、顯八正之道業、揚四部之清訓、樹五衆之良規、莫不橫厲重關、高翔極有者矣。然則學雖多位、誠戒居先。豈不以衆善宏基依因之所本也。自古詳教、咸分兩途、化教則通被道俗、專開信解之門。行教則局據出家、唯明修奉之務。三輪則攝於憶念、四藏則統在毘尼。義約則行教所收、從文則歸承法聚。止作兩善、名實昧於卽機、受隨二戒、願行標於時衆。所以前修後進、成誦維持、代漸浮訛、不無沿濫。自法流東夏、開務寔繁、戒本羯磨、爭分異轍。良由受體止持、攝修之極、無越戒本、據行作持、量處之要、其唯羯磨。戒本序致、如別所陳。羯磨衆氏、義須詳顯。或單翻出（卽古本。曹魏所翻者）、或依律文（卽今一家。依本直誦）、或準義用（卽光師所述。首云三藏者）、或引緣據（卽願師後述。廣子注者）。酬校諸本、成務紛綸、增減繁略、互見得失。單翻則失於文旨、包舉難尋。依本則得在執據、前後易惑。準義理雖無爽、藏跡可嫌。緣據似是具周、止存別見。竝隨事尋誦、臧否冥然、唯可卷收、信殊龜鏡。又依本綴疏、廣引游辭、附文摘義、勘逢其器。逮于近世、繼有作者、盛解律文、空張辭費、至於行事、未見其歸。撫務懷仁、實增勞想。

今不揆庸昧、試纂聖言、削彼繁蕪、增其遺漏。具依正量、傍出行用、各顯部類、仍隨義舉。指瑕則知過宜改、摘理則思擇有蹤、時務則廣樹厥儀、同廢則略題名相。本雖行世、於理未陳。故復相從、勒開文義。余老矣。恐徒移日晷、妄損正功、耽滯無益之辭、以送有涯之命。誠不可也。大集法行之言、律頒常一之教、此而不審、餘竟何言。

所題曇無德者、中梵本音、唐言譯之、名爲法鏡。部謂黨類之別名、運起正法之初位。四分卽說之斷章、言律乃行所詮

教。對彼繁略故題刪補、對彼潛務故曰隨機。羯磨天音、人翻爲業、凡百所被、莫不成濟。²⁹ 且開大略、廣要如後。

〔校勘〕

a 余（大谷大學所藏和刻本）|| 餘（大日本續藏經）

〔訓讀〕

觀ずるに夫れ聖人の利見たるや、妙に界繫を清澄にし、我を亡じ倒を靜めるを以て、以て言と爲す。故に三學の教源を張り、八正の道業を顯し、四部の清訓を揚げ、五衆の良規を樹て、横に重關を厲り、高く極有に翔ける者ならざるは莫し。然れば則ち學に多位ありと雖も、誠に戒先に居る。豈に以て衆善の宏基・依因の本づく所とせざらんや。古より教を詳らかにするに、咸く兩途に分かつ。化教は則ち通じて道俗に被び、専ら信解の門を開く。行教は則ち局りて出家に據り、唯だ修奉の務を明かす。三輪は則ち憶念に攝め、四藏は則ち統べて毘尼に在り。義もて約せば則ち行教の所收、文に従れば則ち法聚に歸承す。止作の兩善は、名實 卽機に昧く、受隨の二戒は、願行時衆に標す。所以に前修・後進、誦を成して維持するも、代漸く浮訛にして、沿濫無くんばあらず。

法の東夏に流れてより、開務寔に繁く、戒本・羯磨、争い分かれて轍を異にす。良に體を止持に受くるの、攝修の極みは、戒本を越えること無く、行を作持に據るの、量處の要は、其れ唯だ羯磨のみなるに由る。戒本の序致は、別に陳べる所の如し。羯磨の衆氏は、義須らく詳顯すべし。或は單に翻出す（即ち古本。曹魏に翻ずる所の者なり）、或は律文に依る（即ち今の一家。本に依り直誦す）、或は義用に準ず（即ち光師の述べる所。首に三藏と云う者なり）、或は縁據を引く（即ち願師後に述ぶ。子注を廣くする者なり）。諸本を酬校しては、成務紛綸として、増減繁略あり、互い得失を見る。單翻なれば則ち文旨を失い、包舉して尋ね難し。本に依れば則ち執據に在ることを得るも、前後惑い易し。

義理に準ずれば爽^なうこと無しと雖も、跡を藏^{かく}して嫌^{いと}うべし。緣據なれば是れ具周なるが似^{ごと}きも、止だ別見を存するのみ。竝^{なら}びに事に隨い尋ね誦するも、臧否冥然として、唯だ卷收すべきも、信に龜鏡と殊にす。又本に依りて疏を綴るも、廣く游辭を引き、文に附いて義を摘^とるも、其の器に逢うこと尠なくす。近世に逮び、繼ぎて作る者有り、盛んに律文を解するも、空しく辭費を張るのみにして、行事に至りては、未だ其の歸を見ず。務に撫^{やす}んじ仁を懷き、實に勞想を増す。今庸昧^{はか}を揆^からず、試みに聖言を纂^あめ、彼の繁蕪を削り、其の遺漏を増す。具さに正量に依り、傍^{あまね}く行用を出し、各おの部類を顯し、仍お義舉に隨う。瑕^{きず}を指しては則ち過を知り宜しく改めるべく、理を摘^とみては則ち擇^{あまね}ぶことの蹤有るを思い、時務は則ち廣く厥^その儀を樹て、同廢は則ち略して名相を題す。本より世に行わると雖も、理に於いて未だ陳べず。故に復た相從いて、文義を勒開す。余老いたり。恐らくは徒らに日晷を移し、妄りに正功を損ね、益無きの辭に耽滯し、以て涯^{あき}り有るの命を送らん。誠に可ならざるなり。大集法行の言、律頒常一の教、此^こにして審らかにせざれば、餘は竟に何をか言わん。

題する所の曇無德とは、中梵の本音、唐言もて之を譯せば、名づけて法鏡と爲す。部の謂いは黨類の別名、運の起^{はじまり}は正法の初位なり。四分は即ち説の斷章、律と言うは乃ち行所詮の教なり。彼の繁略に對するが故に刪補と題し、彼の潛務に對するが故に隨機と曰う。羯磨は天音、人翻じて業と爲し、凡そ百の被ぶ所、成濟ならざるは莫し。且く大略を開し、廣要は後の如し。

「譯文」

考えてみると釋尊は世に出現され、まことに三界の繫縛を取り拂って清淨にし、我への執着をなくし、顛倒した考えを静めるといふ教えを言葉として示した。それ故「その教えとは」、三學の教えを述べ示し、八正道を明らかにし、出家・在家の四部の衆の履むべき清らかな訓戒を示し、出家の五衆の正しい生活規則を樹立し、「それらは」迷いの世界の重い

扉を開き横切って、有頂天を高く飛び越える「教えに」他ならない。そうであれば佛道を學ぶには多くの位があるが、その中でも實に戒學は筆頭に位置付けられる。これこそ諸々の善行の廣い軌範であり據り所である。古くから佛一代の教説は、すべて二つに分類され示されてきた。化教は出家・在家に共通する教えであり、専ら信解の教えを開示するものである。行教は出家者を對象とする教えであり、ひたすら出家生活の務めを明らかにするものである。「戒學は」三輪（三種の教化方法）によって分類すれば憶念輪に収まり、四藏によって分類すれば毘尼藏に收められる。戒律の教えの意味内容によれば行教に分類され、文章形式によれば法聚に分類される。止持と作持の二つの善行の教えは名と實の關係が出家者に理解されず、受戒と隨戒は受戒が願で隨戒が行であることがその時々々の出家者に示されていた。よって先學や後學が口に唱え維持してきたが、その後時代はだんだんと衰え亂れ、時代とともに誤った理解がなされるようになった。

佛法が中國へ傳來してから、佛法を廣め修行に務めてきたことはまことに盛んであるが、戒本・羯磨（のテキストに關して）は、競って異説を主張している。これは實に、戒本は戒體を受けて止持戒をたもち出家者としての攝め修すべきことの極みであるし、羯磨は戒行を實踐して作持戒をたもち量處の要であることによる。戒本の經緯については別に述べたとおりである。「諸家によって編集された」羯磨の諸本のあり様についてはこれから内容を詳しく示したい。あるものは單翻のもの（古本。曹魏の時代に譯出されたもの）、あるものは律文によるもの（今の一家の本。律本によって直ちに誦するもの）、あるものは意味内容に準じているもの（慧光律師の書き記したもの。冒頭に「三藏」とあるもの）、あるものは律の緣起によるもの（法願律師が後に書き記したもの。子注を多く付けているもの）である。諸本を對校してみると、底本の作成に混亂があり、それぞれに増と減や繁と略があり、互いに長所と短所がある。翻譯が單一であるものは「比較検討すべきものがないから」戒文の趣旨を見失い、「他のテキストに」包含されれば特色が見えにくい。律本に依るものは筋道立ち典據もあるが、前後の次第が整理されておらず困惑し易い。意味内容に準ずれば筋道を踏み外すことはないものの、佛意を分かりにくくさせてしまう缺點がある。律の緣起によるものは完備しているようで

あるが、別の解釋をしているに過ぎない。これら（四種類の諸本）は皆具體的な事柄に沿ってその都度意味を尋ねたり讀み上げたりすることもできるが、長所・短所の違いがはっきりせず、ただ書物として收載することはできるものの、まことに實踐の軌範とはならない。また律本によって疏を作っても、不正確な言葉が多く引かれ、文にしたがって意味を探ろうとしても、注釋者としての器に出逢うことが少ない。近年に至っても「彼らの疏を」繼承して新たに作成する者がいて、律文の新解釋が盛んであるが、空しく言葉を費やすのみで、具體的な事柄（行事）に至ると未だにその歸着點を見ない。務めはげんで、人を救わんとする仁心を抱いている反面、實に徒勞感ばかりが増している。

今、凡愚を思わず、試みに佛說を集め、その煩瑣な點を削り、不足している點は増廣して、ことごとく正しい根據（正量）に基づいて、あまねく作法（行用）の具體例を示して、それぞれテーマごとに明瞭に分類し、その上で意味にしたがって按排した。缺點があればそれを指摘して間違ひは誤りとして改め、正しい理があれば熟慮して依り所とし、當世に必要な務めであればその作法を確立し、當世に必ずしも必要でない事柄は省略してその題名のみを示すことにする。もとより世に實踐されているといっても、正しい意味内容が説明されているわけではない。だから、本来の順序にしたがって羯磨文の意味するところを取りまとめて開示する。私は老いてきた。いたずらに時間ばかりが過ぎ、妄りに佛の教えの功德を損ね、意味のない言葉に沈溺し、限りある命をむなしく送っている。誠によろしくないことである。『大集經』に説かれる法行（菩薩行）としての教説や、『四分律』の常爾一心の教えが、今になっても世の出家者に明瞭に説明できないのであれば、それ以外の事柄になると何も語り得ないことになるう。

題字の「曇無德」とは、中インドの本音であり、唐の言葉で譯せば「法鏡」という。「部」は黨類^{ブル}の別名であり、その部派の興起は正法の時代の初めの頃である。「四分」は全體の區分のことであり、「律」は行が明らかにされる教え（行教）のことである。廣律の繁略に對して「繁を」「刪」「り」「略を」「補」「う」と題し、廣律が具體的實踐について不明瞭であることに對して「隨機」と名付けた。「羯磨」はインドの音であり、中國の人々の言葉では「業」と譯し、およそすべ

ての業が果を成立させる。ここにしばらく大略を開き示したので、より詳しい要點は後に示すとおりである。

〔語註〕

- 1 【利見】 見るによし。會うに益がある。『易』乾「飛龍在天、利見大人」。『續高僧傳』明律篇論「試爲論曰、自法王之利見也、將欲清澄二死、剪除三障。所以張大教網、布諸有流」(T50, 620a)。『釋門歸敬儀』「序曰、自法王之利見也、必以靜見爲先。故論云、何處何時、誰起此見。一切諸見、佛悉斷故。文良證也」(T45, 854c)。
- 2 【界繫】 三界の繫縛。『俱舍論』「十八界中、幾欲界繫、幾色界繫、幾無色界繫。……繫謂繫屬、即被縛義」(T29, 007b)。
- 3 【倒】 四顛倒。無常を常とし、苦を樂とし、無我を我とし、不淨を淨とするなど、顛倒して物事を考えること。
- 4 【四部】 出家・在家の男女。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。
- 5 【五衆】 比丘・比丘尼・式叉摩那・沙彌・沙彌尼。
- 6 【重關】 重く閉ざされた扉。門。阿含部『大般涅槃經』「我等從今、誰爲歸依。猶若嬰兒、失於慈母。三惡道徑、日就開闢。解脫之門、方巨重關。一切衆生、沈淪苦海。亦如病人、遠於良醫。又似盲者、失所牽導。我等既去無上法王、煩惱之賊、日見侵逼」(T01, 205b)。灌頂『觀心論疏』「或修觀時、懈怠心生、不能開悟、當加精進。夫建小事、心不決至、尙不能成。況欲排五住之重關、度生死之大海、而不勤勞」(T46, 617a)。道宣『離垢慧菩薩所問禮佛法經序』「惟夫、幔幢難偃、三界由此輪迴。愛水未清、四惑因茲流洎。自非獨拔、開士出有至人。何能裂愛網而關重關、質深疑而啓昏趣」(T14, 698b)。
- 7 【極有】 三界中の無色界の頂點。元照『四分律羯磨疏濟緣記』「無色天頂、謂之極有」(X41, 084b)。
- 8 【化教】 經や論に説かれる人々を佛道に導く教え。『四分律行事鈔』序「顯理之教、乃有多途。而可以情求、大分爲二。一謂化教、此則通於道俗、但汎明因果、識達邪正。科其行業、沈密而難知、顯其來報、明了而易述。二謂行教、唯局於內衆、定其取捨、立其綱致、顯於持犯、決於疑滯。指事曲宣、文無重覽之義。結罪明斷、事有再科之愆。然則二教循環、非無相濫。學宗以判、理自彰矣。謂內心違順、託理爲宗、則準化教。外用施爲、必護身口、便依行教。然犯化教者、但受業道一報。違行教者、重增聖制之罪。故經云、受戒者罪重、不受者罪輕。文廣自明、所以更分者、恐迷二教之宗體、妄述業行之是非。故立一門、永用鐫別」(T40, 003ab)。淨影寺慧遠『大乘義章』「化教所説、名修多羅。行教所説、名曰毘尼。汎宣理事因果是非、是化教也。辨彰行儀、是行教也」(T44, 469a)。
- 9 【信解】 佛説に對する信仰と理解。吉藏『法華義疏』「種種信解者、始名爲信、終稱爲解。又鈍根名信、利根名解」(T34, 471b)。

- 10 【行教】戒律などの身口業を律する教え。注8【化教】参照。
- 11 【三輪】釋尊の神足・憶念・說法による三種の教化。『四分律』受戒健度「時世尊、度此千梵志、授具足已、將至象頭山中、於象頭山中、有千比丘僧、以三事教化。一者神足教化、二者憶念教化、三者說法教化」(T22, 797a)。『大智度論』「復次須菩提、我以佛眼、見東方如恆河沙等諸菩薩摩訶薩、入大地獄、令火滅湯冷、以三事教化。一者神通、二者知他心、三者說法」(T25, 679a)。法礪『四分律疏』「三事教化者、彰此等比丘、假時處及伴、而得漏盡故。一神足教化者、謂身通令廣生信。二憶念教化者、謂以他心通、知衆生心欲、應機授樂。三說法教化者、謂以漏盡通、正教起行斷漏」(X41, 711b)。道宣『四分律含注戒本疏』「有人言、如來化用、必約三輪、創通道務、要先神足、爲無信也。由蒙俗愚識、未曉正邪、雖爲闡揚、事如聾聵、故須顯異駭、動耳目畏威拜手信是聖人。身雖伏從、智開無路、故說法爲無解也。神解乃明、煩惑猶結、非可口說、爲得清除、義須依行、剋證在己、故須憶念、爲無證也。……今此戒學、是後輪收」(X39, 714c-715b)。
- 12 【四藏】經・律・論・雜藏の四。
- 13 【法聚】法のあつまり。健度 (skandhaka, khandhaka) の意譯。ここでは部類別に集められた書物の形式を指す。元照『四分律羯磨疏濟緣記』「且就本律、二衆戒本、二十健度、皆名法聚。準五百結集文、比丘事、聚在一處、名比丘戒本。尼戒亦然。受戒法、聚在一處、名受戒健度、乃至諸健度亦爾。健度梵言、即翻法聚。是則一部始末、通歸法聚」(X41, 084c)。
- 14 【止作兩善】止持戒と作持戒を受持すること。『四分律行事鈔』持犯方軌篇「言止持者、方便正念、護本所受、禁防身口、不造諸惡、目之曰止。止而無違、戒體光潔、順本所受、稱之曰持。持由止成、號止持戒。如初篇之類。二明作持、惡既已離、事須修善。必以策勤三業、修習戒行、有善起護、名之爲作。持如前解」(T40, 091a)。
- 15 【受隨二戒】受戒と隨戒。『四分律行事鈔』隨戒釋相篇「受謂壇場戒體、隨謂受後對境。護戒之心、方便善成、稱本清淨故也」(T40, 062c)。同「三者戒行、謂受隨二戒。遮約外非、方便善成、故名戒行。然則受是要期思願、隨是稱願修行。譬如築營宮宅、先立院牆周匝。即謂壇場受體也。後便隨處營構盡於一生。謂受後隨行。若但有受無隨、直是空願之院、不免塞露之弊。若但有隨無受、此行或隨生死。又是局狹不周。譬同無院室宇、不免怨賊之穿窬也。必須受隨相資、方有所至」(T40, 054b)。
- 16 【浮訛】浮ついて悪い方向へ變化していくこと。『大唐内典錄』歷代衆經傳譯所從錄の序「譯從方俗、隨俗所傳、多陷浮訛、所失多矣」(T55, 219c)。
- 17 【開務】「開物成務」の略。萬物の道理を開發して務めを成し遂げる。『周易』繫辭上「子曰、夫易何爲者也。夫易開物、成務、冒天

下之道。如斯而已者也。是故、聖人以通天下之志、以定天下之業、以斷天下之疑。『續高僧傳』志寬傳「加以開務誘引、弘濟爲業。道俗胥悅、慶其幸遇」(T50, 543b)。『續高僧傳』曇無最傳「佛法中興惟其開務。後不測其終」(T50, 625a)。『續高僧傳』空藏傳「乃鈔摘衆經大乘要句、以爲卷軸。紙別五經三經、卷部二十五、總有十卷。每講開務、極增成學。開義兩持、偏無迷忘」(T50, 689c)。道宣『四分律含注戒本疏』「故能兼津五衆、覆燾群萌、開務攝持、允符玄旨」(X39, 710c)。元照『四分律含注戒本疏行宗記』「開務即各布行教」(X39, 711a)。元照『四分律羯磨疏濟緣記』「自漢至唐、涉于九代、對西曰東、大國曰夏、或弘傳三藏、或立法行事、皆謂開務」(X41, 085a)。

18 【別所陳】道宣による『四分律含注戒本』の「序」、ならびに『四分律含注戒本疏』の「序」に、道宣當時までに流布していた戒本に三種ないし四種あったことが記されている。『四分律含注戒本』序「逮乎曹魏之末、戒本創傳、終於隋運之初、芟改者衆。或依梵本、或寫隸文、或以義求、或以緣據。讎校諸說、成務蒙然、濫罔前脩、翳昏後學、梵本則文旨乖互、方言未融。準律則得在宗歸、失於辨相。義求雖有深會、未靜論端。緣據似是具周、止存別見」(X39, 709b)。『四分律含注戒本疏』序「蘊結西土、千有餘年、譯傳東夏、將四百載。諸有傳授、同異非無。元魏季曆、慧光律師、隨義約文、重出一本。首題歸敬者是也。此與姚秦覺明所出頗得相符。高齊末祀、法願律師、誦律計文、又出一本。略於歸敬、首題戒德者是也。斯則三本行世、弘魏者多。見心紛擾、于今未靜。考覈諸集、蓋不足陳。經遠大觀、義無讎抗」(X39, 711c-712a)。

19 【衆氏】諸家。元照『四分律羯磨疏濟緣記』「衆氏猶言諸家」(X41, 085a)。『大唐內典錄』歷代所出衆經錄目の序「今所撰錄、該括衆氏、勘閱正僞、研訪遺逸、僞無所取」(T55, 336b)。

20 【曹魏所翻者】曹魏の康僧鎰譯『曇無德律部雜羯磨』(T22所收)と曇諦譯『羯磨』(T22所收)を指すと考えられる。

21 【一家、依本直誦】道宣が『四分律刪補隨機羯磨』を編集する際に基にしたテキストを指すか。允堪・元照の注釋は解釋が一致していない。允堪『正源記』「一家依文者、即曹魏曇諦於洛陽集題云、羯磨一卷出曇無德律。以結大界爲首受曰、增乞牒入羯磨。魏郡礪師、受持此本、分爲兩卷、并造義釋」(X40, 788c)。元照『濟緣記』「二依律者、祖師之世、別有一家、列次文句、一依律本。即下明受曰法云、近世諸師、不加乞辭、準律直誦、頗符今注。祖師所集、承用此本、但立篇次、以類集之。彼本依律緣起、隨有隨錄、無有義類。故下斥云前後易惑是也」(X41, 085ab)。すなわち允堪は先の「曹魏に翻する所の者」を康僧鎰譯の羯磨とし、「今の一家」を曇諦譯とするのに對して、元照は「今詳鎰諦二本、竝是單翻、俱出曹魏、意以此句、通收二本」(X41, 085a)と述べて「曹魏に翻する所の者」を鎰と諦の二本としている點で兩者の見解が異なる。

22 【光師所述】北魏の慧光（四六八―五三七）の編集した羯磨。『續高僧傳』慧光傳「又再造四分律疏百二十紙、後代引之爲義節。并羯磨戒本、咸加刪定、被於法侶、今咸誦之」（T50, 608a）。

23 【願師】法願（五二三―五六一）。

24 【執據】道理を根據として直言する。

25 【藏跡】あとをくらしかくすこと。志鴻『四分律搜玄錄』「藏、迹可嫌者、若當律無文、准用他部教迹。今乃不用他部、而以義加者、以義翳文、名爲藏迹。凡義以擁聖文、可嫌甚也」（X41, 852b）。

26 【同廢】ともに廢止する。

27 【大集法行之言】『大方等大集經』寶女品「世尊、云何菩薩修行法行。寶女、菩薩摩訶薩不捨親舊、知恩報恩憐愍一切、有歸依者終不捨棄、至心念於菩提之道、修於忍辱、難施能施攝取衆生慈心護戒、思惟善義護持正法、樂法念法持法樂靜、獨處空閑心無悔退、善護衆生淨身口意、爲四無量發大莊嚴、常勸衆生於菩提道、凡所講論先讚大乘、不先許人後生悔心、清淨其行知足少欲、不慳不妬不斷聖種、心無諍訟了知因果、信聞戒施慙愧智慧、親近善友隨師長教、心無憍慢、恭敬禮拜長老有德、離貪患癡我及我所、常念佛法僧施戒天、得供養時其心不高、常勤修行六波羅蜜空無相願諸善方便、不見我常衆生壽命士夫之相、修四念處乃至八正道分、是名菩薩修行法行」（T13, 037c-038a）。

28 【律頌常一之教】『四分律』衣健度「佛告諸比丘、慎汝心念、攝持威儀、此是我教。云何比丘慎汝心念。若比丘觀內身身意止、精勤攝持念不散亂、調伏貪嫉世間憂惱、觀外身身意止、精勤攝持念不散亂、調伏貪嫉世間憂惱。觀內外身觀受心法亦如是。如是比丘得正心念。云何攝持威儀。比丘若出若入屈伸俯仰、執持衣鉢若飲若食若服藥、大小便利、若眠若覺、若來若去、若坐若住、若睡若覺、若語若默。常爾一心、是謂比丘攝持威儀」（T22, 856a）。『四分律』雜健度「比丘有如是聖戒得聖諸根、於食中能知止足、初夜後夜精進覺悟、若在晝日若行若坐、常爾一心念除諸蓋。彼於初夜若行若坐、常爾一心念除諸蓋。彼於中夜側右脇累脚而臥、念當時起、繫想在明、心無錯亂、至於後夜便起思惟若行若坐、常爾一心念除諸蓋」（T22, 963c-964a）。『續高僧傳』明律篇論の末尾「律又述云、常爾一心念除諸蓋。固復懷斯試紋、微有箴銘。將用體鏡如流。且復昭彰于後耳」（T50, 622c）。

29 【羯磨天音、人翻爲業、凡百所被、莫不成濟】元照『四分律刪補隨機羯磨疏』「初釋名者、所言羯磨者、中梵本音、此翻爲業。業謂成濟前務、必有達遂之功。故明了論中、亦同翻業。現今譯經、聲傳羯磨、必翻稱業」（X41, 088a）。

（戸次頭彰）

『四分律比丘尼鈔』序 (X10, 706ab)

〔釋文〕

原夫別解脫戒、始制鹿野之初、毗尼法藏、終被鶴林之後。窯治七衆、藻鏡四依、慈風扇於五天、德音播於三界。繇是坦群類之夷途、拯含靈之弱喪、爲四生之標幟、作六趣之舟航者也。

時有愛道一人、舍夷五百。宿樹芳因、嘉聲遠著、深明業果、妙達苦空。迺能厭惡生死、訶毀家法、憑仗尊親、請佛求度。蓋大聖玄鑑、知有自行之功、闕無弘傳之利。故逆止於內心、恐將生於外結。姨母情樂道門、愛重福田之服。自毀髮容、瞻戀祇桓之室。殷勤三請、佛遂許之、正法理合千年、度尼減其五百。阿難憂泣、請度出家。佛令遵崇八敬、虔奉三尊、愛道聞持、正法弗墜。泊如來晦跡、慧日潛暉、女人戒德、漸將訛替。逢緣起障、解境生迷、遂有明暗異途、昇沈殊趣。故知、浮海棄囊、巨壑終爲難渡、涉途毀足、長路實不易行。若非精翫護持、戒品理難牢固。

余忝預道門、早承師訓。自慨、庸識闇短、冥若夜遊、竭愚不已、稍染毫縻。每一事可觀、輒再詳心首、施身口之關鑰、識持犯之龜鏡。務存至簡、逐事省功。

恐大本難通、勞而寡效。故制之以限分、遵之以積漸。猶天地二化、始合於自然、齊魯二變、終臻於至道。若文義俱辨、復非鈔者所明、今輒研覈諸篇、撮其樞要、立章三十、勒成三卷。今所撰者、用四分爲宗。斯文不具、更將諸部補闕、易簡爲義、兼以人語會通。餘之不盡、文露可尋。

〔訓讀〕

原ぬるに夫れ別解脱戒は、始めて鹿野の初めに制せられ、毗尼の法藏は、終に鶴林の後に被^{およ}ぶ。七衆を宰治して、四依を藻鏡とし、慈風は五天に扇ぎ、德音は三界に播^はく。是れに繇^より群類の夷途^{たい}を坦^たらにして、含靈の弱喪を拯い、四生の標幟と爲りて、六趣の舟航と作る者なり。

時に愛道一人、舍夷五百有り。宿^{しゆく}に芳因を樹てて、嘉聲遠きより著われ、深く業果を明かにして、妙く苦空に達す。迺^なち能く生死を厭惡し、家法を訶毀し、尊親に憑仗し、佛に請いて度きんことを求む。蓋し大聖玄鑑もて、自行の功有るも、闕きて弘傳の利無きを知る。故に逆め内心に止め、將に外結を生ぜんとするを恐る。姨母は情道門を樂^{ねが}ひ、福田の服を愛重し、自ら髮容を毀ち、祇桓の室に瞻戀す。殷勤に三たび請い、佛は遂に之を許して、正法は理合に千年なるべきも、尼を度せば其れ五百を減ぜんとす。阿難は憂泣し、度して出家せしめんことを請う。佛は八敬を尊崇し、三尊に虔奉せしめ、愛道は聞持し、正法隆ちず。如來跡を晦まし、慧日は暉きを潛すに泊び、女人の戒徳、漸く將に訛替せんとす。縁に逢いて障りを起し、境より解かれんとして迷いを生じ、遂に明暗途を異にし、昇沈趣^{みち}を殊にする有り。故に知んぬ、海に浮び囊を棄つるは、巨壑終に渡り難しと爲し、途を涉り足を毀つは、長路實に行き易からずと。若し精翫護するに非ずんば、戒品は理として牢固なり難し。

余忝くも道門に預かり、早に師訓を承く。自ら慨く、庸識闇短にして、冥きこと夜遊^{やう}くが若く、愚を竭して已まず、稍く毫藤に染まるを。一事觀るべき毎に、輒ち再び心首を詳らかにし、身口の關鑰を施し、持・犯の龜鏡たるを識る。務めて至簡に存し、事を逐いて功を省く。

恐るらくは大本通じ難く、勞して效寡し。故に之を制するに限分を以てし、之に遵うに積漸を以てす。猶お天地二化し、始めて自然に合し、齊魯二變し、終に至道に臻るがごとし。文義俱に辨ずるが若きは、復た鈔者の明らかにする所にあらず。今輒ち諸篇を研覈し、其の樞要を撮り、章三十を立て、勒して三卷と成す。今撰する所の者は、四分を用つて宗と爲す。斯の文具わらざれば、更に諸部を將^{もつ}て闕を補い、易簡を義と爲し、兼ねて人語を以て會通す。餘の盡さざ

るあれば、文露尋ぬべし。

〔譯文〕

別解脱戒を尋ねてみると、鹿野苑（サルナート）において初めて法を説いた時に制定され、釋尊の説いた律の説教は、ついにクシナガラのの鶴林において釋尊が入滅するまで説き續けられた。七衆（比丘・比丘尼・沙彌・沙彌尼・式叉摩那・優婆塞・優婆夷）を陶冶して、人の四依（出世の凡夫・須陀洹・斯陀含の人・阿那含の人・阿羅漢の人）を導きとし、慈悲の教えの風はインド全土に扇ぎ廣まり、釋尊の言葉は三界（欲界・色界・無色界）に響き渡った。これより衆生の行くべき道を安堵せしめ、迷える衆生を救い、四生（胎生・卵生・濕生・化生）の指標となり、六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天）を超越する渡し舟となったのである。

釋尊がいた當時、大愛道（マハー・ブラジャーバティー）と釋迦族の女性五百人がいた。「大愛道達は」宿世の因縁によって「出家したいと願う」善き因を起こし、良き聲ほまれははるか過去の世より顯れて、善き果を深く明かにして、苦・空・無我の理法を妙く悟っていた。生死の輪廻を離れ、世俗の縛りを棄てて、釋氏の尊族として、釋尊に得度を求めた。釋尊は、大愛道等には「得度によって」出家者として修行し悟りを得る功德は有るが、人々に佛法を弘め傳えて利益を齎ふかさないことを玄い智慧によって知っていた。それゆえ「釋尊は大愛道の」出家を求める心を内に起こすに止めさせ、外界に出ると障りを生じさせることを恐れられたのである。叔母は佛道に入ることを心より願ひ、人々に福德を齎す袈裟を大切に思い、自ら剃髪して、祇園精舎において釋尊を仰ぎ慕う心を示した。懇ろに三たび請うたので、かくて釋尊は女性の出家を許されたが、「次のようにも言われた、これによって」正法は千年間續くはずが、比丘尼を得度させたことで五百年を減損するであろうと。阿難は心配して泣き、度して出家させていただきたいと願ひ出た。釋尊は、八敬戒を尊びて遵ひ、謹んで佛・法・僧の三寶に仕えることを教え、大愛道はこれを聞いて違えず、正法の時が減ることは無かった。

如來が涅槃に入つて俗世から姿を隠され、その太陽の如き智慧の輝きも見えなくなると、女人が戒律をたもつことによつて得られる功德は、次第に衰え失われていった。様々な因縁に逢つて煩惱を起し、煩惱の世界からの解脱を願つて却つて迷いを生じ、かくて生まれる世界ははっきりと明と暗に分かれ、天上世界に昇るか地獄に沈むか赴くところが異なることとなった。だから煩惱の海に沈まぬよすがは浮き袋たる戒律にあるにも拘わらず、それを棄て去ってしまうことで、大海を渡ることはいかに叶わず、道を進もうとして足を傷つけてしまつては、悟りへの長途も困難な道となることを知るのである。もし戒律を謹み喜んで護持しなければ、固く守ることが難しいことは當然の道理である。

私は忝くも佛門に入り、早くに師から教えを受けたが、知識は凡庸な愚か者であり、あたかも闇夜に道を歩くかのやうに何らも見えず自覺もせず、愚考を盡くすばかりで、纏れ合つた藤蔓に絡みつかれるやうに「煩惱に」染まつてしまふことを慨嘆する者である。一つの對象を觀察する毎に、三業の初たる心のはたらきを再三再四詳らかにし、身と口の行爲を整える戒律を實踐し、持戒と犯戒の基準を知るのである。意と身・口の三業を至簡の境地におき、餘計な物を省きひたすらに修行してきた。

四分律のような廣本は煩雜で一貫して理解し難く、勞して效なしとなることを恐れている。地と天と二つながら道に教化されて始めて無爲自然の境地に合致し、齊と魯の二國がそれぞれ一變して道義を重んずる國となつたやうに、大きな枠組みを示し、項目立てて「理解の進むやうに」説明をした。戒文の意味をすべて明らかにするなどとは、また私の目的とは違う。今はそれに關係する様々な文獻を詳しく調べて、その篇の樞要の部分を探り集めて、三十の章を立て、まとめて三卷とした。ここに撰した『四分律比丘尼鈔』は、四分律を根本としている。本書に不備があれば、さらに他の部派由來の各律典によつて缺けている箇所を補い、簡易を旨として、他の戒律注釋の言葉を用いて意味を解釋した。その他に意を盡くしていない箇所があれば、關連する文を示して考究してもらいたい。

【語註】

- 1 【鹿野】 釋尊がサルナートで、初めて衆生に説法して得道させたことをさす。
- 2 【鶴林】 釋尊がクシナガラで入滅した時、四圍の娑羅雙樹林が白色に枯死し、白い鶴が群がるように見えたということから、釋尊の入滅なども意味する。
- 3 【五天】 五天竺の略。東西南北中の五方の天竺。
- 4 【德音】 『續高僧傳』卷九・釋羅雲傳「躬臨法席、咸誦德音。」(T50, 493a)
- 5 【含靈】 靈魂を含むもの。衆生のこと。
- 6 【弱喪】 『莊子』內篇・齊物論「予惡乎知惡死之非弱喪、而不知歸者邪。」ここでは迷える衆生のこと。郗超「奉法要」(『弘明集』卷一三)「本起經云、九十六種道術、各信所事。皆樂安生、孰知其惑。夫欣得惡失、樂存哀亡、蓋弱喪之常滯、有生所感同。」(T52, 088c)
- 7 【愛道】 摩訶波闍波提(マハー・ブラジャーバティー)のこと。釋尊の叔母であり、乳母。比丘尼となった最初の女性。本文以下、大愛道等の出家について述べている。佛陀耶舍・竺佛念等譯『四分律』卷四八・比丘尼犍度第十七「爾時世尊、在釋翅瘦尼拘律園。時摩訶波闍波提、與五百舍夷女人俱。詣世尊所、頭面禮足、却住一面、白佛言、善哉世尊、願聽女人、於佛法中、得出家爲道。佛言、且止瞿曇彌。莫作是言。欲令女人、出家爲道。何以故。瞿曇彌、若女人、於佛法中、出家爲道、令佛法不久。……時摩訶波闍波提、聞佛在祇桓精舍、與五百舍夷女人俱、共剃髮被袈裟、往舍衛國祇桓精舍、在門外立、步涉破脚、塵土全身、涕泣流淚。……爾時阿難、聞世尊教已、即往摩訶波闍波提所語言、女人得在佛法中、出家受大戒。世尊爲女人、制八不可過法。若能行者、即是受戒。即爲說八事如上。摩訶波闍波提言、若世尊爲女人、說此八不可過法、我及五百舍夷女人、當共頂受。……摩訶波闍波提及五百女人、得受戒。佛告阿難、若女人、不於佛法出家者、佛法當得久住五百歲。阿難聞之不樂、心懷悔恨、憂惱涕泣流淚、前禮佛足、遶已而去。」(T22, 922c-923c)
- 8 【嘉聲】 『續高僧傳』卷三・釋慧淨傳「由是嘉聲遠布、學徒欽屬。」(T50, 442a)
- 9 【內心・外結】 竺佛念譯『出曜經』卷八・念品第六「內心城者亦當如是。常當三事防護。恐外結使賊來入境內。」(T04, 652b)
- 10 【正法理合千年、度尼滅其五百】 女性の出家により正法が一千年から五百年に減ったことについては註7を参照。また、瞿曇僧伽提婆譯『中阿含經』卷二八・中阿含林品瞿曇彌經第十「阿難。若女人不得於此正法、律中、至信、捨家、無家、學道者、正法當住千

年。今失、五百歳、餘有五百年。」(T01, 607b) にも同様の記述がある。

11 【遵崇】『續高僧傳』卷九・釋靈裕傳「朕遵崇三寶、歸向情深、恆願闡揚大乘、護持正法。」(T50, 496b)

12 【八敬】八敬戒のこと。女性の正式な出家を許す條件として釋尊が定めたとされる八種の規則。

13 【解境生迷】「解境」は「觸境」であらう。『續高僧傳』卷二九・興福篇・論に「豈得心用浮動、觸境増迷、妄計爲道。」(T50, 700b)とあり、また道世撰『法苑珠林』卷七六・十惡篇第八十四之四・惡口部第八・述意部第一にも「凡夫毒熾、悲火常然。逢緣起障、觸境生瞋。所以發言一怒、衝口燒心。損害前人、痛於刀割。乖菩薩之善心、違如來之慈訓。」(T53, 854a)とある。

14 【浮海棄囊】曇無讖譯『大般涅槃經』卷一一・聖行品第七之一「譬如有人、帶持浮囊、欲渡大海。爾時海中、有一羅刹。即從其人、乞索浮囊。其人聞已、卽作是念、我今若與、必定沒死。答言、羅刹、汝寧殺我、浮囊巨得。……菩薩摩訶薩護持禁戒、亦復如是、如彼渡人、護惜浮囊。」(T12, 432b) 慧遠述『涅槃義記』卷五「廣中先舉浮囊之譬、人喻菩薩、浮囊喻戒、海喻生死、羅刹喻於諸煩惱心、欲得破戒、怪而不與、喻持戒心。」(T37, 730b)

15 【毀足】佛陀耶舍譯『四分律比丘戒本』序「譬如人毀足、不堪有所涉、毀戒亦如是、不得生天人。欲得生天上、若生人間者、常當護戒足、勿令有毀損。」(T22, 1015b)

16 【毫藤】藤は葛藤をさす。煩惱の喩え。『出曜經』卷五・愛品第三「其有衆生、墮於愛網者、必敗正道、不至究竟、是故說愛網覆也。猶如葛藤纏樹、至末遍則樹枯。」(T04, 635b)

17 【身口之關鑰】『續高僧傳』卷一一・明律篇・論「若能關、鍵、身、口、附相攝持、虛蕩慮知、體道懷德、則安遠光憑、斯其人矣。」(T50, 631c-632a)

18 【至簡】江迺『諫鑿北池表』(『藝文類聚』卷九)「伏承當鑿北池及立閑道。雖湫陁陋小、用功甚微。又役不擾民、賦不及外。至、簡、至約、誠不可加。然於愚懷、實有眷眷。」

19 【天地二化、始合於自然】『老子』第二章「有物混成、先天地生。寂兮寥兮、獨立不改、周行而不殆。可以爲天下母。吾不知其名。字之曰道、強爲之名曰大。大曰逝、逝曰遠、遠曰反。故道大、天大、地大、王亦大。域中有四大、而王居其一焉。人法地、地法天、天法道、道法自然。」

20 【齊魯二變、終臻於至道】『論語』雍也「子曰、齊一變至於魯。魯一變至於道。」

21 【鈔者】道宣をさす。元照撰『四分律行事鈔資持記』卷上・一上「第十門標分中。鈔者、祖師自號也。」(T40, 176b)

- 22 【易簡】『易』繫辭上「易則易知、簡則易從。……易、簡、而天下之理得矣。天下之理得。而成位乎其中矣。」
- 23 【文露】『論衡』卷四・書虛篇「夫幽冥之實尙可知、沈隱之情尙可定、顯文、露書、是非易見、籠總并傳、非實事、用精不專、無思於事也。」

(松岡智美)

『大唐内典錄』序 (T55, 219a)

序文成立年＝唐高宗・麟德元年（六六四） 道宣年六十九

〔釋文〕

麟德元年甲子歲 京師西明寺釋氏 撰

原夫正法稱寶、誠有其由。良是出俗之津途、入眞之軌轍。所以歷劫英聖、仰之如父母、遂古沿今、隆之如日月。豈不以喪我倒之蹄筌²、窮無生之寶位³者也。⁴

自仙苑告成、金河靜濟、⁵數字群品、汲引塵蒙。隨機候而設謀猷、逐性欲而陳聲教、網羅一化、統括大千。受其道者難訾、傳其宗者易曉。

故尊者迦葉、集四籙於崛山、大智文殊、結八藏於圍表。⁶遂能流被來際、終七萬之脩齡、餘波東漸、距六百之嘉運。⁷

詳夫爰始梵文、負之億計香象、⁸今譯從於方言、大約五千餘卷。⁹遷貿更襲、澆薄互陳、卷部單重、疑僞凡聖、致使集錄奔競三十餘家。¹⁰舉統各有憲章、¹¹徵覈不無繁雜。今總會群作、以類區分、合成一部、開爲十例。¹²依條顯列、無相奪倫、文雖重張、義絕煩亂。

若夫大聖彝訓、其流曰經、述經敘聖、其流曰論。莫非徙滯之方略、會正之格言。¹³珍重則超生可期、疑謗則効尤斯及。故試銓廣、餘隨更陳。序之云爾。

〔訓讀〕

原ぬるに、夫れ正法の寶と稱えられしこと、誠に其の由あり。良に是れ俗より出ずるの津途、眞に入るの軌轍なり。

所以に歷劫の英聖、之を仰ぐこと父母の如く、古を遂め今に沿り、之を降ぶこと日月の如し。豈に以て我倒の蹄釜を喪て、無生の寶位を窮めざる者ならんや。

仙苑に成ずるを告げ、金河に靜濟してより、字を群品に敷き、塵蒙を汲引す。機候に隨いて謀猷を設け、性欲を逐いて聲教を陳べ、一化に網羅し、大千を統括す。其の道を受くる者は皆られ難く、其の宗を傳うる者は曉り易し。

故に尊者迦葉、四篋を崛山に集め、大智文殊、八藏を圍表に結ぶ。遂に能く來際に流被し、七萬の脩齡を終げ、餘波東漸してより、六百の嘉運を距つ。

詳かにするに夫れ爰に梵文に始まり、之を億計の香象に負い、今譯は方言に従い、大約五千餘卷なり。遷貿更々襲い、澆薄互々陳ね、卷部單重、疑僞凡聖は、集錄して奔競すること三十餘家ならしむるを致す。擧げ統べるに各々憲章あるも、徵覈は繁雜なくんばあらざるなり。今總べて群作を會め、類を以て區分し、一部を合成し、開きて十例と爲す。條に依りて顯かに列ね、相々倫を奪うなく、文重ね張ぶと雖も、義煩亂を絶つ。

夫の大聖の彝訓の若きは、其の流を經と曰い、經を述べ聖を敘ぶるは、其の流を論と曰う。滯れるを徙すの方略、正しきに會うの格言にあらざるはなし。珍重すれば則ち超生期す可く、疑謗すれば則ち効尤斯に及ぶ。故に試みに銓かにし廣め、餘は更々陳ぶるに隨う。之に序すと爾か云う。

〔譯文〕

正法が世の寶と稱えられるのは誠に由あつてのことである。正法は俗世を超え出づる出發地、眞に入る第一歩であればこそ良に寶と稱えられる。それがために歷代の英聖た人々は久しき昔よりまるで父母に對するように仰ぎ尊び、古の中に範を遂め、今の時代に據りつゝ、あたかも太陽と月とを上にいただくように隆んできた。それはまた自我への執着を説く妄説を消し去り、無生の寶位を窮めた人々にはかならない。

仙苑（鹿野苑）において釋尊が悟りを開き、クシナガラ（金河）のほとりにおいて涅槃に入り人々を濟（さ）われてより、字（ことば）によつて多くのの人々に教（し）えは敷（ひら）められ、蒙昧（もくまい）の衆生（しゆじやう）はおさめとられ導（う）かれた。世（よ）の人々の動（うご）きにつれて謀猷（もくし）は設（お）けられ、衆生（しゆじやう）の本性（ほんしやう）と欲望（よきぼう）に逐（したが）いつつ聲（こゑ）にのせて教（し）は陳（ちん）べられ、これらは釋尊（しやくそん）一代（いちだい）の教化（けわくわ）に網羅（もうら）され、大千（せん）世界（せかい）を統括（とうかく）するものである。その道（みち）を受ける者（もの）は嘗（こゝろ）られることなく、その宗（しゆ）を傳（た）える者（もの）はたやすく教（し）えに通（と）ずることができるようになった。

このために摩訶迦葉（まかか）尊（そん）者は、經律論（きやうりつろん）の三藏（さんざう）と雜藏（ざさう）とおさめた四（よ）つの篋（けつ）を耆闍崛山（きしゃくくつせん）に集（あ）め、大智（だいぢ）の文殊菩薩（もんじゆぼさつ）は、八部（はふ）の法藏（ほふざう）を鉄圍山（てつゐせん）の表（うへ）に結集（けつじふ）した。かくて「辟支佛（びやくしふ）の」七萬年（ななまんねん）の壽命（じゆみん）を持つ時代（じだい）が終（は）わる時まで未來（みらい）の世（よ）に流被（りゅうひ）められ、その餘波（よゐ）の中で東方（とうほう）中國（ちゆうこく）に傳（た）來（き）してより、六百年（むっぴゃくねん）の嘉き運（よきうん）が經過（かうぐ）したのである。

詳（くわ）かに述（の）べるならば、それはインド（いन्द）においては梵文（ぼんぶん）に始まり、億（いっ）をもつて計（かぞ）える香象（かうざう）に背負（か）われ、現在（げんざい）は中國（ちゆうこく）の言葉（ことば）に翻譯（おほしやく）されて、大約（おおよそ）五千卷（ごせんくわん）餘りとなつてゐる。時代（じだい）の變遷（へんせん）は更（さら）なるもの、それにつれて人（ひと）のこころも澆薄（うすうす）くなり、結果（けつぐわ）として、翻譯（おほしやく）された佛典（ぶつてん）の卷數（くわんすう）・部數（ぶすう）、翻譯（おほしやく）が單（ひと）一の譯（やく）に終（は）わつてゐるか・複數（ふくすう）の譯（やく）が重（かさ）ねられてゐるか、佛典（ぶつてん）翻譯（おほしやく）の疑（ぎ）・偽（ぎ）、凡（たゞ）・聖（せい）に關（か）わる眞偽（しんぎ）問題（もんだい）にわたつて、競（あ）ひあうように三十數種（さんじゆしゆしゆ）の經典（きやうてん）目錄（もくろく）が編纂（へんさん）された。これらはそれぞれに憲章（けんぢやう）を立てて系統的（ていしきてき）に佛典（ぶつてん）を收錄（しゆりよく）してゐるものの、その調査檢討（ちさうけんたう）の結果（けつぐわ）にどうしても繁雜（はんざ）未整理（みせいり）の嫌（きら）いがある。

今（いま）、これらの經典（きやうてん）目錄（もくろく）の内容（ないよう）を總合（そうごう）して、十例（じゆれい）の部類（ぶるい）をたてて區分（くぶん）し、一部（いちぶ）として編成（へんせい）した。各佛典（かくぶつてん）の來歷（らいりき）を十例（じゆれい）の項目（くむぐ）にそつて分類（ぶんるい）し明示（めいし）し、したがつて文章（ぶんぢやう）が重複（じゆうごう）することとなるが、それらの説明（せつめい）によつて翻譯（おほしやく）佛典（ぶつてん）にまつわるこれまでの煩雜（はんざ）且つ亂雜（らんざ）を絶（た）ち切（き）ることとならう。

そもそも大聖釋尊（だいせいしやくそん）の彝訓（おしえ）を記（し）したものは、その流（りゆう）を經（い）といい、經典（きやうてん）とそこに示（し）される聖（せい）を解（かい）き敘（しよ）べるものは、その流（りゆう）を論（ろん）という。これらはまことに疑惑（ぎわく）を解消（かいしゆ）する方略（はかりごと）略、正（ただ）しき法（ほふ）に合致（ごうぢ）する格言（ごごげん）であつて、これらを珍重（ちんじゆう）せばこの俗世（ぞくせい）を超（こ）え出（で）ることが可能（こふねい）となり、疑（ぎ）い謗（ぼう）ればその効尤（こがめ）はその身（み）に及（およ）ぶであらう。故（ゆゑ）に試（し）みにこれら佛典（ぶつてん）・集傳（しふでん）の數々（かずかず）を分類（ぶんるい）收集（しゆしふ）することによつて人々（ひと）に廣（ひろ）め示（し）し、その他のものはそれぞれ關連（くわんれん）するところに收載（しゆうざい）する。以上（いじやう）、序（しよ）として述（の）べる。

【語註】

- 1 【仰之如父母】『春秋左氏傳』襄公一四年「愛之如父母、仰之如日月。」
- 2 【我倒】現實の無常・苦・無我・不淨を、常・樂・有我・淨と執着する四つの誤り―四顛倒の第四道宣撰『四分律刪繁補闕行事鈔』卷下（之四）「瞻病送終篇第二十六」若持律者云、大德護持禁戒、順佛正言。能於像末、載隆三寶。正法久住、由大德一人。今者疾患綿久、恐將後世人誰不死。但恐無善。大德以善法自持、兼攝他人、諸佛自讚。豈唯言議。但當專志佛法、餘無妄緣。若法師者云、由大德說法教化、令諸衆生識知三寶四諦、開其盲眼、破其心病、光顯佛法、使道俗生信、能令作佛。又使正法久流、實大德之力。若禪師者云、佛法貴如說行、不貴多說多誦。又云、不以口之所言而得清淨。如說行者、乃是佛法。大德順佛正教、依教而修、內破我倒、外遣執著。此則成聖正因、勿先此業。如是等隨其學處、於後譽之。」(T40, 144b)
- 3 【蹄釜】『莊子』雜篇・外物「荃者所以在魚、得魚而忘荃。蹄者所以在兔、得兔而忘蹄。言者所以在意、得意而忘言。吾安得忘言之人而與之言哉。」
- 4 【無生之寶位】鳩摩羅什譯『仁王般若波羅蜜經』卷上・觀空品第二「爾時、大王復起作禮、白佛言、世尊、一切菩薩云何護佛果。云何護十地行因緣。佛言、菩薩化四生、不觀色如、受想行識如、衆生我人常樂我淨如、知見壽者如、菩薩如、六度四攝一切行如、二諦如。是故一切法性眞實空、不來不去、無生無滅、同眞際、等法性、無二無別如實空。」(T08, 825c)
- 5 【仙苑告成、金河靜濟】仙苑は仙人論處・仙人住處の略、鹿野苑の異名。釋尊成道の後、五比丘に行なった初轉法輪の地。波羅奈國（ヴァーナラーシ）東北のサルナート。金河は阿恃多伐底河の譯。釋尊入滅の地・拘尸那揭羅（クシナガラ）を流れる河。道世撰『法苑珠林』卷一〇〇・傳記篇第一・雜集部第三にほぼ同文が用いられている。「自仙苑告成、金河靜濟、數字群品、汲引塵囂。隨機候而設謀猷、逐性欲而陳聲教、綱羅一化、統括大千。受其道者難訾、傳其宗者易曉。遂能流被東夏、時經六百、翻譯方言、卷數五千。英俊道俗、依傍聖宗。所出文記、三千餘卷。莊嚴佛法、顯揚聖教、文華旨奧、殊妙可觀。歷代隱顯、部秩散落、雖有大數、不足者多。尋訪長安、減向千卷。唯聞、廬山東林之寺、即是晉時慧遠法師所造伽藍。綱維住持一切諸經及以雜集、各造別藏、安置竝足。知事守固、禁掌極牢。更相替代、傳授領數。慮後法滅、知教全焉。今隨所見聞者、具列如左（後見有者、冀補茲處）。」(T53, 1020b)
- 6 【尊者迦葉、集四篋於崛山、大智文殊、結八藏於圍表】鳩摩羅什譯『大智度論』卷一〇〇・釋曇無竭品第八九「復次、有人言、如摩訶迦葉、將諸比丘、在耆闍崛山中、集三藏。佛滅度後、文殊尸利、彌勒諸大菩薩、亦將阿難、集是摩訶衍。」(T25, 750b)

『法苑珠林』卷一一・千佛篇第五之五・結集部第十五（此別二部）・結集部第二「此中廣明結集、具有四時。第一依智度・金剛仙二論。如來在此鐵圍山外、共文殊師利及十方佛、結集大乘法藏。第二依菩薩處胎經及四分律等。如來初入涅槃、始經七日。大迦葉共五百羅漢、令到十方世界召得八億八千衆、共爲結集三藏。第三依智度論。如來入涅槃後、至夏安居初十五日。大迦葉共千羅漢、在王舍城、結集三藏。第四依四分律。如來入涅槃後、一百年內、爲跋闍子檀行十事。大迦葉共七百羅漢、在毘舍離城、結集三藏。此下四重、依經次第列出。庶將來哲不積餘也。」（T53, 373a）

失譯『撰集三藏及雜藏傳』「佛涅槃後、迦葉阿難於摩竭國僧伽尸城北、撰集三藏及雜藏傳。……佛涅槃後、迦葉阿難等、於摩竭國僧伽尸城北、造集三藏正經及雜藏經。常所云四篋者、合雜言也。凡二百首處。……」（T49, 001a-001a）

『廣弘明集』卷一・序「是以法湮三代、竝惟寡學所纏。故得師心獨斷、禍集其計。向若披圖八藏、綜文義之成明、尋繹九識、達情智之迷解者、則正信如皎日、五翳雖掩、而逾光矣。余博訪前敘、廣綜弘明。以爲江表五代、三寶載興、君臣士俗、情無異奉。是稱文國、智籍文開。中原周魏、政襲昏明、重老輕佛。信毀交質、致使工言既申、佞倖斯及。時不乏賢、剖心特達、脫穎拔萃、亦有人焉。」（T52, 007a~b）

7 【流被來際、終七萬之脩齡、餘波東漸、距六百之嘉運】前掲注5引『法苑珠林』卷一〇〇・傳記篇第一・雜集部第三に「終七萬之脩齡」の一句を除き、同様の文あり。

8 【億計香象】失譯『大方便佛報恩經』卷四・惡友品第六「復次、提婆達多雖復隨佛出家、嫉妬情深、規望利養。雖復能多讀誦六萬香象經、而不能免阿鼻地獄罪。」（T03, 147a）

9 【大約五千餘卷】『法苑珠林』卷一〇〇・傳記篇第一百・述意部第一「今列前後翻譯、總有一十八代所出衆經五千餘卷。佛法東流、三度滅法、失譯經本、三百一十部、五百三十八卷。」（T53, 1019b）

10 【三十餘家】『大唐內典錄』卷一〇・歷代所出衆經錄目第九「序曰、名教設位、戡濟淪亡。將使眞僞分流、邪正異轍。所以歷代道俗、崇重教門、皆敦編次、沿時無替。考校存沒、三十餘家、銓定人代、皆遵安錄。然彌天亞聖、道洽幽明、感神僧而示慈天、蒙印定而明注解。故能徵覈教旨、輕訛鑿而重淳風。商度句義、宗質文而排鄙野。致使遺文餘行、經累代而逾新。其德孔明、固略標擬。自餘後作、皆號命家、詞什繁略、難爲通簡。然相乘置位、代出新經。法俗贊述、無時不有。比多惰學、無暇博觀。競撮本經、少有通瞻。所以傳述義解、斯文蓋闕。然夫開信適道、權謀率先。導達化源、理兼俗典。故慧遠釋桓玄之疑、道林開郗超之信。僧會啓吳王之惑、次道弘宋主之心。沿彼迄今、代有其事。莫不雅引三際、陳報應如指掌、綜襲六經、明殃咎之倚伏。傍括子史、統詳譬喻。以近徵遠、用

俗悟道。知幾其神、在斯一舉。豈得埋名削迹、而不列挺者乎。今所撰錄、該括衆氏、勘閱正僞、研訪遺逸、僞無所取。非目無以定名遺篇、所求列卷、以彰可錄。敢敘由來、用陳有寄。想諸來鑒、復織組焉。」(T55, 336ab)

11 【憲章】慧皎撰『高僧傳』卷五・釋道安傳「安既德爲物宗、學兼三藏。所制僧尼軌範・佛法憲章、條爲三例。一曰行香定座上講經上講之法。二曰常日六時行道飲食唱時法。三曰布薩差使悔過等法。天下寺舍、遂則而從之。」(T50, 353b)

12 【十例】『大唐內典錄』は次の十項によって構成され、説明される。

「歷代衆經傳譯所從錄第一。謂、代別出經、及人述作無非通法、竝入經收。故隨經出。歷代翻本單重人代存亡錄第二。謂、前後異出、人代不同、又遭離亂、道俗波迸。今總計會、故有重單、緣敘莫知、致傳失譯。歷代衆經總攝入藏錄第三。謂、經部繁多、綱要備列、從映入藏、以類相從。故分大小二乘、顯單重兩譯。歷代衆經舉要轉讀錄第四。謂、轉讀尋翫、務在要博、繁文重義、非曰被時。故隨部撮舉、簡取通道、自餘重本、存而未暇。歷代衆經有目闕本錄第五。謂、統檢群錄、按本則無、隨方別出、未能通遍。故別顯目訪之。歷代道俗述作注解錄第六。謂、注述聖言、用通未悟、前已雖顯、未足申明。今別題錄、使尋覽易曉。歷代諸經支流陳化錄第七。謂、別生諸經、曲順時俗、未通廣本、但接初心。一四句頌、不可輕削故也。歷代所出疑僞經論錄第八。謂、正法深遠、凡愚未達、隨俗下化、有勃眞宗。若不標顯、玉石斯濫。歷代衆經錄目終始序第九。謂、經錄代出、須識其源。歷代衆經應感興敬錄第十。謂、經翻東夏、應感徵祥、而有蒙祐增信、使傳持遠惟。」(T55, 219a~b)

歷代衆經傳譯所從錄第一。謂く、代ごとに別けて經を出だし、及び人の述作の法に通ずるに非ざるなきものは、竝びに經に入れて收む。故に經に隨いて出す。

歷代翻本單重人代存亡錄第二。謂く、前後異り出で、人代同じからず、又離亂に遭いて、道俗波のごとく迸る。今總て計え會め、故に重・單あるも、緣敘知るなくして、傳えて譯を失うを致す。

歷代衆經總攝入藏錄第三。謂く、經部繁多なるも、綱要備さに列ね、帙に従いて入藏し、類を以て相從わしむ。故に大小の二乗に分け、單・重の兩譯を顯らかにす。

歷代衆經舉要轉讀錄第四。謂く、轉讀して尋ね翫^{あそ}ぶ^ぶでは、務めは要博に在り、繁文重義は、時に被^{おそ}ぶと曰うにあらず。故に部に隨いて撮舉し、簡びて道を通むるに取り、自餘の重本は、存すれども未だ暇あらず。

歷代衆經有目闕本錄第五。謂く、群錄を統檢するに、按本則ち無く、方に隨いて別に出だすも、未だ能く通遍ならず。故に別けて目を顯わし之を訪ぬ。

歷代道俗述作注解錄第六。謂く、注して聖言を述べ、用て未だ悟らざるものを通ぜしむ。前に已に顯らかにすと雖も、未だ申明するに足らず。今別けて錄に題し、尋ね覽るものをして曉ること易からしむ。

歷代諸經支流陳化錄第七。謂く、別生の諸經は、曲に時俗に順う。未だ廣本に通ぜざるものは、但だ初心に接せしむるのみ。一四の句頌も、輕がるしく削るべからざるが故なり。

歷代所出疑偽經論錄第八。謂く、正法は深遠にして、凡愚のもの未だ達らず、俗の化を下しくするに隨いて、眞の宗に勃るあり。若し標顯せざれば、玉石斯に濫れん。

歷代衆經錄目終始序第九。謂く、經錄は代々出づ。須く其の源を識るべし。

歷代衆經感應敬錄第十。謂く、經東夏に翻ぜられてより、應感徵祥ありて、祐けを蒙りて信を増し、傳持して遠く惟わしむ。

13 【會正之格言】『三國志』魏書卷四・魏書四・三少帝紀第四「齊王諱芳、字蘭卿。明帝無子、養王及秦王詢。……裴松之注「搜神記曰、……及明帝立、詔三公曰、先帝昔著典論。不朽之格言。其刊石於廟門之外及太學、與石經並、以永示來世。」

参考として『大唐内典錄』の所謂代錄に當る歷代衆經傳譯所從錄冒頭の序文と、『法苑珠林』卷一〇〇・傳記篇第一・雜集部第三に掲げる道宣著述目錄を、次に示す。

『大唐内典錄』歷代衆經傳譯所從錄第一之初

〔釋文〕

自敎流東夏、代涉帝朝、必假時君、弘傳聲略。然後玄素依緒、方開基構。明后重其義方、情存監護、闡君順其倫軌、相從而已。故始自後漢、爰洎巨唐、世變澆淳、宗猷莫二。皆欽承至訓、爲滅結之元標、體解玄圖、鏡死生之本據。故能傳度梵網、代代滋彰、斯即法施奔流、時時不絕。然則西蕃五竺、祖尚天言、東夏九州、聿遵鳥迹。故天書天語、海縣之所絕思、八體六文、大夏由來罕覩。致令昔聞重譯、方見於斯。然夫國史之與禮經、質文互舉、佛言之與俗典、詞理天分。

何以知耶。故佛之布教、說導爲先、開蒙解樸、決疑去滯、不在文華、無存卷軸。意在啓情理之昏明、達神思之機敏。斯其致也。諦聽諦聽、善思念之、吾當爲汝、分別解說、斯聖言也。善哉善哉、願樂欲聞、唯願世尊、分別解說、斯受法也。言重意得、不慮煩拏、但論正悟、莫敘文對。斯本經也。譯從方俗、隨俗所傳。多陷浮訛、所失多矣。所以道安著論五失易從、彥綜（↓琮）屬詞八例難及。斯誠證也。諸餘俗習、不足涉言。今錄彼帝世翻譯賢明、并顯時君信毀偏競、以爲初錄。且夫漢晉隋唐之運、天下大同、正朔所臨、法門一統。魏宋齊梁等朝、地分圯裂、華夷參政、翻傳竝出。至於廣部傳俗、絕後超前、卽見敷揚、聯耀惟遠。今則隨其時代、卽而編之。仍述道俗所撰、附之於後。庶將來同覩、其若面焉。都合一十八代、所出衆經、總有二千二百三十二部（七千二百卷。失譯經三百一十部五百三十八卷）。(T55, 219bc)

〔訓讀〕

教 東夏に流び、代々帝朝に涉りてより、必ず時君に假り、弘いに聲略を傳う。然る後、玄素依りて繕め、方に基構を開く。明后其の義方を重んじて、情監護に存し、闇君其の倫軌に順いて、相從のみ。故に後漢より始め、爰に巨唐に洎ぶまで、世々變ずること澆淳なるも、宗猷二なし。皆欽みて至訓を承け、滅結（結を滅す）の元標と爲し、體して玄圖を解り、死生の本據を鏡す。故に能く梵網を傳度し、代代滋々彰らかにして、斯に卽ち法施奔流し、時時に絶えず。然れば則ち西蕃五竺、祖りて天言を尙び、東夏九州、聿べて鳥迹に遵う。故に天書天語は、海縣の思いを絶えるところ、八體六文は、大夏由來覲ること罕なり。昔重譯を聞くものをして、方斯に見せしむるを致す。然れども夫れ國史と禮經は、質と文ともごも擧げらるるも、佛言と俗典は、詞と理天のごとく分かる。何を以て知るや。故に佛の教えを布くは、説き導くを先と爲し、蒙を開き樸を解き、疑いを決し滯りを去り、文華に在らず、卷軸に存するなし。意は情理の昏明を啓き、神思の機敏を達するに在り。斯れ其の致なり。「諦聽諦聽、善思念之、吾當爲汝、分別解說（諦かに聽け、諦かに聽け。善く思ひ之を念えよ。吾當に汝の爲に、分別解説すべし）」とは、斯れ聖言なり。「善哉善哉、願樂欲聞、唯願世尊、

分別解説(善きかな善きかな。願ねがい樂がいて聞かんと欲す。唯願ねがくは世尊、分別解説せよ)」とは、斯れ受法なり。言は意もて得るを重んじて、煩だ拏(煩は繁、拏は亂)を慮らず、但正悟を論ずるのみにして、文を敘べて對うるなし。斯れ本經なり。譯は方俗に従い、俗の傳(譯)する所に隨う。浮訛に陷ること多く、失う所多し。所以に道安論を著して五失従い易しとし、彥綜(↓琮)詞を屬つづりて八例及び難しとす。斯れ誠證なり。諸餘の俗習は、涉言するに足らず。今彼の帝世の、翻譯の賢明を録し、并びに時君の信毀の偏競を顯らかにし、以て初録と爲す。且つ夫れ漢晉隋唐の運に、天下大同し、正朔の臨む所に、法門一統す。魏宋齊梁等の朝は、地分れて圯やれ裂け、華・夷政に參まじわりて、翻傳並び出づ。廣部俗に傳(譯)せらるるに至りては、後に絶く前に超く、即ち敷揚せられて、聯つらなり耀はきて惟遠ただはるかなり。今則ち其の時代に隨い、即きて之を編む。仍りて道俗の撰する所を述べ、之を後に附す。庶わくは將來共に觀ること、其れ面まのあたりにするが若くならんことを。都合一十八代、(譯し)出す所の衆經、總べて二千二百三十二部(七千二百卷、失譯經三百一十部五百三十八卷)あり。

『法苑珠林』卷第一百・傳記篇第一・雜集部第三

注僧尼戒本二卷(疏記四卷)

注羯磨二卷(疏記四卷)

行事刪補律儀三卷

釋門正行懺悔儀三卷

釋門亡物輕重儀一卷

釋門章服儀一卷

釋門歸敬儀一卷

釋門護法儀一卷

釋氏譜略一卷

聖迹見在圖贊一卷

佛化東漸圖贊二卷

釋迦方志二卷

古今佛道論衡四卷

大唐內典錄十卷

續高僧傳三十卷

後集續高僧傳十卷

廣弘明集三十卷

東夏三寶感通記三卷

西明寺錄一卷

感通記一卷

祇桓圖ミヅ二卷

遣法住持感應七卷

右此二十二部一百一十七卷、皇朝西明寺沙門釋道宣撰。(T53, 1023bc)

(大内文雄)

『律相感通傳』(T45, 874ab XI05・40a・下~41a・上)

序文成立年=唐高宗・乾封二年(六六七)・道宣年七十二

〔釋文〕

余曾見晉太常于寶撰搜神錄述。¹晉故中牟令蘇韶有才識。咸寧中卒。乃畫現形於其家。諸親故・知友聞之、竝同集。飲噉言笑、不異於人。或有問者、「中牟在生、多諸賦述、言出難尋。請敘死生之事、可得聞耶。」韶曰、「何得有隱。」索紙筆、著死生篇。其詞曰、「運精氣兮離故形、神眇眇兮爽玄冥。³歸北帝兮造鄭京、崇墉鬱兮廓崢嶸。⁴升鳳闕兮謁帝庭、邇卜商兮室顏生。⁶親大聖兮項良成、希吳季兮慕嬰明。⁷抗清論兮風英英、敷華藻兮文璨榮。⁸庶擢身兮登崑瀛、受祚福兮享千齡。」¹⁰餘多不盡。初見其詞、若存若亡。

余見梁初江泌女誦出淨土・大莊嚴等三十餘經、逮于卽目、猶有斯事、往緣有幸。

近以今年二月末、數感天人、有若曾面。¹²告余云、「所著文翰、續高僧傳・廣弘明集等、裨助聖化、幽靈隨喜、無不讚貳。至於律部、抄錄疏儀、無足與貳。但於斷輕重物、少有疏失、斯非仁過、抑推譯者、如何以王貴衣、同於白衣俗服、相從入重、乃至氍毹、同法衣相量者、亦在輕收。且王著貴衣、同比丘之三衣也。¹⁴價直十萬者、故曰貴衣、用以施僧、可同輕限。白衣外道之服、¹⁵斯本出家者絕之。三衣唯佛制名、著者定得解脫。是故白衣俗服、佛嚴制斷。若有亡者、竝在重收。至於氍毹三衣、相量同三衣也。邊方開皮臥具、亦是三衣。¹⁶條葉在外、柔毛在內。寒酷之國、佛開爲道、必至布鄉、¹⁷還非輕限。可改前迷、宜從後悟。如來在日、尚有後制廢前。何況於今、不存迷悟之事也。」¹⁸

余問所從來。有一天人、來禮敬、敘暄涼已、曰、「弟子性王、名璠、是大吳之蘭臺臣也。會師初達建業、孫主卽未許之。令感希有之瑞、爲立非常之廟。于時天地神祇、咸加靈被、於三七日、遂感舍利。吳主手執銅餅、傾銅盤內。舍利所

衝、盤即破裂、乃至火燒鎚試、俱不能損。闕澤¹⁹・張昱²⁰之徒、亦是天人護助、入其身中、令其神爽通敏、答對諸允。今竝在天、弘護佛法爲事。弟子是南天韋將軍下之使者。將軍事務極多、擁護三洲之佛法²²、有門諍陵危之事、無不躬往和喻令解。今附和南。天欲卽來、前事擁隔、不久當至。且令弟子等共師言議。」

不久復有天來、云姓羅氏²³、蜀人也。言作蜀音、廣說律相。初相見時、如俗禮儀、敘述緣由、多有次第、遂有忽忘。

次又一天、云姓費氏、禮敬如前。云弟子迦葉佛時生在初天韋將軍下²⁴。諸天貪欲所醉、弟子以宿願力、不受天欲、清淨梵行、偏敬毘尼。韋將軍童眞梵行、不受天欲。一王之下有八將軍、四王三十二將、周四天下往還、護助諸出家人。四天下中、北天一洲少有佛法、餘三天下佛法大弘。然出家人多犯禁戒、少有如法。東西天下少有點慧、煩惱難化。南方一洲雖多犯罪、化令從善、心易調伏。佛臨涅槃、親受付囑、竝令守護、不使魔撓。若不守護、如是破戒、誰有行我之法教者。故佛垂誡、不敢不行。雖見毀禁、愍而護之、見行一善、萬過不咎、事等忘瑕、不存往失。且人中臭氣、上薰於空、四十萬里、諸天清淨、無不厭之。但以受佛付囑令守護法。佛尙與人同止。諸天不敢不來。韋將軍、三十二將之中、最存弘護。多有魔子魔女、輕弄比丘、道力微者、竝爲惑亂。將軍恹惶奔赴、應機除剪。故有事至、須往四王所。時王見皆起、爲韋將軍修童眞行護正法故。弟子性樂戒律、如來一代所制毘尼、竝在座中、聽受戒法。因問律中諸隱文義、無不決滯。然此東華三寶素有、山海水石往往多現。但謂其靈而敬之、顧訪來由、莫知投詣。遂因此緣、隨而咨請。且泛舉文相、以理括之。未曾博觀、不可以語也。

余少樂多聞希世拔俗之典籍、故搜神・研神・冥祥・冥報・旌異・述異・志怪・錄幽、曾經閱之、非疑慮。況佛布天人之說、心進勇銳之文、護助形神、守持城塔。事出前聞、非爲徒說。後諸緣敘竝依出而疏之。

〔訓讀〕

余 曾て晉の太常于寶の撰せし搜神錄の述を見る。晉の故中牟令蘇韶は才識有り、咸寧中に卒す。乃ち晝に形を其の

家に現わす。諸々の親故・知友 之を聞きて、竝びに同に集まる。飲み噉ひ言笑すること、人に異ならず。或いは問う者有り、「中牟は在生、諸々の賦述多し。言出づれば尋ね難し。請うらくは死生の事を敍されん、聞くを得べけんや。」詔曰く、「何ぞ隠すこと有るを得んや。」紙筆を索め、死生篇を著わす。其の詞に曰く、「精氣を運らせ故形を離れ、神は眇眇たりて玄冥に爽う。北帝に歸して鄧京に造り、崇墉は鬱として廓は崢嶸たり。鳳闕に升り帝庭に謁し、卜商に邇くして顔生に室す。大聖に親しみて項良成、吳季に希いて嬰明を慕う。清論を抗げ風は英英、華藻を敷きて文は璨瑩。庶わくは身を擢んで崑瀛に登り、祚福を受けて千齡を享けん。」と。餘多ければ盡くさず。初め其の詞を見るに、存するが若く亡きが若し。

余 梁初の江泌の女の誦出せる淨土・大莊嚴等三十餘經を見、即目するに逮び、猶斯の事有り、往緣幸有り。

近ごろ今年二月末を以て、數々天人に感ずること、曾て面するが若きもの有り。余に告げて云う、「著す所の文翰、續高僧傳・廣弘明集等、聖化を裨助し、幽靈隨喜し、讚悦せざる無し。律部に至りては、抄錄疏儀、與に貳するに足る無し。但だ輕重の物を斷ずるに於いて、少しく疏失有るのみ、斯れ仁の過ちに非ず、抑も推譯の者なればなり。如何にか王の貴衣を以て、白衣俗服に同じくし、相從りて重きに入り、乃至は氍毹は、法衣の相量に同じき者、亦輕きに在りて收めん。且つ王の貴衣を著るは、比丘の三衣に同じきなり。價直十萬なる者、故に貴衣と曰い、用て以て僧に施せば、輕きの限りに同じかるべし。白衣外道の服は、斯れ本より出家せる者 之を絶つ。三衣は唯だ佛のみ名を制せば、著る者は定めて解脱を得。是の故に白衣俗服は、佛 嚴に制斷す。若し亡き者有らば、竝びに重きに在りてむ。氍毹三衣に至りては、相量三衣に同じきなり。邊方に皮の臥具を開すも、亦是れ三衣なり。條葉は外に在り、柔毛は内に在り。寒酷の國、佛 開して道の爲にし、必ず布郷に至りては、還りて輕きの限に非ず。前迷を改むべきにして、宜しく後悟に従うべし。如來在りし日、尙お後に制して前を廢する有り。何ぞ況んや今に於いて迷悟の事を存せざらんや。」

余從りて來たる所を問う。一天人有り、來りて禮敬し暄涼を敍べおわりて、曰く、「弟子、性は王、名は璠、是れ大吳

の蘭臺の臣なり。會師の初めて建業に達するや、孫主即ち未だ之を許さず。希有の瑞を感じしめ、爲に非常の廟を立てん。時に天地の神祇、咸く靈被を加え、三七日に於いて、遂に舍利を感じず。吳主手づから銅餅を執り、銅盤の内に傾けるに、舍利の衝く所、盤即ち破裂し、乃至は火もて焼き鎚もて試みるも、俱に損なうこと能わず。闕澤・張昱の徒も、亦是れ天人護助し、其の身中に入り、其の神爽をして通敏ならしめ、答對をして諸允ならしむ。今竝びに天に在りて、佛法を弘護するを事と爲す。弟子は是れ南天章將軍下の使者なり。將軍事務極めて多く、三洲の佛法を擁護し、門諍陵危の事有れば、躬ら往き和諭し解せしめざる無し。今附して和南す。天は即ちに來らんと欲すれども、前事擁隔するも、久しからずして當に至るべし。且らく弟子等をして師と共に言議せしむ。」と。

久しからずして復た天の來たる有りて云う、姓は羅氏、蜀人なり、と。言は蜀音を作し、廣く律相を説く。初め相い見えし時、俗の禮儀の如く、緣由を敘述し、多く次第有るも、遂に忽忘する有り。

次いで又一天云う、姓は費氏、と。禮敬すること前の如し。云く、「弟子は迦葉佛の時生まれ、初天章將軍の下に在り。諸天は貪欲にして酔う所あるも、弟子は宿願力を以て、天の欲を受けず、清淨梵行にして、偏に毘尼を敬う。韋將軍は童眞の梵行にして、天の欲を受けず。一王の下に八將軍有り、四王に三十二將あり、四天下を周りて、往還し、諸々の出家の人を護助す。四天下の中、北天の一洲は佛法有ること少なく、餘の三天下は佛法大いに弘まる。然れども出家の人の禁戒を犯すこと多く、如法のもの有ること少なし。東西の天下は點慧有ること少なく、煩惱ありて化し難し。南方の一洲は犯罪多しと雖も、化して善に従わしむるに、心調伏し易し。佛涅槃に臨みしとき、親しく付囑を受け、竝びに守護せしめ、魔をして撓めしめず。若し守護せざれば、是くの如く破戒し、誰か我の法教を行う者有らんや。故に佛は誠を垂れ、敢えて行わずんばあらず。禁を毀つを見ると雖も、愍みて之を護り、一善を行うを見れば、萬過咎めず、事は瑕を忘るるに等しく、往失を存せず。且つ人中の臭氣、上は空に薰すること、四十萬里、諸天清淨にして、之を厭わざる無し。但だ佛の付囑を受け法を守護せしむるを以てなり。佛も尙お人と同止す。諸天敢えて來らずんばあ

ず。韋將軍三十二將の中、最も弘護を存す。多く魔子・魔女有り、輕んじて比丘を弄び、道力微なる者、竝びに惑亂を爲す。將軍恟惶して奔赴し、機に應じて除剪す。故に事の至る有れば、須らく四王の所に往くべし。時に王見て皆起つは、韋將軍の童眞行を修め正法を護るが爲の故なり。弟子 性は戒律を楽しみ、如來一代の制する所の毘尼、竝びに座中に在りて、戒法を聽受す。因りて律の中の諸々の隠れし文義を問わるに、滯を決せざるは無し。然れども此の東華に三寶素より有り、山海水石に往往にして多く現わる。但だ其の靈なるを謂いて之を敬い、顧みて來由を訪ぬるも、投諍するを知る莫きのみ。遂に此の縁に因りて、隨いて咨り請う。且く泛ねく文相を擧げ、理を以て之を括る。未だ曾て博く觀ざれば、以て語るべからざるなり。」

余 少くして多く希世拔俗の典籍を聞くを樂う。故に搜神・研神・冥祥・冥報・旌異・述異・志怪・錄幽、曾^か經て之を閱、疑い慮るに非ず。況んや佛は天人に布くの説、心進勇銳の文をや。形神を護助し、城塔を主持す。事は前聞に出で、徒説を爲すに非ず。後の諸縁敘、竝びに出づるに依りて之を疏す。

〔譯文〕

私はかつて晉の太常の干寶が撰した『搜神錄』の記述を見たが、次のようにあった。晉の元の中牟縣令の蘇韶は才識が有った。咸寧中に卒したが、晝には自分の家に姿を現した。親類や友人はそれを聞き、みな集まつてきた。飲み食いし物言い笑う様子は、人と變わらなかった。ある者が問うた。「中牟どのの生前、賦を多く作られた。言葉は出されても何を言っているのか尋ねるのは難しい。お願いしたいが死生の事を敘述して、教えてもらえるだろうか。」韶は「どうして隠すことがあろうか。」と言って、紙と筆を求めて、死生篇を著わした。その詞には次のように言う。「精氣をめぐらせて元の體を離れ、たましいは高遠にして奥深い境地にあって尊い。北帝のもとに歸して酆京に至れば、高々とした壁の如く天空にそびえたっている。鳳闕に昇って帝庭に拜謁し、子夏に近づき顔回の側にいる。大いなる聖人である項良

成に親しみ、吳季札に願ひ求め嬰明を慕う。清論をかかげ風は悠然と吹き、華藻を敷いて文はきらびやかである。願わくは身を超越させて崑瀛に昇り、祚福を受けて千齡を享受したいものだ。」他にも多くあるので、盡くは載せない。初めて其の詞を見たときは、あるのかないのか分からない半信半疑の思いであった。

私は梁初の江泌の女の誦出した浄土・大莊嚴等三十餘經を見たが、それを目にすると、なお同様のことがあって、以前からの縁を感じる。

近ごろ今年二月末に、しばしば天人に感通したが、初対面ではないような気がした。私に告げて次のように言った。「著した文章で、『續高僧傳』や『廣弘明集』等は、人々を教化する助けとなり、幽界の人々も喜んで、たたえない者はなかった。律部の抄録疏儀になると、いささか見劣りがする。但だ出家が所持しうる物の輕重を判斷する點においては、少し疎漏で失點があるくらいで、これはあなたの過ちではなく、譯語の問題である。いかにして王の高貴な衣服を、白衣の俗服と同じくし、重いほうに分け、あるいは氍毹は、法衣と同じように評價して、軽いほうにいろるかである。且つ王が貴衣を着るのは、比丘の三衣と同じである。價值が十萬もするので、貴衣といい、それを僧に施せば、軽いほうの部類と同じになる。白衣や外道の服は、本來出家した者はこれを絶つべきものである。三衣は佛がその名を制定したものであるから、着る者は必ず解脱することができた者である。このため白衣と俗人の服は、佛は厳しく制してこれを斷つた。亡くなった者がいれば、どちらも重いほうに分けておさめよ。氍毹三衣に關しては、三衣と同じである。邊境では獸の皮を臥具とすることを認めているが、これもまた三衣のうちに入る。枝葉が外側に在り、柔かい毛が内側に在る。ひどく寒い國も、佛は佛道のために着用を開し、必ず布郷となり、また軽いほうには入らない。前からの迷いを改めて、後から悟ったことに従うのがよいのである。如來の在りし日でさえ、なお後から決めたことにより前からのことを廢している。どうして今、迷っていたことを後から悟っていくようなことがないといえようか。」

私はどこから來たのかを問うた。一人の天人が、私の元に来て禮敬し時候の挨拶をした後、次のように言った、「私は

姓は王、名は璠といい、大吳の蘭臺の臣であります。康僧會師が初めて建業に來られた時、孫主（孫權）はすぐには布教を許しませんでした。希有の瑞祥を目の當たりに感じさせて、特別に廟を建てさせたのです。この時、天神地祇は、ごとく靈驗ある加護を加えて、二十一日目にして、遂に舍利に感通しました。吳主は自ら手に銅餅を執り、銅盤の中に舍利を傾け入れますと、舍利の衝突したところは、盤がすぐに破裂し、或いは火で焼いたり鎚でたたいてみたりもしましたが、何をしてでも破損することはできませんでした。闕澤や張昱の徒もまた天人が護り助けて、その身中に入り、心をすっきりとさせ、理にかなった應對ができるようになりました。今はどちらも天に在って、佛法を弘め護ることを仕事としております。私は増長天下の韋將軍配下の使者でありますが、將軍はなすべきことが極めて多く、三洲の佛法を擁護しており、争いごとや危急を要することがあれば、必ず自ら行き論し和解させます。今、拜してご挨拶申し上げます。韋將軍はすぐに來ようとしていますが、先立って処理すべき事柄に手間取っておられ、間もなく到着するはずで

す。しばらくは私どもが師と共に論議すべく、ここに参っております。」

しばらくしてまた天人が來たが、姓を羅氏といい、蜀の人である。言葉は蜀の訛りがあり、廣く律相を説いた。初めて會った時は、世俗世界の時候の挨拶をし、到來の因縁について述べており、筋道だったものであったが、私はそのまま忘れてしまっており、これ以上話すことはできない。

次にまた一人の天人がいて、姓を費氏といい、私に對して禮敬するのは前の者たちと同じで、次のように云った。「私は迦葉佛の時に生まれて初天韋將軍の下にいました。諸々の天は貪欲であり酔ってしまっていますが、私は宿願力によって、天が有する欲を受けず、清淨なる梵行により、ひとえに律を敬ってきました。韋將軍は童眞なる梵行により、天の欲を受けませんでした。一王の下に八將軍がいて、四王で三十二將となりますが、四天下をめぐる行き來し、諸々の出家人を護り助けます。四天下の中で、北天一洲は佛法があまり廣まっていますませんが、他の三天下は佛法は大いに弘まっております。しかしながら出家人が禁戒を犯すこと多く、如法の者は少數です。東西の天下には機敏にして聰明な

ものが少なく、煩惱があつて教化し難いのです。南方一洲は犯罪が多いのですが、教化して善に従わせており、心は調伏しやすいのです。佛は涅槃に臨み、みずから付囑し、並びに守護させ、魔に邪魔をさせませんでした。もし守護しなければ、このように戒は破られます。そうなれば、佛の法教を行う者は誰もいなくなるでしょう。故に佛が誠を垂れたからには、行わないわけにはいかないのです。禁を破ったのを見ても、愍んでこれを護ってやり、一善を行うのを見れば、萬過も咎めだてすることなく、今の一惡を忘れたかのようにし、以前の過失を問題にしません。さらに人中の臭氣は、上つて四十万里の空に漂い及び、清淨を性とする諸天は、これを厭わないものはいません。ただ佛の付囑を受けて法を守護させているからです。佛もまた人とともにおります。諸天は敢えて來ないわけではありません。韋將軍は、四天王の下の子三十二將の中で、最も佛法を弘護することに熱心です。多くの魔子・魔女が、比丘を輕んじ弄んで、道力が乏しい者は、みな惑い亂れるのです。將軍は心配して奔り赴いて、それぞれの場合に應じて拂いのぞくのです。故に報告すべきことがあれば、四王の所に往く必要があるのですが、そのとき四王は見て皆起ちあがるのは、韋將軍が童眞の行を修めて正法を護っているからなのです。私は心から戒律が護られることを願っており、如來が一代にして定めた律は、すべて座中にあり、戒法を聽受しています。ですから私は中國に紹介されていない律の中の諸々の隠された文義を問われれば、すべてお答えすることができます。しかしながら、この東華には三寶はもとから存在し、山海水石に瑞祥は往往にして多々現れます。ただその靈妙であることを謂いこれを敬うだけで、その由來を訪ねようとしても、天人が來ていたことすら知らなかったのです。この縁によって、申し上げます。しばらく廣く事柄の記録を擧げ、すじみちを立ててまとめたいと思います。しかし廣く見ているとはいえないので、詳しいことはお話できません。」

私は若いころから、世にもまれな世俗を超越した典籍を多く讀むことを願っていた。だから『搜神錄』・『研神記』（十卷・梁・蕭繹撰）・『冥祥記』（十卷・南齊・王琰撰）・『冥報記』（三卷・唐・唐臨撰）・『旌異記』（十五卷・隋・侯君素撰、續高僧傳）卷二（T50, 436a）参照）・『述異記』（十卷・南齊・祖冲之撰）・『志怪』（二卷・晉・祖台之撰）・『錄幽』（幽明錄）のことか。

二十卷、宋・劉義慶撰）は、かつてこれを閲讀し、疑いを抱くことはなかった。ましてや佛が天人に流布した教えや、心に勇猛心を持つて進めとの經文であればなおさらである。体と心を護り助け、城や塔^{まち}を守り維持した。事は前代より伝えられているものであって、いたずらに説を爲したものではない。後の諸縁の敘述はすべて記録の順にしたがつて條ごとに分けて書いた。

〔語註〕

- 1 【于寶】 正しくは干寶。『晉書』卷八三に立傳。
- 2 【搜神錄】 『搜神記』もと三十卷、のち散逸、明末に輯本二十卷。
- 3 【玄冥】 『禮記』月令「孟冬之月、日在尾、昏危之中、旦七星中。其日壬癸、其帝顓頊、其神玄冥。」
- 4 【北帝】 陶弘景『真誥』卷一五・闡幽微「鬼官之太帝者、北帝君也、治第一天宮中、總主諸六天宮。」
- 5 【酆京】 陶弘景『真誥』卷一五「羅酆山在北方癸地、山高二千六百里、周廻三萬里。其山下有洞天、在山之周廻一萬五千里。其上其下竝有鬼神宮室、山上有六宮、洞中有六宮、輒周廻千里、是爲六天、鬼神之宮也。」
- 6 【邇卜商兮室顏生】 卜商、字は子夏。顏生は顏回、字は子淵。『太平廣記』卷三一九・蘇韶傳「韶曰、言天上及地下事、亦不能悉知也。顏淵・卜商、今見在爲修文郎。修文郎凡有八人。」（王隱『晉書』）
- 7 【項良成】 項梁成。陶弘景『真靈位業圖』では第七右位、註に「作都酆宮頌者」とある。陶弘景『真誥』卷一五「項梁城作酆宮誦曰、……〔註〕……蘇韶傳曰、鬼之聖者有項梁城、賢者有吳季子。但不知項是何世人也。或恐是項羽之叔項梁、而不應聖於季子也。」引用文中の蘇韶傳は王隱『晉書』の前掲註6に續く部分。
- 8 【吳季】 吳季札。陶弘景『真靈位業圖』では第七左位に「北明公吳季札」、註に「吳王壽夢之子、闔閭之叔、延陵季子」とある。陶弘景『真誥』卷一五「吳季札爲北明公。」
- 9 【崑瀛】 崑崙山と瀛洲。仙人の居所。
- 10 【若存若亡】 『老子』第四章「上士聞道、勤而行之、中士聞道、若存若亡、下士聞道、大笑之、不笑不足以爲道。」『魏書』卷一一四・釋老志「始光初、奉其書而獻之、世祖乃令謙之止於張曜之所、供其食物。時朝野聞之、若存若亡、未全信也。崔浩獨異其言、因

師事之、受其法術。」

11 【江泌女誦出淨土・大莊嚴等三十餘經】南齊末の太學博士江泌の娘。『寶頂經』など二十一種三十五卷を譯したとされる。僧祐『出三藏記集』卷五 (T55, 040ab) 參照。道宣の著作では『大唐內典錄』卷四 (T55, 264)、『續高僧傳』卷一・譯經篇 (T50, 420ab) 參照。

12 【近以今年二月末、數感天人、有若曾面】『量處輕重儀』「近以乾封二年季春冥感天人。厥姓費氏、蜀人也。夏桀之時、生於南天王下、爲使者。親樂律相、躬受佛果、弘護爲懷。謂餘所撰鈔疏儀錄、其失蓋微。然於重輕、隨濫則有、雖隨律斷文非明了、是翻譯過、豈是學人。可改前迷、宜從後悟。如毘毘體量、乃遍三衣。中國不開、偏被寒土。」(T45, 845a)

13 【斷輕重物】『四分律刪補隨機羯磨』卷下・諸分衣法篇第八「七斷輕重物(十誦病人死無看病者、取衣物浣洗曝卷攤徐擔入衆中。律云、彼持亡者衣物、來在衆中、當作是言)大德僧聽、某甲比丘(彼此)、住處命過所有衣物此住處現前僧應分(如是三說毘尼母云、並取衣物在僧前、著已遣一人處分、可分物不可分物、各別一處)。正明處分(佛言若比丘死。若多知識若無知識、一切屬僧。若有園田・果樹・別房、及屬別房物銅瓶・銅盆・斧鑿・燈臺・繩床・坐褥・臥褥・毘毘・車輿、守僧伽藍人水瓶・澡罐・錫杖・扇、鐵作器・木作器・陶作器・皮作器・竹作器、及諸種種重物、並不應分屬四方僧。毘毘長三肘廣五肘毛長三指、剃刀衣鉢坐具針箔俱夜羅器、現前僧應分之。律文正斷如此。餘有不出者、當於諸部律論聯類斷判。當觀律本判意不容緩急自欺。必欲廣知具如量處重輕物儀中)。俱夜羅器者(謂減益次益小益又餘鉢盂器皿)。」(T40, 505c-506a)

14 【三衣】失譯『分別功德論』卷四「或曰、造三衣者、以三轉法輪故。或云爲三世。或云爲三時故、故設三衣、冬則著重者、夏則著輕者、春秋著中者、爲是三時故、便具三衣。重者五條、中者爲七條、薄者十五條。若大寒時、重著三衣可以障之。或曰亦爲蚊虻蟻子故設三衣。」(T25, 440c)『四分律刪補闕行事鈔』卷下一・二衣總別篇第十七「分別功德論、爲三時故制有三衣、冬則著重、夏則著輕、春則著中、亦爲諸蟲故。」(T40, 105a)

15 【白衣外道之服】『量處輕重儀』本「若純色者應分(亦準上解、如三衣相量者、毘有厚薄。厚者過三衣量入重、減者得有隨道入輕、被則不爾、全是重收。長衣不開、被非淨施。故是俗物非出道用。若通開者、與俗不殊。故諸俗服・白衣服・外道衣並不開裔、深有大意、恐壞道也。無問厚薄大小、白衣・外道之服並入重收。律中、比丘著此二服、至佛所言、此是頭陀端嚴法、願佛聽。佛言、汝等癡人、避我所制、更作餘事、自今已去、一切白衣・外道服不得畜著。」(T45, 845ab)

16 【邊方開皮臥具、亦是三衣】『四分律刪補闕行事鈔』卷下一「毘毘、長五肘、廣三肘、毛長三指入輕。此寒雪國中曲開、毘毘相同

- 袈裟、條葉具足、毛内葉外。乃至皮作亦然。故開皮爲臥具、此卽三衣也。」(T40, 114c) 佛陀耶舍共竺佛念等譯『四分律』卷三十九・皮革捷度之餘「時諸比丘至白衣舍、白衣爲敷皮囊。比丘有畏慎心、念言、佛不聽我等坐皮上。諸白衣言、我等更何處得別坐。諸比丘白佛、佛言、聽在白衣舍得坐。」(T22, 846c)
- 17 【布郷】『量處輕重儀』本「邊方皮衣開畜、無三衣相、何必在輕。若至布郷、皮還入重。邊方開坐、何必在輕。」(T45, 846b)
- 18 【會師】康僧會。孫權との間の逸話は、僧祐『出三藏記集』卷一三(T55, 096b)・慧皎『高僧傳』卷一(T50, 325a-c)。
- 19 【闕澤】『三國志』卷五三に立傳。康僧會との逸話については、『集古今佛道論衡』卷甲・前魏時吳主崇重釋門爲佛立塔寺因問三教優劣事一(T52, 365a)を参照。
- 20 【張昱】『三國志』に名は見られない。康僧會との逸話については、僧祐『出三藏記集』卷一三(T55, 096c)・慧皎『高僧傳』卷一(T50, 325c-326a)。
- 21 【神爽】たましい。顔之推『顏氏家訓』卷五・歸心篇「夫有子孫、自是天地閒一蒼生耳、何預身事。而乃愛護、遺其基址、況己之神爽、頓欲棄之哉。」
- 22 【三洲】四洲から北俱盧洲を除いたもの。
- 23 【羅氏】『律相感通傳』「又問、涪州相思寺側、多有古跡、篆銘勒之、不識其緣。答曰、迦葉佛時有山神、姓羅、名子明、蜀人也。舊是持戒比丘、生憎破戒者、發諸惡願、令我死後作大惡鬼、瞰破戒人、因願受身、作此山神。多有眷屬、所主土地、東西五千餘里、南北二千餘里、年瞰萬人已上。此神本曾爲迦葉佛兄、後爲弟子、彼佛憐愍、故來教化。種種神變、然始調伏、與受五戒。隨識宿命、因不瞰人。恐後心變。故佛留跡、育王於上起塔、在山頂、神便藏於石中、塔是白玉所作。其神見在、郭下寺塔、育王所立(事見付囑儀)。」(T45, 878b)
- 24 【南天章將軍】南天は增長天。韋將軍は韋琨。增長天の下の八將軍の一人で、三十二將軍の筆頭。道世『法苑珠林』卷十・千佛編「又有天人韋琨、亦是南天王八大將軍之一臣也。四天王合有三十二將、斯人爲首。」(T53, 354a)

(松浦典弘)

『集古今佛道論衡』序 (T22, 363a1b)

序文成立年Ⅱ唐高宗・龍朔元年（六六一）道宣年六十六

〔釋文〕

集古今佛道論衡序^a唐龍朔元年於京師西明寺實錄^b

若夫無上佛覺、迥出樊籠、超三界而獨高、截四流而稱聖。故使隄封所漸、區寓統於大千、聲教所覃、沐道霑於八部。所以金剛御座、峙閭浮之地心、至覺據焉、布英聖之良術。遂有天人受道、龍鬼歸心、挹酌不相之方、散釋無明之患。

然夫聖人所作、起必因時、時有邪倒之夫、故即因而陶化。天竺盛於六諦、神州重於二篇。遂使儒道互先、眞僞交正、自非入證登位、何由分析殊途。致令九十六道、競飾澆詞、六十二見、各陳名理。在緣或異、大約斯歸、莫不謂無想爲泥洹、指梵主爲生本。故二十五諦、開計度之街衢、六大論師、立神我之眞宰。居然設教、億載斯年、攝統塵蒙、九土崇敬。考其術也、輕生而會其源、論其行也、封固而登其信。故有四韋陀論、推理極於冥初、二有天根、尋生窮於劫始、臆度玄遠、冒罔生靈。致有赴水投巖、坐熱臥棘、吸風露而曰仙、袒形體而號聖、守死長迷、莫知迴覺。

如來哀彼黔黎、降靈赤澤。曜形丈六、金色駭於人天、敷揚四辯、慧解暢於幽顯。能使魔王列陣、十軍碎於一言、梵主來儀、三輪摧於萬惑。於是鑠腹戴爐之輩、結舌伏於道場、敬日重火之徒、洗心仰於覺路。舍衛城側、大偃邪鋒、堅固林中、傾倒枯穴。能事既顯、獎務弘通、玉關揚正道之秋、金陵表乘權之瑞。清涼臺上、圖以靈儀、顯節園中、陳茲聖景。度人立寺、創廣仁風、抑邪通正、於斯啓轍。

于斯時也、喋喋黔首、無敢抗言、瑣瑣黃巾、時褻異議。然其化被不及於龍勒、名位無踐於槐庭。王何達其上賢、班馬

隆其褒貶⁴⁰。安得與夫釋門相抗、雷同⁴¹混迹⁴²者哉。斯何故耶。良以博識既寡、信保常迷⁴³。今則通觀具瞻、義必爽開前惑⁴⁴。且夫其流易曉、闕澤⁴⁵之對天分⁴⁶、其理難迴⁴⁷、孫盛之談海截⁴⁸。然猶學未經遠、情弊疎通⁴⁹、邪辯逼眞、能無猜貳。孔丘之在東魯、尙啓虛盈⁵⁰、卜商之據西河⁵¹、猶參疑聖⁵²。自餘恆俗、無足討論。今以天竺胥徒、聲華久隔、震旦張葛、交論寔繫⁵³。故商確由來、銓衡敍列、筆削蕪濫⁵⁴、披圖藻鏡。總會聚之、號曰佛道論衡⁵⁴、分爲上中下三卷⁵⁵。如有隱括、覽者詳焉。

〔校勘〕

a 集古今佛道論衡序 集古今佛道論衡實錄 (宋・元・明・宮・磧) b 唐龍朔元年於京師西明寺實錄 唐釋道宣撰 (宋・元・宮) 唐釋道宣述 (明) c 樊籠 籠樊 (宋・元・明・宮・磧) d 正 喪 (宮) e 玄 懸 (宋・元・明・宮・磧) f 祖 祖 (大正藏) 祖 (宋・元・明・宮・磧) g 體 骸 (宋・元・明・宮・磧) h 靈 雲 (宋・宮) i 十 千 (宋・元・明・磧) j 路 教 (宋・元・明・宮・磧) k 枯 巢 (宋・元・明・宮・磧) l 將 (宋・元・明・宮・磧) m 陵 相 (宋・元・明・宮・磧) n 權 機 (宋・元・明・宮・磧) o 國 陵 (宋・元・明・宮・磧) p 班 班 (大正藏) 班 (宋・元・明・宮・磧) q 迴 通 (宋・元・明・宮・磧) r 逼 通 (宋・元・明・磧) s 十 十 (大正藏) 十 (宋・元・明・宮・磧) t 確 推 (宋・元・明・宮・磧) u 筆削蕪 筆削無 (宋・元・明・磧) 筆削濫 (宮) v 上中下三 甲乙下四 (大正藏) 上中下三 (宋・元・明・宮・磧)

〔訓讀〕

集古今佛道論衡の序

唐龍朔元年 京師の西明寺に於いて實錄す

夫の無上の佛覺、迥かに樊籠より出づるが若きは、三界を超えて獨り高く、四流を截ちて聖と稱せらる。故に隄封の漸ぶ所をして、區寓 大千を統べ、聲教の覃ぶ所をして、沐道 八部を霑わしむ。所以に金剛の御座、閻浮の地心に峙

し、至覺焉れに據りて、英聖の良術を布く。遂に天・人 道を受け、龍・鬼 心を歸し、不相の方を挹酌し、無明の患を散釋する有り。

然るに夫れ聖人の作す所、起は必ず時に因り、時に邪倒の夫有り、故に即ち因りて陶化す。天竺 六諦を盛んにし、神州 二篇を重んず。遂に儒・道をして互いに先んじ、眞・僞をして交々正しからしむるも、入證登位に非らざるよりは、何に由りて殊途を分析せんや。九十六道をして、競いて澆詞を飾り、六十二見をして、各々名理を陳べしむるを致す。縁に在りては或いは異なるも、大約斯れ歸し、無想を謂いて泥洹と爲し、梵主を指して生本と爲さざる莫し。故に二十五諦、計度の街衢を開き、六大論師、神我の眞宰を立つ。居然として教を設け、斯年を億載にし、塵蒙を攝統し、九土崇敬す。其の術を考うるや、生を輕じて其の源に會し、其の行を論ずるや、封固して其の信に登る。故に四韋陀論、理を推して冥初を極め、二有天根、生を尋ねて劫始を窮め、玄遠を臆度し、生靈を冒罔する有り。水に赴き巖に投じ、熱に坐し棘に臥し、風露を吸いて仙と曰い、形體を袒わにして聖と號し、死を守りて長く迷い、迴覺を知る莫きこと有るを致す。

如來彼の黔黎を哀み、靈を赤澤に降す。形を丈六に曜かせ、金色 人天を駭かせ、敷きて四辯を揚げ、慧解 幽顯に暢ぶ。能く魔王をして列陣せしむるも、十軍 一言に碎かれ、梵主をして來儀せしめ、三輪 萬惑を摧く。是に於いて腹を鏝い爐を戴くの輩、舌を結びて道場に伏し、日を敬い火を重んずるの徒、心を洗いて覺路を仰ぐ。舍衛城の側に、大いに邪鋒を偃せ、堅固林の中に、傾けて枯穴を倒にす。能事既に顯らかにして、獎務弘いに通まり、玉關に正道の秋を揚げ、金陵に乗權の瑞を表す。清涼臺の上、圖くに靈儀を以てし、顯節園の中、茲の聖景を陳ぬ。人を度し寺を立て、創めて仁風を廣め、邪を抑え正を通き、斯に於いて轍を啓く。

斯の時に于けるや、喋喋たる黔首、敢えて抗言する無く、瑣瑣たる黃巾、時に異議を褰ぐ。然るに其の化被は龍勒に及ばず、名位は槐庭を踐む無し。王・何 其の上賢に達し、班・馬 其の褒貶を隆んにす。安ぞ夫の釋門と相い抗い、

雷同して迹を混^{まじ}うるを得んや。斯れ何の故ぞや。良に博識既に寡^{すくな}く、信に常迷に保^{やす}んずるが以^{ゆえ}なり。今は則ち通觀具瞻すれば、義として必ず前惑を爽開す。且つ夫れ其の流の曉^{さと}り易きこと、闕澤の對^{かんだく}の天分なるがごとく、其の理の迴^{めぐ}らし難きこと、孫盛の談の海截^{かいせつ}なるがごとし。

然れども猶お學未だ遠きを経^{おそ}めざれば、情は疎通を弊^{おほ}い、邪辯も眞に逼^{せま}れば、能く猜貳無きがごとし。孔丘の東魯に在りて、尙お虚盈を啓き、卜商の西河に據りて、猶お疑聖に參ずるがごとし。自餘の恆俗、討論するに足る無し。今以えらく天竺の胥徒、聲華久しく隔るも、震旦の張・葛、交論寔^{きんじ}に繋ぐと。故に由來を商確し、敍列を銓衡し、筆^しして蕪濫を削り、圖を藻鏡に披^{ひら}かん。總會して之を聚め、號して佛道論衡と曰い、分ちて上中下三卷と爲す。如し隱括有らば、覽る者焉れを詳かにせよ。

〔譯文〕

集古今佛道論衡の序

唐・龍朔元年 京師の西明寺において實錄した。

かの鳥籠のような束縛の世界より解脱した尊き佛陀は、煩惱世界（三界||欲界・色界・無色界）を飛び超え誰よりも抜きんで、諸々の煩惱（四流||欲流・有流・見流・無明流）をたち切り聖と稱^たえられている。それゆえ「その教化を受ける」疆域は三千大千世界を統括するまでに廣がり、その聲教は八部衆（クシャトリア、バラモン、長者居士、修行者、四天王、忉利天、魔王、梵王）を教化するまでに及ぼされた。金剛座は閻浮提^{えんぶだい}の地上の中心に確固として存し、佛陀はそこに坐してすぐれた良術^{おしえ}を行き渡らせたのである。かくして天・人は教えを受け、龍・鬼は歸心し、あらゆる事物は空であるとする藥方をくみ取り、「迷いの根源である」無明^{うみ}の患^{うれ}いを解消した。

ところで、いったい聖人の行爲は必ず時に應じてはじまり、それと同時に邪見の凡夫が出現するため正しい方向へと

教え導くものである。そこで印度ではヴァイシェーシカ學派の六つの原理の教え（六諦）が盛んに行われ、中國では『老子道德經』二篇の教えが重んぜられた。そうして儒教と道教とが優位を競い、「諸學派が所説の」眞偽の判定をやり合ったが、聖者の境地に入った賢聖でなければ、これらの途のちがいを明瞭に區別することなどできない。「そのため、印度にあつては」九十六の外道が輕薄な言葉を競い飾り立て、六十二の様々な見解があらわれ互いに論理を主張し合った。異なる條件の下にそれぞれの見解があらわれたが、おおむね論旨は無想天を悟りの境地、梵主を生の根本とする考えに歸一している。ゆえにサーンキヤ學派は二十五の原理を数え上げることによって眞理を追究する方法を示し、六派哲學は神我なる主宰者を立てた。そして人々に久しきにわたって伝えられて行くことを願ひ、蒙昧の凡夫をおさめ世界中で尊び敬われてきた。その學問について考察してみると、現實の生命を輕んじて生の根源を會得しようとするものであり、その實踐のありかたを論究してみると、「體や靈魂を」封じ込めて「惡業の侵入を防ぎ」心を清淨にするというものである。だから、四種のヴェーダの教理は理論を推し進めて世界誕生以前を極めようとし、二つの天根への信仰は生命を探究して世界の始まりを窮めようとし、深淵で高遠なる眞理を根據なく推し量り、生命あるものを冒瀆した。「その結果」水に入ったり、巖より身を投じたり、熱所に坐したり、棘の上に臥したり、風や露を吸って仙人といったり、裸體となり聖と號したり「といった苦行者たちがあらわれ」、生死に執着して迷いの世界から抜け出ず、悟りの世界に向かうことを理解していない狀況を招いたのである。

如來はこのような衆生を哀れみ、カピラ城（赤澤）に降生された。一丈六尺の金色に輝く姿は人や天の世界をおどろかせ、四種の自由自在な辯舌によって慧解が幽と顯の世界に示された。十軍（十種の煩惱）を率いてやってきた魔王は佛陀の一言の下に屈伏し、そして梵天が來て「説法を勸請したため」佛陀の三輪（身口意の三業の働き）が世に示され、衆生のあらゆる惑いが打ち碎かれた。こうして腹を鐵板で覆ったり、爐を頭に戴いたり、太陽や火を崇拜したりする外道の輩は、菩提道場に坐す佛陀の前に言葉を失ひ平伏し、心の穢れを洗い去って佛陀の悟りへの道を仰ぎ尊んだ。シュラーヴァ

ステイー（舍衛城）の側で外道のよこまな論鋒を折伏し、「クシナーガラ」の堅固林（沙羅雙樹）の下で論敵の巢窟を覆した。「このように」佛陀は生涯をかけて教えを示され、僧衆の務め勵むべき道も大いに弘められ、玉門關（甘肅・敦煌）にゆたかな八正の道が傳えられ、金陵（江蘇・南京）では「康僧會によって呉の孫權に對して」めでたき方便の力が示された。「さらに後漢の都洛陽では」清涼臺の上や顯節園の中に佛陀の御影が描かれた。かくして中國でも僧尼を度し、寺宇を建立し、佛陀の仁風をひろめ、邪見を抑えて正しい教えを世に通め、ここに「人々がのっとり歩むべき」轍を啓いたのである。

この時、「中國で佛教を認めるかについて」日頃喧しいものも特段に物言わず、取るに足らぬ道士たちが時々異議を申し立てた。しかし、道士たちの教化は「陽關や玉門關のある」龍勒の地を出るほどのものではなく、彼らの名や位も朝廷にのぼるものではない。「確かに」王弼や何晏は上賢たる老子について明らかにし、班固や司馬遷は春秋褒貶の義によって老子を盛んに評論している。だからといって、「道教が」佛教と張り合うものとし、「このような意見に」附和雷同することなどできないのである。その理由はなにか。彼らは博識に及ばず、迷いの世界に安住しているからである。いま「佛道二教に關する」議論を通覽してみれば、これまでの惑いをはっきりと解消するはずである。ましてや、佛教の理解し易さは呉の闕澤が「呉主に對して佛教が儒教・道教より優れていることを」はっきりと對えているように、道教のくだくだした分かり難さは西晉の孫盛が整齊として談じているように自明なのである。

しかしながら、幅廣く學んでいなければ、理解をくもらせるし、よこしまな辯舌も眞に逼れば、疑う餘地なく信じ込ませてしまう。孔子ですら東魯では浮き沈みがあり、卜商（子夏）も西河で孔子と同じ聖人だと間違われたようにである。他の凡庸の人々「が聖人とはどのような存在であり、正しい教えとはいかなるものか判断できないの」は論ずるまでもない。今思うに、天竺の論者の聲譽は遠くなって久しく、中國の張陵・葛洪を繼ぐもの（道士）の議論は續いている。それゆえ、それらの論點の由來を調べ、事の順序次第を整え、文章の無駄を削り、「佛教護持の」藻鏡として示そ

う。ここにまとめ上げて「佛道論衡」と呼び、上中下三卷に分けた。もし訂正すべき点があれば、読者らに詳らかにして頂きたい。

【語註】

- 1 【樊籠】 陶淵明『歸園田居』「久在樊籠裡、復得返自然。」道宣『釋門歸敬錄』濟時護法篇第二「皆成正覺、迥出樊籠。」(T45, 86b)
- 2 【峙】 慧琳の『一切經音義』は、「峙」の誤字と指摘する。本書撰述當初より「峙」字であったことが知られるが、字義解釋としては慧琳のいう「峙」字の意に従うべきであろう。慧琳『一切經音義』卷八四・集古今佛道論衡第一卷〈序〉(T54, 851b) 参照。
- 3 【歸心】 『論語』堯曰「興滅國、繼絕世、舉逸民、天下之民歸心焉。」
- 4 【不相之方】 「方」は藥のこと。「不相」の意は解し難いが、「不著相」のことか。鳩摩羅什『大智度論』卷九四・釋畢定品「汝等所著、是法性空、性空法中、不可得著、不著相是空相。」(T25, 75c)
- 5 【六諦】 六句義ともいう。インド正統バラモン哲學の六體系(六派哲學)のひとつ勝論學派(ヴァイシエシカ、衛世師)が立てた世界の構成・諸事象や人間の認識・行爲などを六つの存在カテゴリー(＝句義・諦)によって分析・解明しようとする多元論的合理思想。
- 6 【殊途】 『易』繫辭下「子曰、天下何思何慮、天下同歸而殊塗。」
- 7 【謂無想爲泥洹】 寶唱『經律異相』卷一・無想天第十七「無想天(樓炭經云無人想)以禪樂爲食、壽五百劫、或有減者、猶色界數、光明勝於果實。外道謂爲涅槃。」(T53, 003c)
- 8 【指梵主爲生本】 『玄應音義』阿毘達磨俱舍論三十卷・第二十七卷(慧琳『一切經音義』卷七〇)「那羅延(那羅、此云爲人。延那、此云生本、謂人生本。即是大梵王也。外道謂一切人皆從梵王生故、名人生本也。)」(T54, 767c)
- 9 【六大論師】 六派哲學のこと。正統學派(ヴェーダの權威を認める學派)のうちの六つの有力學派。ヴェーダーンタ學派、ミーマーンサー學派、ヨーガ學派、サーンキヤ學派、ニヤーヤ學派、ヴァイシエシカ學派をいう。
- 10 【神我】 アートマン(ātman)。神々や人間には常住の神我が存在すると説くサーンキヤ學派やヴァイシエシカ學派などの外道

を、とくに「神我外道」と呼ぶ。

11 【眞宰】『莊子』齊物論「若有眞宰、而特不得其朕。」道宣『四分律刪繁補闕行事鈔』卷下・沙彌別行篇第二十八「沙彌法應如是數。準此爲破十種外道者。……五破神我外道、執於身中別有神我以爲宰主。」(T40, 150c-151a)

12 【設教】『易』觀「聖人以神道設教、而天下服矣。」

13 【億載斯年】『詩』大雅・下武「昭茲來許、繩其祖武、於萬斯年、受天之祜。」

14 【封固】原義は(門などを)固く閉ざすこと。ジャйна教では身・心(靈魂)に惡業が入り穢すのを防ぐため、惡業を遠ざけるとともに心身を覆い包むことで清淨を保つとされる。

15 【登信】「信」に對應する印度語原語のひとつ *hasadda* は、澄淨、淨信、歡喜などに譯され、總じて心が淨められること、しずまることなどの意をもつ。ここでの「信」もこの方向の意味で解釋される。

16 【冥初】世界が生ずる以前からあるもの。あるいは、サーンキヤ學派で立てる二十五の原理の第一。

17 【天根】いわゆるシヴァリンガ。道宣『釋迦方志』卷上「劫比他國(中印度古僧伽舍也)。周二千餘里、都城周二十餘里。寺有四所、僧千餘人。天祠十所、同事大自在天。皆作天像。其狀人根、形甚長偉。俗人不以爲惡。謂諸衆生從天根生也」(T51, 957b)。※大自在天はシヴァ神。

18 【赴水投巖、坐熱臥棘】鳩摩羅什『大智度論』卷二五・釋初品中・四無畏義第四十「復次、若佛未出、世間外道等種種因緣、欺誑求道、求福人。或食種種果、或食種種菜、或食種種草根、或食牛屎、或日一食糝稗、或二日、或十日、一月、二月一食、或噯風、飲水、或食水衣。如是等種種食、或衣樹皮、樹葉、草衣、鹿皮、或衣板木、或在地臥、或臥杵上、枝上、灰上、棘上。或寒時入水、或熱時五熱自炙。或入水死、入火死、投巖死、斷食死。如是等種種苦行法中、求天上、求涅槃、亦教弟子令不捨是法。如是引致少智衆生、以得供養。」(T25, 241c-242a)

19 【吸風露而曰仙】闍那崛多『佛本行集經』卷一〇・私陀問瑞品第九「時淨飯王復問國師婆羅門言、此事云何。時國師等復白王言、大王當知往古諸仙、或飲風露、或食花果、或食根藥、著樹皮衣、少欲知足。彼等諸仙、猶愛俗事、一著於世、尙生放逸。」(T3, 700c)

20 【袒】大正藏は「袒」字に作り、宋元明三本・宮本・磧本は「袒」字に作る。對校本により、「裸體となる」という意に解す。

21 【守死】『論語』泰伯「子曰、篤信好學、守死善道。」

- 22 【金色】『後漢書』西域傳第七十八・天竺「世傳明帝夢見金人、長大、頂有光明、以問群臣。或曰、西方有神、名曰佛、其形長丈六尺、而黃金色。」
- 23 【魔王】欲界の第六天である他化自在天の主。この一文、「降魔成道」を指す。
- 24 【十軍】十種の魔の軍。煩惱のこと。鳩摩羅什『大智度論』卷五・初品中摩訶薩埵釋論第九「問曰、何處說欲縛等諸結使、名爲魔。答曰、雜法藏經中、佛說偈語魔王、欲是汝初軍、憂愁軍第二、飢渴軍第三、愛軍爲第四、第五眠睡軍、怖畏軍第六、疑爲第七軍、含毒軍第八、第九軍利養、著虛妄名聞、第十軍自高、輕慢於他人。」(T25, 099b)
- 25 【梵主來儀】この一文、「梵天勸請」を指す。
- 26 【鑠腹戴爐之輩】鳩摩羅什『大智度論』卷一一・釋初品中舍利弗因緣第十六「是時、南天竺有一婆羅門大論議師、字提舍、於十八種大經、皆悉通利。是人入王舍城、頭上戴火、以銅鑠腹。人問其故、便言、我所學經書甚多、恐腹破裂、是故鑠之。又問、頭上何以戴火。答言、以大闢故。」(T25, 137b)
- 27 【敬日重火之徒】道宣『釋迦氏譜』四尋仙非奪相「經云、太子至跋伽仙林中、鳥狩矚目。仙人謂是天神。與徒衆迎請坐。太子見諸仙人、草樹皮葉、以爲衣者。或食花果草木、或日止一食、三日一食者。或事水火日月、翹脚臥灰棘水火上者。問其所由。答欲生天。」(T50, 091a)
- 28 【洗心】『易』繫辭上「是故著之德圓而神、卦之德方以知、六爻之義易以貢。聖人以此洗心。」
- 29 【枯穴】語例未詳。對校本の「巢穴」は敵の巢窟の意。「枯穴」も同じ方向の意で解釋する。道宣『續高僧傳』卷二四・釋慧乘傳「既承資蓄、縱辯無前、折關陳欸、皆傾巢穴。」(T50, 633b)
- 30 【能事】『易』繫辭上「引而伸之、觸類而長之、天下之能事畢矣。」道宣『釋門歸敬儀』濟時護法篇第二「既而能事已隆、告以數終之運、非色現色、表法身之不二、無形留骨、示化迹之無泯。」(T45, 857c)
- 31 【乘權】『列子』力命「多偶、自專、乘權、隻立四人、相與游於世、胥如志也。」道宣『統略淨住子淨行法門序』(『廣弘明集』卷二七)「故江表通德、體道乘權、綜而習之、用開靈府。」(T52, 306b)
- 32 【清涼臺】『牟子理惑論』(『弘明集』卷一)「又於南宮清涼臺及開陽城門上作佛像。明帝時、豫修造壽陵、曰顯節、亦於其上作佛像。」(T52, 005a)慧皎『高僧傳』卷一・竺法蘭傳「(蔡)愔又於西域得畫釋迦倚像、是優田王栴檀像師第四作也。既至雒陽、明帝即令畫工圖寫、置清涼臺中及顯節陵上。舊像今不復存焉。」(T50, 323a)

- 33 【靈儀】蕭子良「淨住子淨行法」(『廣弘明集』卷二七)開物歸信門第二「所以垂形丈六、表現靈儀、隨方應惑、法身匪一。」(T52, 306c-307a)
- 34 【顯節園】後漢明帝の陵墓。語註32 【清涼臺】參照。
- 35 【喋喋】『史記』卷一〇・匈奴列傳「中行説曰、……嗟土室之人、顧無多辭、令喋喋而佔佔、冠固何當。」
- 36 【瑣瑣】『詩』小雅・節南山「式夷式已、無小人殆、瑣瑣姻亞、則無靡仕。」
- 37 【黃巾】『後漢書』皇甫嵩朱雋列傳第六一・皇甫嵩傳「張角等知事已露、晨夜馳救諸方、一時俱起。皆著黃巾爲標幟、時人謂之黃巾、亦名爲蛾賊。」
- 38 【王何】王弼と何晏。王弼(後漢・曹魏。字輔嗣。二二六―二四九)、著作に『周易注』『論語釋疑』『老子道德經注』などがある。何晏(後漢・曹魏。字平叔。?―二四九)、著作に『論語集解』『老子道德論』などがある。
- 39 【上賢】老子のこと。ただし、「上賢」をそのまま老子とする語例は未見。老子について、北周の甄鸞「笑道論」は「中上賢類」(T52, 152bc)とし、道宣は「中賢之流」とする(『佛道論衡』晉孫盛老子疑問反訊・集論者曰、T52, 367c)。いずれも『漢書』卷二〇・古今人表第八が老子を「中上」の賢人に列するのを踏まえる。
- 40 【褒貶】杜預「春秋左氏傳序」(『文選』卷四五)「答曰、春秋雖以一字爲褒貶、然皆須數句以成言。」
- 41 【雷同】『禮記』曲禮上「毋勦説、毋雷同。」
- 42 【混迹】『晉書』卷九二・文苑傳「史臣曰……彦伯(王沈)未能混跡光塵、而屈乎卑位、釋時宏論、亦足見其志耳。」
- 43 【常迷】寶林「破魔露布文」(『弘明集』卷一四)「故知宗極存乎俗見之表、至尊王於眞鑑之裏、中人躊躇於無有之間、下愚驚笑於常迷之境。」(T52, 094c)
- 44 【具瞻】『詩』小雅・節南山之什「節彼南山、維石巖巖、赫赫師尹、民具爾瞻。」毛傳「具、俱。瞻、視。」
- 45 【闕澤】?―二四三年。字德潤。『集古今佛道論衡』卷一「前魏時吳主崇重釋門爲佛立塔寺因問三教優劣事」に闕澤と吳主の問答が見える。
- 46 【天分】『廣弘明集』卷六「列代王臣滯惑解」序「此則古來行事、釋判天分、未廣見者、謂爲新致。」(T52, 123b)
- 47 【孫盛】生卒年不詳。字安國。『集古今佛道論衡』卷一に孫盛の「老聃非大賢論」「老子疑問反訊」を収める。
- 48 【海截】『詩』商頌・長發「玄王桓撥。受小國是達。受大國是達。率履不越。遂視既發。相土烈烈。海外有截。」鄭玄箋「截、整齊

也。」孔穎達疏「截者斬斷之義、故爲齊也。」

49 【疎通】『禮記』經解「疏、通知遠而不誣、則深於書者也。」

50 【虛盈】沈約「冬節後至丞相第詣世子車中五言」(『文選』卷三〇)「廉公失權勢、門館有虛盈、貴賤猶如此、況乃曲池平。」李善注「王符潛夫論曰、昔魏其之客、流於武安。長平之利、移於冠軍。廉頗翟公、再盈再虛。」

51 【卜商】「卜」字、大正藏は「十」に作るも、對校本の「卜」が正しい。「卜商」は孔子の弟子子夏のこと。『史記』卷六七・仲尼弟子列傳第七「卜、商字子夏。少孔子四十四歲。……孔子既沒、子夏居西河、教授、爲魏文侯師。其子死、哭之失明。」

52 【疑聖】『禮記』檀弓上「子夏喪其子而喪其明。曾子弔之。曰、吾聞之也。朋友喪明則哭之。曾子哭、子夏亦哭。曰、天乎、予之無罪也。曾子怒曰、商、女何無罪也。吾與女事夫子於洙、泗之間、退而老於西河之上。使西河之民、疑女於夫子、爾罪一也。」裴子野『劉蚪碑』(『藝文類聚』卷三七)「銘曰……西河疑聖、華陰成市。悠哉荆夢、逖矣江濱。」

53 【張葛】張陵(生卒年不詳)、五斗米道の創始者。葛洪(東晉。字稚川。二八三〜三四三)、『神仙傳』『抱朴子』などを著す。

54 【論衡】『集古今佛道論衡』の「論衡」は後漢王充の『論衡』における「釋物類同異、正時俗嫌疑」とする意圖を踏まえるであろう。『後漢書』王充王符仲長統列傳第三九・王充傳「(王)充好論說、始若詭異、終有理實。以爲俗儒守文、多失其眞、乃閉門潛思、絕慶弔之禮、戶牖牆壁、各置刀筆。著論衡八十五篇、二十餘萬言、釋物類同異、正時俗嫌疑。」

55 【上中下三卷】大正藏は「甲乙下四卷」に作り、宋元明三本・宮本は「上中下三卷」に作る。「上中下三卷」が妥當である。『開元釋教錄』卷八・總括群經錄上之八によれば、本書は第一卷から第三卷が龍朔元年(六六一)に、第四卷が麟德元年(六六四)に成っている(『55, 562a』)。序文執筆年次は龍朔元年であるから、當時なお三卷本であったと見られる。

(今西智久)

『廣弘明集』總序 (T52, 97ab)

序文成立年＝唐高宗・麟德元年（六六二）道宣年六十九

〔釋文〕

自大夏^a化行、布流東漸、懷信開道²、代有澆淳。斯由情混三堅、智昏四照、故使澆薄之黨、輕舉邪風、淳正之徒、時遭佞辯。所以教移震旦、六百餘年、獨夫震虐、三被殘屏、禍不旋踵、畢顧前良、殃咎已形、取笑天下⁷。

且夫信爲德母⁸、智寔聖因、肇祖道元、終期正果。據斯論理、則內傾八慢之惑、覈此求情、則外蕩六塵之蔽。蕭然累表⁹、非小道之登臨、廓爾高昇、乃上仁之翔集¹⁴。然以時經三代、弊五滓之沈淪、識蒙邪正、銓人法之天網¹⁵。是以內教經緯、立法依以攝機、外俗賢明、垂文論以弘範。

昔梁鍾山之上定林寺僧祐律師、學統九流、義包十諦、情敦慈救、志存住法。詳括梁晉、列辟群英、留心佛理、構敘篇什、撰弘明集一部一十四卷。討顏謝之風規、總周張之門律、辯駁通議、極情理之幽求、窮較性靈、誠智者之高致。備于祕閣、廣露塵心。

然智者不迷、迷者非智²⁵。故智士興言、舉旨而通標領²⁶、迷夫取悟、繁詞而啓神襟³¹。若夫信解之來、諒資神用、契必精爽、事襲玄模³⁰。故信有三焉。一知、二見、三謂愚也。知謂生知、佩三堅而入正聚。愚謂愚叟、滯四惑而溺欲塵。化不可遷下愚之與上智³²。中庸見信從善、其若流哉。是以法湮三代、竝惟寡學所纏。故得師心獨斷、禍集其計。向若披圖八藏、綜文義之成明、尋繹九識、達情智之迷解者、則正信如皎日、五翳雖掩、而逾光矣。

〔校勘〕

a 自 ||〔廣弘明集序〕+ 自 (宋・元・宮) b 已 || 己 (大正藏)。已 (麗・中華) c 形 || 刑 (宋・宮) d 代 || 法 (宮) e 法之天 ||
 天之法 (明) f 依 || 衣 (元・明) g 辯 || 辨 (宋・元・明・宮) h 而 || 而心 (明) i 通 || 明註曰通上似遺一字 j 而 || 而方 (宋・
 元・明)、|| 方 (宮)

〔訓讀〕

大夏の化行われ、布流東漸してより、信を懷き道を開くこと、代々澆淳有り。斯れ情は三堅に混じり、智は四照に昏きに由り、故に澆薄の黨をして、輕々しく邪風を擧げ、淳正の徒をして、時に佞辯に遭わしむ。所以に教震旦に移りてより、六百餘年、獨夫は虐を震い、三たび殘屏を被るも、禍は踵を旋らさず、畢く前良を顧み、殃咎已に形われ、笑を天下に取る。

且つ夫れ信は徳の母爲り、智は寔に聖の因なり、肇め道元に祖り、終に正果を期す。斯に據りて理を論ずれば、則ち内に八慢の惑を傾け、此を覈べて情を求むれば、則ち外に六塵の蔽を蕩う。果表に蕭然たるは、小道の登臨に非ず、廓爾として高昇するは、乃ち上仁の翔集なり。然れども以て時三代を経て、五滓の沈淪に弊れ、識邪正に蒙く、人法の天網を銓る。是を以て内教の經緯、法依を立てて以て機を攝し、外俗の賢明、文論を垂れて以て範を弘む。

昔、梁の鍾山上定林寺の僧祐律師、學は九流を統べ、義は十誦を包み、情は慈救に敦く、志は住法に存す。詳しく梁晉を括り、列ねて群英を辟し、心を佛理に留め、敍を篇什に構え、弘明集一部一十四卷を撰す。顔謝の風規を討ね、周張の門律を總べ、通議を辯駁して、情理の幽求を極め、性靈を窮較して、智者の高致を誠にす。祕閣に備えて、廣く塵心を露す。

然れども智者は迷わず、迷う者は智に非ず。故に智士は言を興すに、旨を擧げて標領を通くし、迷夫は悟を取るに、詞を繁くして神襟を啓く。夫の信解の來たるがときは、諒に神用に資り、契は精爽を必とし、事は玄模を襲ぐ。故に

信に三有り。一に知、二に見、三に愚と謂うなり。知は生知を謂い、三堅を佩^おびて正聚に入る。愚は愚叟を謂い、四惑に滯りて欲塵に溺る。化は下愚と上智とを遷す可からず。中庸の信を見て善に従うは、其れ流るるが若きかな。是を以て法の三代に湮^{しず}むは、竝に惟れ寡學の纏う所なり。故に心を師として獨斷し、禍其の計に集まるを得。向^ききに若し圖を八藏に披き、文義の成明を綜べ、九識を尋繹し、情智の迷解に達すれば、則ち正信は皎曰の如く、五翳掩うと雖も、而れども逾々^{かや}光く。

〔譯文〕

大夏において佛の教化が行われ、東方中國に流布してこのかた、信を懷きその道を開き示すことについては、澆薄の時代と淳厚の時代があった。というのも、人々の心は佛の道が三堅（身・命・財寶）の法にあると理解し、智が佛の大いなる輝きに照らされていることに氣づかないでいる。そのため輕薄な者たちは、輕しく邪まな風をあおりたて、純粹で誠實な者たちは、時としてそれらの口先巧みな辨舌に遭遇してしまう。かくして佛敎が中國に傳來して、六百餘年の間に、惡逆非道の統治者は暴虐の限りをつくし、佛敎は「北魏の太武帝・大夏の赫連勃勃・北周の武帝の」三度にわたって迫害を受けたが、災禍は瞬く間に彼らに降りかかり、前代の賢良な者たちはみな顧みられ、殃いや罪咎ははっきりと現れて天下の人々に嘲笑された。

いったい信は功德の母であり、智慧はまことに成佛の因であって、まず最初に佛道の根元である信に基づき、最後に正しい證果^{さとり}をねがうのである。これに基づいて道理を明らかにすれば、心に生じる八つの慢心（慢・大慢・慢慢・不如慢・傲慢・我慢・増上慢・邪慢）による惑亂を傾けつくすことができ、このことを理解して實際の「求道者としての」あり方を追求すれば、六つの汚れ（色・聲・香・味・觸・法）を洗い流すことができる。それは、外道が登り臨む境地ではなく、何のわだかまりもなく抜け出すようなもので、至仁の者が飛翔して集うように、からっとして高く昇るのである。けれど

も、三つの時代の佛教廢棄を経て、五濁の深みにはまり込み、邪と正の區別がつかず、人と教法に對する天網のごとき國法を銓議することとなった。「このことを受けて」そこで、條理たる佛の教えは、「國法ではなく」教法に依據すべきことを明示して機根の者を攝受し、世俗の賢明なる者は、佛教の理法を説く論文をあらわしてその規範おしえを弘めたのである。

その昔、梁の鍾山上定林寺の僧祐律師は、學問は九流のすべてを統べ、義理は十諦すべてを包括し、情は慈悲心と人々を救済せんとする敦い心を持ち、佛法の護持こそが師の心情であつた。晉から梁までの時代、多くの俊英たちが教理に心を留めて物した文章を詳細にまとめて、弘明集一部一十四卷を撰述した。それは、顏延之と謝鎮之の風教規範をたずね、周顒と張融の門律を總べまとめるなど、世間通有の論理を批判し、情と理を徹底的に追求し、人の心の神妙なはたらきを究明して、智者の極めて高い境地を實現している。それは宮中の書庫にも備え置かれ、廣く凡俗の心を潤した。

しかしながら、智慧のある者は迷うことはなく、迷う者は智慧と乖離している。故に智慧のある者の言葉は、要旨を示してそれが誰の目にもそれと分かるような優れたものであるが、迷える者は、多くの言葉を費やし神襟しんころもを導いて悟を得るのだ。いったい信と悟りの來源は、諒に靈妙なはたらきに依るもので、雙方を合致させるには心を必須とし、實際には玄妙な規範を受け繼いでいるのである。故に信には三種あり、一に知、二に見、三に愚と謂う。知は生れながらにして知る者を謂い、三堅の法を身に帶びて正定聚の位に入る。愚は愚叟を謂い、四つの煩惱（我癡、我見、我慢、我愛）にとらわれて欲望のけがれに沈溺する。教化によっても最下の愚者と最上の智者との差を埋めることはできないが、あたかも水の高いところから低いところへ流れるように、中正の者は信のあり方を見て善に従う。かくして、佛法が三つの時代で滅びたのは、すべて教法をあまり學ばなかった結果である。故に自分の心を師とたのんでの獨斷が、災禍を集める事態を引き起こしたということができよう。その前に、もし八藏（胎化藏、中陰藏、摩訶衍方等藏、戒律藏、十住菩薩藏、雜藏、金剛藏、佛藏）の文獻を披閱して、文章に書き表された明瞭なる義理を總合して理解し、九識（眼・耳・鼻・舌・身、

意、阿陀那識、阿頼耶識、阿摩羅識の意味を追究し、情が迷いとなり智が悟りともなる心のあり様に理解が深まれば、たとえ五つの翳^{かげ}り（煙、雲、塵、霧、阿修羅（羅睺羅））が掩ったとしても、正しき信は太陽のようにますます光り輝くであろう。

〔語註〕

* 『廣弘明集』總序及び辯惑篇序に關しては、それぞれ二名による分擔執筆となっている。

1 【大夏】中央アジアのアフガニスタン北半に位置し、アム川流域のバクトリアを中心としたバクトリア地方を指す。もともと、アショーカ王の時傳道師が訪れ、早くから佛教が行われており、前二世紀後半には大月氏に併合された。この當時に漢の武帝によって張騫が使者として派遣されている。その始末は『史記』『漢書』に詳しいが、『魏書』釋老志には「及開西域、遣張騫使大夏、還、傳其旁有身毒國、一名天竺、始聞有浮屠之教」と佛教について傳聞したことを付け加えている。これ以後、西域との交通が開け、佛教が傳來する端緒となった。

2 【開道】梁武帝「敕答臣下神滅論」に對する「蕭琛答」（『弘明集』卷一〇）「無以仰贊洪謨、對揚精義、奉化開道、伏用竦作、眷獎覃示、銘佩仁誘。」（T52, 061b）

3 【三堅】身・命・財寶を堅固な立場で對處し、永遠不變の眞實の身體、完全な智慧の生命、悟りの財寶を得ること。僧肇撰『注維摩詰經』卷四・菩薩品「肇曰、堅法、三堅法、身命財寶也。若忘身命、棄財寶、去封累而修道者、必獲無極之身、無窮之命、無盡之財也。此三天地焚而不燒。劫數終而不盡。故名堅法。」（T38, 365c）

4 【澆薄之黨、取笑天下】同様の文章が道世撰『法苑珠林』卷五の六道篇・諸天部・感應緣序「愚惑之徒、輕舉邪風、淳正之輩、時遭佞逼。所以教流震旦、六百餘年、崔赫周虐、三被殘屏、禍不放踵、殃及己身。」（T53, 303b）及び卷九八・法滅篇・述意部「致使凶黨之徒、輕舉邪風、淳正之輩、時遭讒佞。所以教流震旦、六百餘年。惡王虐治、三被殘屏、禍不旋踵、畢顯前良、殃咎已刑、取笑天下。嗚呼來業、深可痛歎。良由寡學所纏、故得師心獨斷、法隨潛隱、災患集身。若元披圖八藏、綜文義之成明、尋繹九識、達情智之迷解者、則五翳有除昏之期、三明有遼光之曰也。」（T53, 1005a）に見える。またこれにより、本文中の「三被殘屏」が北魏の太武帝・大夏の赫連勃勃・北周の武帝による佛教への彈壓であったことがわかる。

- 5 【獨夫】『尚書』泰誓下「古人有言曰、撫我則后、虐我則讎。獨夫受、洪惟作威、乃汝世讎。」
- 6 【不旋踵】『後漢書』蔡邕列傳第五十下「中平六年、靈帝崩、董卓爲司空、聞邕名高、辟之。稱疾不就。卓大怒、詈曰「我力能族人、蔡邕遂偃蹇者、不旋踵矣。」」
- 7 【取笑天下】『三國志』卷五二・吳書七・張昭傳「(孫)權以公孫淵稱藩、遣張彌・許晏至遼東拜淵爲燕王、昭諫曰「淵背魏懼討、遠來求援、非本志也。若淵改圖、欲自明於魏、兩使不反、不亦取笑於天下乎。」」
- 8 【信爲德母】信は心所(心のはたらき)の名で、心を澄んだ清らかなものにする精神作用。また、信は道に入る第一歩であるから、菩薩の階位五二位の中で十信位は最初の位であり、五根や五力の中で信根・信力は最初のものである。佛陀跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』賢首菩薩品「信爲道元功德母、增長一切諸善法、除滅一切諸疑惑、示現開發無上道」(T09, 433a)『釋門歸敬儀』引教徵事篇「序曰。有人言。上列機緣文理備矣。深知。信爲道元功德母。智是出世解脫因。」(T45, 860b)『續高僧傳』卷二四・護法篇論曰「道元德母。信其實矣。」(T50, 640b)
- 9 【蕭然】蕭然には抜けたす様を表し、煩惱の外に抜け出すことをいう。僧肇著『肇論』序「譬彼淵海、數越九流、挺拔清虛、蕭然物外」(T45, 150b)『四分律刪繁補闕行事鈔』卷下一・二衣總別篇「然出家濟遠、經勞涉樂、俗譽非慕。唯存出道者。則蕭然世表、塵染不拘。」(T40, 112c)『四分律行事鈔資持記』下一「蕭然即脫離之貌。」(T40, 372a)
- 10 【累表】解脫のさまを示す表現。累は煩惱のこと。表は外の意。竟陵文宣王「淨住子淨行法」奉養僧田門(『廣弘明集』卷二七)「然佛超累表、作範圍中、爲物受供、而實不受。」(T52, 319b)智顗説「灌頂記『請觀音經疏』「五體歸命能令毒害消伏、名之爲解脫。則出生死蕭然累表、故言五體投地也。」(T39, 972b)
- 11 【小道】本來は、禮樂政教以外の學説、または異端、諸子百家をいう。ここでは外道のことを指す。『論語』子張「子夏曰「雖小道、必有可觀者焉。致遠恐泥、是以君子不爲也。」」『廣弘明集』卷二三・僧行篇序「是知滿願之侶、乘小道而攝生、天熟之倫、寄邪徒而化物。」(T52, 263a)
- 12 【廓爾】「蕭然」と同意で、心の迷い等からかうと開けるようすを形容する語。佛陀耶舍共竺佛念譯『長阿含經』卷一・大本經「及見沙門、廓然大悟。」(T01, 007a)
- 13 【上仁】『老子』三十八章「上仁爲之而無以爲、上義爲之而有以爲。」
- 14 【翔集】『論語』鄉黨「色斯舉矣、翔而後集。」

- 15 【天網】『老子』七十三章「天網恢恢、疎而不漏。」
- 16 【法依】教法に依ること。法の四依を指す。『釋門歸敬儀』引教微事篇「經說四依、區分三位……初人四依、謂從初賢、至於極聖、人資無漏、法體性空、據此依承、理無邪倒。……故立法依、顯成楷定、初明依法、不依人者、人惟情有、法乃軌模、性空正理、體離非妄。即用此法、爲正法依、涅槃極教、盛明斯轍。今行事者、隨情妄依、多棄法依人。」(T45, 860b)
- 17 【鍾山上定林寺僧祐律師】四四五～五一八。南朝の齊・梁の時代に建康を中心に活躍した僧。俗姓は俞氏。建初寺の僧範に師事し、一四歳で定林寺法達の室に投じ、具足戒をうけた後、當時の律學の大家法穎に學んだ。とくに『十誦律』を宗とし、講義を行う。一方で、梁の武帝に非常に禮遇され、僧事に關する疑いはすべて僧祐に審決させるほどであった。著作には『十誦義記』があったが現存せず、他に『釋迦氏譜』『出三藏記集』『弘明集』が今に傳わる。
- 18 【九流】先秦時代の代表的な九學派。儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・縱橫家・雜家・農家。
- 19 【十諦】「諦」は眞實で誤りがなく、永遠に變わらない事實。十諦は苦集滅道の四諦を細分したもので、玄奘譯『瑜伽師地論』卷四六には四諦を細分して七諦、十諦とし、これにより迷悟因果の理を明らかにしている。
- 20 【住法】慧遠『大乘義章』卷一七末「言住法者、有頓方便無常方便、所得善根不進不退。故名爲住。」(T44, 806b)
- 21 【討顏謝之風規】顏謝とはここでは顏延之(三八四～四五六)と謝鎮之(生没年不詳)のこと。顏延之は『宋書』卷七三に傳がある。謝鎮之は傳なし。『弘明集』卷四には、何承天の「達性論」を反駁した書翰を、卷六には、顧歡の「夷夏論」を反駁した書翰を収載する。
- 22 【總周張之門律】周張とは、周顒(生没年不詳)と張融(四四四～四九七)を指す。雙方とも『南齊書』卷四十一に立傳される。門律は一門の定め、家訓のことで、『弘明集』卷六に張融の儒佛道を併せ修することを勧めた門律と、それに關する周顒との往復書翰が収載される。
- 23 【通議】『孟子』滕文公上「故曰、或勞心、或勞力。勞心者治人、勞力者治於人。治於人者食人、治於人者食於人、天下之通義也。」
- 24 【幽求】王巾「頭陀寺碑文」(『文選』卷五九)「殷鑑四門、幽求六歲。亦既成德、妙盡無爲。」
- 25 【智者不迷、迷者非智】僧祐「弘明論後序」(『弘明集』卷一四)「然智者不迷、迷者乖智。」(T52, 095a)『論語』子罕「子曰「知者不惑、仁者不憂、勇者不懼。」」
- 26 【興言】左思「魏都賦」(『文選』卷六)「至乎勅敵糾紛、庶士罔寧、聖武興言、將曜威靈。」

- 27 【標領】 慧皎『高僧傳』卷六・僧叡傳「姚興後謂嵩曰、乃四海標領、何獨鄴衛之松柏。」(T50, 364a-b)
- 28 【信解】 佛の説法を聞いて初めにこれを信じ、後にこれを解すること。鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』序品「復見諸菩薩摩訶薩種種因緣種種信解、種種相貌行菩薩道、……。」(T09, 002b)
- 29 【神用】 道恆『釋駁論』(弘明集)卷六○「咸共嗟詠、稱述其善云、若染漬風流、則精義入微、研究理味、則妙契神用。」(T52, 035a)
- 30 【玄模】 慧皎『高僧傳』卷四・支遁傳「每愧才不拔滯、理無拘新、不足對揚玄模、允塞視聽。」(T50, 349b)
- 31 【生知】 『論語』季氏「孔子曰「生而知之者、上也。」
- 32 【不可遷下愚之與上智】 『論語』陽貨「子曰「性相近也、習相遠也。」子曰「唯上知與下愚不移。」
- 33 【從善】 『春秋左氏傳』成公八年「君子曰、從善如流。宜哉。」
- 34 【師心】 『莊子』人閒世篇「仲尼曰「夫胡可以及化、猶師心者也。」
- 35 【迷解】 智顗『摩訶止觀』卷一下「假名之心、爲迷解本。」(T46, 008b)

(藤井政彦)

〔釋文〕

余博訪前敘、廣綜弘明。以爲江表五代、三寶載興、君臣士俗、情無異奉。是稱文國、智籍文開。中原周魏、政襲昏明、重老輕佛、信毀交貿。致使工言既申、佞倖斯及、時不乏賢、剖心特達、脫穎拔萃、亦有人焉。然則昏明互顯、邪正相師、據像則雲泥兩分、論情則倚伏交養。是以六術揚於佛代、三張冒於法流、皆大士之權謀、至人之適化也。斯則滿願行三毒之邪見、淨名降六欲之魔王、咸開逼引之殊途、各立向背之弘轍。

今且據其行事、決滯胥徒¹⁷、喻達蒙泉^{d 18}、疏通性海^e。至如寇謙之^f、崔浩²⁰、禍福皎然、鄭藹之抗周君²¹、成敗俄頃、姚安著論²²、抑道在於儒流、陳琳綴篇²³、揚釋越於朝典、此之諷議、涅而不緇^{g 24}、墜在諸條、差難綜緝。又梁周二武、咸分顯晦之儀、宋魏兩明、同乘弘誘之略。沈休文之慈濟²⁵、顏之推之歸心²⁶、詞采卓然^{i 27}、迴張物表。嘗以餘景²⁸、試爲舉之^k、弊於庸朽、綜集牢落。有漢陰博觀沙門²⁹、繼贊成紀。顧惟直筆、卽而述之。命帙題篇^{m 30}、披圖藻鏡³¹。至若尋條揣義³²、有悟賢明、孤文片記、撮而附列、名曰廣弘明集。一部三十卷。有梁所撰、或未討尋、略隨條例、銓目歷舉。庶得程諸未覩ⁿ、廣信釋紛。擬人以倫³³、固非虛託。如有隱括、覽者詳焉。

〔校勘〕

a 籍||藉(宋・元・明・宮・磧) b 政||岐(宮) c 質||質(宋・宮) d 徒||陵(宋・元・明・宮・磧) e 蒙||濛(宋・宮) f 構||拒(宋・元・明・磧)。||哲(宮) g 涅||周(宮) h 緇||溜(宮) i 采||彩(宋・元・明・宮・磧) j 迴||迴(宋・元・明・磧・縮)。||向(宮) k 試||誠(宋・元・明・宮・磧) l 繼||繫(宋・元・明・宮・磧) m 帙||族(大正藏)。帙(宋・元・明・宮・磧) n 程||呈(宋・元・明・宮・磧)。

〔訓讀〕

余は博く前叙を訪ね、廣く弘明を綜ぶ。以爲く江表の五代、三寶載^三に興り、君臣士俗、情に奉ずるを異にする無し。是れ文國と稱うべく、智籍^しかれ文開かる。中原の周魏、政は昏明を襲^かね、老を重んじ佛を輕んじ、信毀交^かごも質^かる。工言をして既に申べ、佞倖をして斯に及ばしむるを致すも、時に賢乏しからず、剖心特に達し、脫穎拔萃^たにして、亦た人有り。然れば則ち昏明互いに顯れ、邪正相^ひい^ひに顯れ、像に據れば則ち雲泥兩つに分つも、情を論ずれば則ち倚伏交^かごも養う。是を以て六術佛代に揚げ、三張法流を冒すは、皆大士の權謀にして、至人の適化なり。斯れ則ち滿願三毒の邪見

を行い、淨名・六欲の魔王を降すことにして、威な逼引の殊途を開き、各おの向背の弘轍を立つ。

今且く其の行事に據り、胥徒を決滯し、蒙泉に喩達し、性海に疏通す。寇謙の崔浩を構えて、禍福は皎然、鄭藹の周君に抗して、成敗は俄頃、姚安は論を著し、道を抑えて儒流に在らしめ、陳琳は篇を綴り、釋を揚げて朝典に越えたるが如きに至りては、此の諷議、涅して縊まらざるも、諸條に墜在し、差綜緝し難し。又梁周の二武、威な顯晦の儀を分ち、宋魏の兩明、共に弘誘の略に乗ず。沈休文の慈濟、顔之推の歸心、詞采卓然として、廻かに物表に張る。嘗て餘景を以て、試みに爲に之を舉げんとするも、庸朽に弊れ、綜集牢落なり。漢陰の博觀の沙門、贊を繼ぎ紀を成すこと有らん。顧^{すなわ}ち惟だ直筆し、卽して之を述べ、帙を命じ篇に題し、披きて藻鏡を圖らん。若し條を尋ね義を揣^{はか}り、賢明なるを悟ること有るに至りては、孤文片記なるも、撮りて列に附す。名づけて廣弘明集と曰い、一部三十卷なり。有梁の撰する所は、未だ討尋せざるもの或^あれば、略ほ條例に隨い、目を銓して歷舉す。庶わくは諸^{これ}を未だ覩^みざるものに程し、信を廣め紛を釋くを得んことを。人を擬^くぶるに倫を以てすとは、固より虛託に非ず。如し隱括有らば、覽る者焉を詳かにせよ。

〔譯文〕

私は博く過去の叙述を搜し求め、廣く弘道明教に足る叙述を集め纏めた。それにより思うには、江南の五代、東晉・宋・齊・梁・陳において、佛法僧の三寶は盛んになり、君臣士俗は、みな佛法の信仰心をもっていた。このような状況は文明國と稱えらるべきもので、佛の智慧は明らかに示され、その智慧に依る文明が大に行われたのである。その一方で、中原の北周と北魏においては、政事では興廢が繰り返され、老子（道教）が重んぜられ佛（佛教）が輕んぜられる時もあり、信仰と彈圧とが繰り返された。飾り立てた言辞を弄し媚びをうる輩たちが目立つようなご時世にも、時に賢人たる人物は世にあるもので、その眞心は特にすぐれて、才氣が特段に抜きん出ている人はいるものである。そうであ

るなら、「名君や暗君のように」興廢が互いにあきらかになり、邪想と正法が互いに規範となったことについて、「これら邪正の二つの側面は」目に見える事柄に據れば、雲泥の如く隔たっているが、その意味するところを論ずれば、それらは禍福循環の關係を教えているのである。こういうわけで六師外道が佛の「教えが流布していた」時代に聲高に主張され、張陵・張衡・張魯による「五斗米道の」教えが佛法を冒したというような事柄は、皆な菩薩の臨機の方便であって、佛の素晴らしき導きなのである。満願子富樓那が自らに三毒の邪見があることを示したことや、維摩詰が六欲の魔王が衆生教化の方便であることを示したことは、威な時世に應じて變化する悟りへの道筋を示し、各おの佛敎に向うにしろ背を向けるにしろ廣大なる道を立てたものである。

今はしばらく過去の事實に依って、障りある人々を見さため、喩えによって迷いの源泉を悟らせ、法性眞如の海に通じさせよう。寇謙之が崔浩を引きこんで「廢佛の挙に及んだ結果」、禍福が明らかにになり、靜謐が北周の武帝に「命をなげうって」抗議すると、その成敗は瞬く間に顯れた。また、道安は『二敎論』を著し、道敎を抑えて儒家者流の一つとして位置付け、法琳は『破邪論』と『辯正論』を著して、佛敎を稱揚し、朝廷の規範より優れたものだと言張した。これらの議論は、いくら黒く染めようとしても染まらない潔白なものであるけれども、諸々の文章にうもれてしまっており、「これら全て」収集するのはいささか困難である。又、梁と北周の二人の武帝は、佛敎を世にあらわすか世から見えなくしてしまうか、その姿は兩端に分れ、南朝宋の明帝と北魏の孝明帝は、二人とも弘く敎化を行う政策を行った。沈約の『究竟慈悲論』や、顔之推の「歸心篇」は、文章が際立って美しく、世俗に捉われない境地を主張した。嘗て餘暇に、試みに世間の閲讀に供する爲に、これらを示そうとしたが、凡庸かつ老殘の身であり、その収集には不完全なところが残った。漢陰に住していた「道安のような」博覽の人物により、「佛敎流布の事跡を」評述する事業を引き繼ぎ完成させてくれることが有るだろう。そこで専ら事實のまま記録し祖述して、まともにごとに名を付け著作としてまとめ、「弘道明敎の」手本として示そう。若し文章を尋ね眞意を汲み、その賢れ且つ明晰たる「論旨」を悟ることができるも

のについては、片々たる文章記事であっても、載録し付記した。これを『廣弘明集』と名づけ、一部三十卷とする。僧祐律師の撰した『弘明集』については、未だ閱讀していない者があるやもしれず、略ぼ凡例に随って、『弘明集』の目次の部分を選び出して列挙する。庶わくは、まだ見たことの無い人々に示し、信心を廣めて、その疑念を釋きほぐしてもらいたい。人を他と比べ評價するには同類においてする、とは、まことにそのとおりである。もし正すべき點が有れば、ご覧いただいて詳かにせられたい。

〔語註〕

- 1 【弘明】 弘道明教に足る叙述全體を指す。
- 2 【江表五代】 江表は長江より南、江南の地域のこと。つまり東晉より宋・齊・梁・陳の五つの王朝を指す。
- 3 【文國】 『續高僧傳』卷一三・釋圓光傳「有陳之世、號稱文國。故得諮考先疑、詢猷了義。」(T50, 523c) 『關中創立戒壇圖經』戒壇高下廣狹第四(并引圖相)「中原兩河晉氏南渡之後、分爲一十六國。以武猛相陵、佛法三除。竝是獯鬻之胤、本非文國之後。隨心即斷、故其然乎。所以戒壇之舉、即住法之弘相也。餘則略之(云云)。」(T45, 814a)
- 4 【工言】 『論語』學而篇「子曰、巧言、令色、鮮矣仁。」
- 5 【佞倖】 王充撰『論衡』卷二七・定賢篇「以事君調合寡過爲賢乎、夫順阿之臣、佞倖之徒、是也。」
- 6 【倚伏】 禍福が轉々と循環することをいう。應報の理を指す。『老子』五八章「其政悶悶、其民淳淳。其政察察、其人缺缺。禍兮福之所倚、福兮禍之所伏。孰知其極。其無正。正復爲奇、善復爲妖、人之迷、其曰固久。是以聖人方而不割、廉而不剝、直而不肆、光而不耀。」釋慧遠『大智論抄序』第二二(僧祐撰『出三藏記集』卷十)「其中可以開蒙朗照、水鏡萬法。固非常智之所辨、請略而言、生塗兆於無始之境、變化構於倚伏之場、咸生於未有而有、滅於既有而無。」(T55, 075c)
- 7 【六術】 六師外道の教え、或いは広く異端の教えを指す。六師は、釋迦の時代に活躍した、富蘭那迦葉、末伽梨拘睺隍子、刪闍夜毘羅胝子、阿耆多翅舍欽婆羅、迦羅鳩駄迦旃延、尼鍵陀若提子の六人を指す。
- 8 【三張】 後漢末より三國に至るまで、盛んに行われた五斗米道の教主である張陵・張衡・張魯の三人を指す。或いは、この三人によって傳えられた教えを指す。天師道ともいう。

- 9 【大士之權謀】 大士は、菩薩の通稱。菩薩による臨機應變のはかりごと。
- 10 【至人之適化】 至人は、ここでは佛・如来を指す。適化は、うまく相手を教化すること、方便を指す。
- 11 【満願】 満願（或いは満願子）は富樓那彌多羅尼子の譯名。釋迦十大弟子中の說法第一とされる。
- 12 【三毒之邪見】 富樓那は、敢えて衆生に三毒・邪見の行いを示し、佛法を説くための方便としたという。鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷四・五百弟子受記品第八「内秘菩薩行、外現是聲聞、少欲厭生死、實自淨佛土。示衆有三毒、又現邪見相、我弟子如是、方便度衆生。若我具足說、種種現化事、衆生聞是者、心則懷疑惑。今此富樓那、於昔千億佛、勤修所行道、宣護諸佛法、爲求無上慧、而於諸佛所、現居弟子上、多聞有智慧、所說無所畏、能令衆歡喜、未曾有疲倦、而以助佛事。」(T09, 028a)
- 13 【淨名】 鳩摩羅什等撰『維摩詰經』卷一并序「維摩詰所說。什曰、維摩詰秦言淨名、即五百童子之一也。」(T38, 327b)
- 14 【六欲之魔王】 この魔王は本當の魔王ではなく、實は菩薩の化身であることをいう。ここで説かれる魔王は、菩薩の方便による假の姿であり、その人を試し、そしてその信心をより強固にするため、敢えてその姿で衆生に近づくのである。鳩摩羅什等撰『維摩詰經』卷六・不思議品第六「大迦葉說是語時、三萬二天子、皆發阿耨多羅三藐三菩提心。爾時、維摩詰語大迦葉、仁者、十方無量阿僧祇世界中、作魔王者、多是住不可思議解脱菩薩。以方便力、教化衆生、現作魔王。肇曰、因迦葉云信解不可思議者魔不能嬖、而十方亦有信解菩薩爲魔所嬖者。將明不思議大士、所爲自在、欲進始學故、現爲魔王、非魔力之所能也。此明不思議、亦成迦葉言意。」(T38, 383a)
- 15 【逼引之殊途】 殊途は、最終的な到達點は同じであるが、そこに行き着くまでにはいくつもの異なった道筋があることを指す。『易』繫辭下「子曰、天下何思何慮。天下同歸而殊塗、一致而百慮。天下何思何慮。曰往則月來、月往則日來、日月相推而明生焉。寒往則暑來、暑往則寒來、寒暑相推而歲成焉。」吉藏撰『法華遊意』卷一・釋名題門「蓋是毀生死身無常、即歎法身常住。故逼引之教成、欣厭之觀立。若生死無常法身、復改起滅者、則同可厭棄。何所欣哉。故逼引之教不成、欣厭之觀行不立。」(T34, 640b)
- 16 【向背之弘轍】 弘轍は、宏大な道をいう。『律相感通傳』「餘備聞雅論、前代憲章、斯則一化之所宗承、三藏之弘轍也。」(T45, 881a)
- 17 【決滯】 判決する。判斷を下す。『續高僧傳』卷一一・釋吉藏傳「初藏、年位息慈、英名馳譽、冠成之後、榮扇逾遠。貌象西梵、言寔東華。含囀珠玉、變態天挺、刮斷飛流、殆非積學。對晤帝王、神理增其恒習、決滯疑議、聽衆忘其久疲。」(T60, 514c)
- 18 【胥徒】 迷いある人々、障りある人々。『續高僧傳』卷二〇・習禪篇・論「眞妄相迷、卒難通曉。若知惟心、妄境不結。返執前境、

非心所行。如此胥徒、安可論道。」(T50, 536c)

19 【性海】海のように深く深い眞実をいう。眞諦譯『大乘起信論』卷一「歸命盡十方、最勝業遍知、色無礙自在、救世大悲者、及彼身體相、法性眞如海、無量功德藏、如實修行等。爲欲令衆生、除疑捨耶執、起大乘正信、佛種不斷故。」(T32, 573b)

20 【寇謙之構崔浩】寇謙之と崔浩は、北魏の太武帝の時に行われた廢佛政策の主謀者。これらの事柄については、『魏書』釋老志に詳しい。

21 【鄭謫之抗周君】「周君に抗す」とは、靜謫が北周の武帝による廢佛に反抗し、最後まで抗議の姿勢を貫き、終南山においてその身を切り刻んで死んだことを指す。靜謫の事柄については、『續高僧傳』卷二三・靜謫傳に詳しい。鄭は俗姓。

22 【姚安著論】姚安は北周の道安のこと。姚は俗姓。北周の武帝に對して、佛教の道教に對する優越性を力説した。本文の論は『二教論』を指す。『廣弘明集』卷八辨惑篇に載録される。東都逸俊童子(北周武帝)と西京通方先生(道安)との問答で構成される。東都逸俊童子の「然三教雖殊、勸善義一、塗迹誠異、理會則同。」の主張に對して、西京通方先生は「釋教爲内、儒教爲外。備彰聖典、非爲誕謬。詳覽載籍、尋討源流、教唯有二寧得有三。……若派而別之、則應有九教。若總而合之、則同屬儒宗。……佛教者窮理盡性之格言、出世入眞之軌轍。……惟釋氏之教理富權實。」として反論を加える。本文中の「道を抑えて儒流に在らしめ」るのは、この通方先生つまり道安の主張を言い現わした言葉である。

23 【陳琳綴篇】陳琳は法琳のこと。陳は俗姓。『破邪論』と『辯正論』を指す。『廣弘明集』卷十一辨惑篇、『大正藏』卷五二史傳部四(2109)に載録される。『辯正論』は『廣弘明集』卷一三辨惑篇に載録される。『破邪論』には、「昔吳太宰嚭、問孔丘曰、夫子聖人歟。孔子對曰、丘博識強記、非聖人也。又問、三王聖人歟。對曰、三王善用智勇、聖非丘所知。又問、五帝聖人歟。對曰、五帝善用仁信、聖亦非丘所知。又問、三皇聖人歟。對曰、三皇善用時、聖亦非丘所知。太宰大駭曰、然則孰爲聖人乎。夫子動容、有間曰、西方之人有聖者焉。不治而不亂、不言而自信、不化而自行、蕩蕩乎、民無能名焉。若三王五帝、必是大聖、孔丘豈容隱而不說。便有匿聖之愆。以此校量、推佛爲大聖也。……直就孔老經書、師敬佛處、文證不少。豈突一人所能謗議。」と主張されている。本文中の「釋を揚げて朝典に越えたる」とは、この法琳の主張を表した言葉であろうか。

24 【涅而不緇】『論語』陽貨第一七「佛肸召、子欲往。子路曰、昔者由也聞諸夫子曰、親於其身爲不善者、君子不入也。佛肸以中牟畔、子之往也、如之何。子曰、然。有是言也。不曰堅乎、磨而不磷、不曰白乎、涅而不緇。吾豈匏瓜也哉。焉能繫而不食。」

25 【沈休文之慈濟】『究竟慈悲論』を指す。『廣弘明集』の慈濟篇に載録される。沈休文は沈約のこと。休文は字。生卒年は四四一年

〓五二三年。

26 【顔之推之歸心】『顏氏家訓』内の「歸心篇」を指す。『廣弘明集』の歸正篇に載録される。顔之推は、字は介、生卒年は五二一年〓五九一年。

27 【詞采】『續高僧傳』卷三・釋慧淨傳「今春秋六十有八、聲問轉高。心疾時動、或停法雨、暫有登臨、雲屯學館。義侶則掇其冠冕、文句則定其短長、詞采則揭其青華、音韻則響其諧調。」(T50, 446b)

28 【餘景】餘暇のこと。『續高僧傳』卷一八・釋曇遷傳「惟有國子博士張機。每申盡禮請法。餘景時論莊易、竊傳其義、用訓庠序。」(T50, 572a)

29 【漢陰博觀沙門】前秦の道安。道安法師「摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序」第一(僧祐撰『出三藏記集』卷八)「昔在漢陰十有五載。講放光經、歲常再遍。及至京師漸四年矣。亦恒歲二、未敢墮息。」(T55, 033b)『出三藏記集』卷十五・道安法師傳「安在樊河十五載、每歲常再遍、講放光經、未常廢闕。桓沖要出江陵、朱序西鎮、復請還襄陽。」(T55, 108b)

30 【命帙】校勘により「帙」字に變更。『續高僧傳』卷九・釋法論傳「隱淪青溪之覆舟山、味重成實、研洞文采。談敘之暇、命筆題篇。」(T50, 500a)

31 【藻鏡】すぐれた鑑識、見識。歐陽詢等撰『藝文類聚』卷四八・僕射・表「隋江總讓尚書僕射表曰、藻鏡官方、品裁人物。門驚如市。不慚屋漏。心抱如冰。無欺暗室。」

32 【揣義】眞意を汲む。『續高僧傳』卷一二・釋善曹傳「初遠、以涅槃爲五分、末爲闡維分。曹尋之揣義、改爲七分、無有闡維、第七云結化歸宗分。」(T50, 519c)

33 【擬人以倫】『禮記』曲禮篇下「擬人必於其倫。」

(河邊啓法)

『廣弘明集』 卷五・辯惑篇序 (T54, 117c-118a)

序文成立年Ⅱ唐高宗・麟德元年(六六四)・道宣年六十九

〔釋文〕

俗之惑者、大略有二。初惑佛爲幻僞、善誘人心。二惑因果沈冥、保重身世。且佛名大覺、照極機初、審性欲之多方、練病藥之權道。故能俯現金姿、垂丈六之偉質、流光遍燭、通大千而闡化。致使受其道者、獲證塵砂、內傾十使之纏、外蕩八魔之弊。故能履水火而無礙、攝龍鬼而怡神。三明六通、暢靈襟之妙術、四辯八解、演被物之康衢、其道顯然、差難備敘。

至於李叟稱道、纔闡二篇。名位周之史臣、門學周之一吏、生於厲鄉、死於槐里。莊生可爲實錄、秦佚誠非妄論。而史遷褒之乃云、西遁流砂。漢景信之、方開東夏道學。爾後宗緒漸布、終淪滯於神州、絕智守雌、全未聞於寰海、蒙俗信度、飾詐揚眞。乃造老子化胡等經、比擬佛法、四果十地、劫數周循。結土爲人、觀音侍老、黃書度命、赤章厭祝。斯言孟浪、無足可稱。方欲陵佛而誇法僧、矯俗而爲尊極。通鑑遠識者、自絕生常、瑣學迷津者、或同墜溺。

且道德二篇、涓子所說、伯陽爲尹而傳、是則述而不作。至於四果以下、全非道流。斯乃後學門人、廣開衢術。言輒引類、翻累本宗。故神仙傳云、無識道士、妄傳老子代代爲國師者濫也。葛洪可謂生知之士、千載之一遇也。諸餘碌碌、等駕齊驅。佛經無敘於李聃、道書多涉於釋訓。人流慕上、古諺之常言、惡居下徒、今俗之行事。所以隨有相狀、無不擬儀。道本氣也、無像可圖、今則擬佛、金姿峙列、天堂地獄、連篇施行、五戒十善、曾無異跡。終是才用薄弱、不能自立宗科、竊經盜義、倚傍稱道。至如楊雄太玄、迢然居異、抱樸論道、邈爾開權。莊惠之流、可爲名作、南華近出、亦足命家。豈若上皇之元、密取漢徵之號、剖生左腋、用比能仁之儀。斯途衆矣。具如後顯。

又俗惑三際之業、時輕四趣之報。人死極於此生、生亦莫知何至。由斯淪滯、出竟^{h48}無緣。若不統敍⁴⁹、長迷邐遠。深嫌繁委、何得略之。

〔校勘〕

a 攝Ⅱ「人十攝」(宋・元・明・宮) b 寶Ⅱ環(宋・元・明・宮・中華) c 度Ⅱ受(宋・元・明・宮) d 識Ⅱ說(明)
e 儀Ⅱ義(明) f 迢Ⅱ超(明) g 權Ⅱ權道(宋・元・明・宮) h 竟Ⅱ鏡(宮)

〔訓讀〕

俗の惑う者に、大略二有り。初め佛を幻偽と爲し、善く人心を誘うに惑う。二に因果は沈冥にして、身世を保重するに惑う。且つは佛を大覺と名づけ、照は機初を極め、性欲の多方を審らかにし、病藥の權道を練る。故に能く金姿を俯現し、丈六の偉質を垂れ、流光遍く燭し、大千を通じて化を闡く。其の道を受くる者をして、證を塵砂に獲、内は十使の纏を傾け、外は八魔の弊を蕩^あわしむるを致す。故に能く水火を履みて礙げ無く、龍鬼を攝めて神を怡^やわら。三明六通もて、靈襟の妙術を暢べ、四辯八解もて、被物の康衢に演ぶ。其の道は顯然として、差や備さには敍べ難し。

李叟の道を稱するに至りては、纔かに二篇を闡くのみ。名は周の史臣に位し、門は周の一吏に學び、厲郷に生まれ、槐里に死す。莊生は實錄と爲すべく、秦佚は誠に妄論に非ず。而るに史遷は之を褒めて乃ち云く、「西のかた流砂に通る」と。漢景は之を信じ、方めて東夏に道學を開く。爾の後宗緒漸く布かるるも、終に神州に淪滯し、智を絶ち雌を守るるも、全く未だ寰海に聞かず。蒙俗は度^わるを信じ、飾詐して眞を揚ぐ。乃ち老子化胡等の經を造り、佛法の四果十地、劫數の周循するに比擬し、土を結びて人を爲り、觀音もて老に侍らしめ、黃書もて命を度し、赤章もて厭祝す。斯の言は孟浪にして、稱すべきに足る無し。方に佛を陵ぎて法僧に誇り、俗を矯^ためて尊極となさんと欲す。通鑑遠識の者は、自

ら生常を絶ち、瑣學迷津の者は、或いは墜溺を共にす。

且つ道德の二篇、涓子の説く所にして、伯陽の尹の爲にして傳うとは、是れ則ち述べて作らず。四果以下に至りては、全く道流に非ず。斯れ乃ち後學門人、廣く衢術を開く。言は輒ち類を引き、翻って本宗に累あり。故に神仙傳に云く、「無識の道士の妄りに老子の代代國師と爲るを傳うるは濫なり」と。葛洪は生知の士、千載の一遇と謂うべきなり。諸餘は碌碌として、駕を等しくし驅を齊しくす。佛經は李聃を敍ぶる無く、道書は釋訓に涉ること多し。人の流の上を慕うは、古諺の常言にして、下徒に居るを惡むは、今俗の行事なり。所以に相狀有るに隨い、儀に擬えざる無し。道の本は氣なり、像の圖くべき無し。今則ち佛に擬え、金姿峙列し、天堂地獄、連寫施行し、五戒十善、曾つて異跡無し。終に是れ才用薄弱にして、自ら宗科を立つ能わず。經を竊み義を盗み、倚傍して道と稱す。楊雄の太玄の如きに至りては、迢然として異に居り、抱樸道を論じ、遯爾として權を開く。莊惠の流、作に名づくと爲すべく、南華近く出でて、亦た家に命ずるに足る。豈に上皇の元、密かに漢徹の號に取り、剖きて左腋より生まるること、用つて能仁の儀に比ぶるが若くならんや。斯の途衆し。具さに後に顯らかにするが如し。

又た俗は三際の業に惑い、時は四趣の報を輕んず。人の死は此の生に極まり、生も亦た何くに至るかを知る莫し。斯れに由り淪滯し、竟を出づるに縁無く、若し統敍せずんば、長迷逾いよ遠し。深く繁委を嫌うも、何ぞ之を略すことを得ん。

〔譯文〕

俗世間の中で佛教に對して持つ疑惑には、大きく分けて二つある。まず初めに、實體のない存在である佛が、人の心を大いに導くことを疑い、次に、因果の理はわかりにくく、いかにこの身今生を保全するかに惑う。いったい、佛は「大いなる目覺め」と呼ばれ、その輝きは衆生の機根にあまねく、様々な人々の本性と欲を明らかにして、各々の病（煩惱）

に對する藥としての方便の教えを具體的に示されている。だからこそ、佛は一丈六尺の金色の姿を示し、その光明は大千世界を遍く照らし、人々を教化する道を明らかにした。その教えを受けた者には、塵や砂の如く無數にある迷いの中から悟りを得さしめ、心の内にまとわりつく十の煩惱と、外部から来る八つの魔の弊害とを全て除去させる。それ故、水難や火難をたやすく踏み越え、龍神や鬼神の心をも攝めとって和らがしめる。三明や六神通の力によって、靈妙の佛心よりする深い教えをのべ廣め、四無礙解や八解脱の力によって、煩惱に被われた人々の行き交う大路にのべ示す。佛の道は明らかに示されているものの、詳細に述べようとすればいささか難しいところがある。

一方で、老子は「道」を稱揚しているけれども、わずかに上下二篇を著したにすぎない。そもそも、彼の名は周代の記録者であり、周代のある官吏の門下に學び、厲郷に生まれ、槐里において死んだ。老子の死に關する莊子の記述は事實に基づいた記録であり、秦佚が老子の死に弔問した故事は決して作り話ではない。それにも關わらず、司馬遷は『史記』において、老子を褒め稱えた上にさらに「西方に向かい砂漠を渡って姿を隠した」という。漢の景帝はこれを信じ、ここで初めて中國の地に老子の「道」の學問が開かれた。その後老子の教えはしだいに廣まったが、今はこの地において衰えてしまっており、老子が説く絶智や守雌の實踐は、この世界に未だかつて聞いたことがない。それでも道理に暗い俗人たちは道教の教えを信じてしまい、道教徒は教義を粉飾し詐って、眞の教えであると言いつらした。そこで、老子化胡經などの經典を造り、そこでは、佛教の四果や十地といった僧の修道における階位や、劫というきわめて長い時間を單位として世界が循環するという考え方をまねている。また、土を固めて人間を作った、觀音菩薩は老子像の脇侍とする、などといい、また黃書や赤章など道教の符書を用いて壽命を延ばし、或いは呪術を行うという。しかしながら、このような言葉は全くのでたらめであり、語るに足らない。まさに、老子が佛より優れ、その教えも教團も佛教を超えていると誇り、俗世間を欺いて老子を至高の存在にしようとする。事理に通じる優れた見識を持つ者は、自のずと日常生活のしがらみを斷ち切るが、瑣末な學問に終始し迷いに執われている者は、往々にしてともに蒙昧の淵にしづんでし

まう。

さらに道徳經の二篇は、涓子が説いたもので、これを老子が尹喜に傳えたのならば、これこそ祖述して創作はしなかったということである。だが、前述の四果より以下に至っては、全く道教には無いものである。これはすなわち、後世の學徒や門人たちが、廣く僞作の道筋を開いたのである。口にする言葉はいつも佛教からの援用であり、却って老子の教えそのものに害を及ぼすことになる。それ故、葛洪の『神仙傳』に、「暗愚の道士の中には、むやみやたらに「老子は歷代帝王の國師であつた」と傳える者がいるが、それはでたらめである。」と言っている。葛洪は生まれながら道徳を理解している人物であり、千年に一人の逸材と言えよう。その他の者たちはゴロゴロと轉っている小石のごとく役立たず、どの者の才力もみな似たようなものである。佛教經典には老子に關する記述は無いが、道教經典には佛の教えに關連するものが多い。いったい、人々が高い地位を望むのは、古來の常套句に言うところであり、誰しも低い地位にいるのを厭うのは、この頃の俗世間におけるお定まりである。だから、類似の部分があれば、すべて佛教のそれをまねた。例えば、道教の「道」の根源は氣であり、氣を像かたちとしては畫けない。それが今や佛の金色に輝く姿に似せて堂々と竝べられている。道教經典には、佛畫として畫かれる天堂や地獄を次々と写してはそれを利用し、五戒（不殺生・不偷盜・不邪姪・不妄語・不飲酒）や十善戒（不殺生・不偷盜・不邪姪・不妄語・不惡口・不兩舌・不綺語・無貪・無瞋・正見）を守ることに由るすぐれた事跡はあつた例たといが無い。結局は才と用に乏しくて、道教本來の教えに基づく一宗を獨立することができず、佛教經典から體例と教義を盜用し、それに則つたものを「道〔經〕」と稱したのである。しかしながら、こと楊雄が著述した『太玄經』に關しては、前述の道教とはずっと異なり、また『抱朴子』において葛洪が「道」について論じるのを見てもみると、遙かに權方便としての仮のあり方を開き示している。また莊周と惠施の議論を收めた『莊子』のたぐいは、名高い著作であり、近頃出された『南華』もまた一家とするに足るものである。これらは、漢の武帝が創始した元號制度を援用して、老子が生まれた年に上皇の年號を當てたり、釋迦が摩耶夫人の右脇から生まれたことに擬えて、老子が

「淨妙夫人の左脇から生まれたとする有り様とどうして同じであろうか。このような例は多く、詳しくはこれ以降、明らかにするであろう。

また、世俗の人々は身・口・意の三つの業因に對する果報が過去・現在・未來にわたって生じること、果報によって地獄・餓鬼・畜生・阿修羅の四惡趣に墮ちることを疑い輕んじた。人というものは死ねばそこで一生が終わるのであるから、來世にどこの世界に生まれるのか知る由もない。これによって、人々は煩惱世界に沈み込んでしまつて、境界から脱出しようにもそのための據り所が無い。ここでもし筋道を立てて敘述しなければ、さらに長い閒迷うことになる。できるだけ煩雜になることは避けるが、決して生死長迷からの脱出を示す記述を省略することはいない。

〔語註〕

- 1 【沈冥】 謝靈運「登石門最高頂五言」(『文選』卷二二)「沈冥豈別理、守道自不携。」
- 2 【大覺】 鳩摩羅什譯『成實論』卷一・吉祥品「如吉祥偈說、諸天世人中、無上尊導師、佛爲大覺者、是名最吉祥。」(T32, 241b)
- 3 【機初】 「機」は佛の教法を受け、その教化をこうむるものの素質能力。「初」には根本の意があり、「機初」は機根と同意と解釋する。莊嚴寺法雲「與公王朝貴書」に對する「賀瑒答」(『弘明集』卷一〇)「辱告、垂示救答臣下審神滅論。鑽仰反復、誦味循環、故知妙蘊機初、事隔凡淺、神凝繫表、義絕庸情」(T52, 066b)
- 4 【性欲】 鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』方便品「我以智慧力、知衆生性欲、方便說諸法、皆令得歡喜。」(T09, 009b)
- 5 【病藥】 煩惱を病に喩え、佛の教えを病に對する良藥に喩える。曇無讖譯『大般涅槃經』卷二・壽命品第一之一「諸比丘、譬如大地諸山藥草爲衆生用。我法亦爾。出生妙善甘露法味、而爲衆生種種煩惱病之良藥。」(T12, 376c)
- 6 【權道】 顏延之「又釋何衡陽」(『弘明集』卷四)「答曰、後身著戒云云。未詳所謂慈護者、誰氏之子。若據外書報應之說、皆吾所謂權教者耳。凡講求至理、曾不析之。聖言多採譎怪、以相扶翼。得無似以水濟水乎。釋曰、慈護之主、計亦久聞其人、責以誰子。將以文殊釋氏、知謂報應之說、皆是權教。權道隱深、非聖不盡。雖子通識慮、亦未見其極。」(T52, 026a)
- 7 【俯現】 用例未詳。「俯」には「隠れる」の意味があり、ここでは佛の應身が隱顯することと解釋する。智顗說『摩訶止觀』卷二上

「風觸七處成身業、聲響出脣成口業、二能助意成機、感佛俯降。如人引重、自力不前、假傍救助、則蒙輕舉。行人亦爾。」(T46, 011b) 慧皎撰『高僧傳』卷一・曇摩耶舍傳「又時見沙門飛來樹端者、往往非一。常交接神明、而俯同矇俗。雖道跡未彰、時人咸謂已階聖果。」(T50, 329c)

8 【十使】使とは煩惱の異名。煩惱はよく人を驅使して迷いの世界(生死)に流轉させるから使という。これに貪・瞋・慢・無明・見・疑の六種があり、このうち見を有身見・邊執見・邪見・見取見・戒禁取見の五見にわけて十使という。

9 【八魔】煩惱などすべての衆生を悩ますものを魔と名付ける。八魔とは五陰魔(陰魔・蘊魔、五衆魔、陰界入魔)、煩惱魔(未來の生を感じさせ死に至らしめる煩惱)、死魔(死そのもの)、天子魔(死を超えようとするものを妨げる)の四魔に、無常・無我・無樂・無淨の四顛倒を加えて八魔という。

10 【三明六通】三明とは佛や阿羅漢の持つ三種の神通。智慧のはたらきをもって愚闇を破るから三明といい三達という。六通とは六神通のこと。禪定を修めることなどによって得られる無礙自在な超人間的な不思議なはたらき。神足・天眼・天耳・他心・宿命の五神通に漏神通を加えて六神通という。

11 【四辯八解】四辯とは四無礙解のこと。自由自在でさわりのない理解能力(智解)および言語的表現能力(辯才)のこと。これに四種あるが、いずれも智慧を本質とするから、合わせて四無礙智、理解能力であるから四無礙解、言語能力であるから四無礙辯といひ、略して四無礙、四解、四辯という。八解とは八解脫のことで、八種の定の力のよって貪著の心を捨てること。

12 【纔聞一篇】『史記』卷六三・老子傳「老子脩道德、其學以自隱無名爲務。居周久之、見周之衰、迺遂去。至關、關令尹喜曰「子將隱矣、彊爲我著書。」於是老子迺著書上下篇、言道徳之意五千餘言而去、莫知其所終。」

13 【厲鄉】河南省鹿邑縣のあたり。『史記』卷六三・老子傳「老子者、楚苦縣厲鄉曲仁里人也」

14 【槐里】陝西省興平縣の東南。老子が槐里に死んだという記録は『莊子』や『史記』には見当たらない。法琳撰『辯正論』卷五・佛道先後篇によると、『關中記』を引用して次のように言う。「莊子云、老聃死秦矢弔焉。關中記云、老子葬於槐里(今古扶風始平之南有槐里鄉)」(T52, 522c)。この『關中記』とはおそらく潘獄の『關中記』のことと考えられる。

15 【莊生可爲實錄】莊生は莊周のこと。實錄とは、ここでは老子に關する實錄を指す。現行の『莊子』には老子の生涯に關する記事はあまり見当たらないが、老子の死については傳える。次注參照。

16 【秦佚誠非妄論】『莊子』内篇・養生主「老聃死、秦失弔之、三號而出」の記事を指す。老子の死に弔した友人秦佚が、「三度なく」

という死者に對する弔意を示した場面。

17 【西遁流砂】『史記』には直接このことをしるした記録は無い。『史記』卷六三・老子傳「言道德之意五千餘言而去、莫知其所終。」『集解』列仙傳曰「關令尹喜者、周大夫也。善內學星宿、服精華、隱德行仁、時人莫知。老子西游、喜先見其氣、知真人當過、候物色而跡之、果得老子。老子亦知其奇、爲著書。與老子俱之流沙之西、服臣勝實、莫知其所終。亦著書九篇、名關令子。」

18 【漢景信之】『漢書』卷八八・儒林傳「及至孝景、不任儒、竇太后又好黃老術、故諸博士具官待問、未有進者。」孫權「論絞佛道三宗」(『廣弘明集』卷一)「至漢景帝以黃子老子義體尤深、改子爲經始立道學。」(T52, 099c-100a)

19 【絶智】『老子』第十九章「絶聖棄智、民利百倍。」を指すと解釋する。

20 【守雌】『老子』第二十八章「知其雄、守其雌、爲天下蹊」

21 【老子化胡等經】老子化胡經は西晉の惠帝の頃、道士の王浮は佛教徒との論争に敗れた腹いせに『老子化胡經』を作り、「佛法を誣謗」したという。(『高僧傳』卷一・帛遠傳)。佛・道二教間の論争が盛んに行われた時代には、南北朝時代には何種類かの『化胡經』や『化胡經』という題ではないが老子化胡を説く經典がいくつか作られた。

22 【四果】預流果・一來果・不還果・阿羅漢果のこと。小乗佛教における修道の階位。

23 【十地】大乘經典に説かれる代表的な菩薩の階位。

24 【結土爲人】土をかためて人間をつくること。このような話は、『太平御覽』卷七八・皇王部・女媧氏引く『風俗通』に「俗説、天地開闢、未有人民、女媧搏黃土作人、劇務力不暇供、乃引繩於絙泥中、舉以爲人、故賤貴者黃土人也、貧賤凡庸者絙人也」とあるが、ここでは具體的に甄鸞の「笑道論」の篇名「結土爲人」を指すと考えられる。この篇では、道教經典である『太上三天正法經』に云う人間創造の内容に對して批判する。詳しくは甄鸞「笑道論」(『廣弘明集』卷九)結土爲人の条を参照。

25 【觀音侍老】觀世音菩薩が老君像の脇侍として侍ること。「笑道論」の篇名(目次)。本文中の見出しには「觀音侍道」とある。道士の中に老君像を造る者があり、金剛藏と觀世音の二菩薩を侍らし、また着用する服も佛教の袈裟を盗用したものと批判する。詳しくは觀音侍老の条を参照。因みに、老君像の脇侍に菩薩を以てする事例は、『續高僧傳』卷二二・慧滿傳に「昔周趙王治蜀、有道士造老君像而以菩薩俠侍。僧以事聞。王乃判曰、菩薩已成不可壞。天尊宜進一階官。乃迎于寺中、改同佛相。例相似也。」(T50, 618b)とある。※「笑道論」については、「六朝・隋唐時代の道佛論争」研究班「『笑道論』譯注」(『東方學報』六〇冊、一九八八年)を参照した。

- 26 【黃書】 道教の符書。釋玄光「辯惑論」(『弘明集』卷八)畏鬼帶符非法之極「若受黃書、赤章言、即是靈仙履屐入靖、不朝太上。」(T52, 49a)
- 27 【赤章】 道士が天に祈るときに用いる赤紙に認めた文章。『梁書』卷一三・沈約傳「召巫視之、巫言如夢。乃呼道士奏赤章於天、稱禪代之事、不由己出。」
- 28 【厭祝】 『宋書』卷七二・南平穆王鑠傳「(劉)劭迎將侯神於宮內、疏世祖年諱、厭祝祈請、假授位號、使鑠造策文。」
- 29 【孟浪】 『莊子』齊物論「夫子以爲孟浪之言」
- 30 【迷津】 竟陵文宣王「法集錄序」(『出三藏記集』卷一二)「竝翼讚妙典、俘剪外學、迷津見衢、長夜逢曉。」(T55, 085b)
- 31 【涓子】 古の仙人で齊の人。天人經四八篇を著す。嵇康「琴賦并序」(『文選』卷一八)李善注引く列仙傳に曰く「列仙傳曰、涓子者、齊人、好餌朮、著天地人經三十八篇。釣於澤、得符鯉魚中。隱於宕山、能致風雨。造伯陽九山法。淮南王少得文、不能解其音旨。其琴心三篇有條理焉。」孫盛「老子疑問反訊」(『廣弘明集』卷五)「嵇子云、老子就涓子、學九仙之術、尋乎導養。斯言有徵。至於聖也、則不云學。」(T52, 121b)
- 32 【述而不作】 『論語』述而「子曰「述而不作、信而好古、竊比於我老彭。」
- 33 【神仙傳】 全十卷。葛洪の撰。
- 34 【無識道士、妄傳老子代代爲國師者濫也】 甄鸞「笑道論」(『廣弘明集』卷九)年號差舛の条に「(老子化胡經)又云、代代爲國師、葛洪神仙序中具說已怪尋。」(T52, 145a)とある。これは『太平廣記』卷一・老子の條引く神仙傳に「或云、上三皇時爲玄中法師、下三皇時爲金闕帝君、伏羲時爲鬱華子、神農時爲九靈老子、祝融時爲廣壽子、黃帝時爲廣成子、顓頊時爲赤精子、帝嚳時爲祿圖子、堯時爲務成子、舜時爲尹壽子、夏禹時爲眞行子、殷湯時爲錫則子、文王時爲文邑先生。一云、守藏史。或云、在越爲范蠡、在齊爲鴟夷子、在吳爲陶朱公。皆見於群書、不出神仙正經、未可據也。葛稚川云、洪以爲老子若是天之精神、當無世不出、俯尊就卑、委逸就勞、背清澄而入臭濁、棄天官而受人爵也。夫有天地、則有道術。道術之士、何時暫乏。是以伏羲以來、至于三代、顯名道術、世世有之。何必常是一老子也。皆由晚學之徒、好奇尚異、苟欲推崇老子、故有此說。其實論之、老子蓋得道之尤精者、非異類也。」とある葛洪の言葉を指している。
- 35 【人流慕上】 『春秋左氏傳』襄公三十年「子產相鄭伯以如晉。叔向問鄭國之政焉。……(子產)對曰、伯有侈而愎、子皙好在上、莫能相下也。雖其和也、猶相積惡也。惡至無日矣。」

- 36 【惡居下徒】『論語』子張「子貢曰「紂之不善、不如是之甚也。是以君子惡居下流、天下之惡皆歸焉。」」
- 37 【天堂】天衆の位置する殿堂。天宮ともいう。六道の一つで、欲界・色界・無色界の諸天をいう。また惡行の結果としての地獄に對して、善行の結果として生ずべき天を指す。宗炳「答何承天書」(『弘明集』卷三)「夫心不貪欲、爲十善之本。故能俯絕地獄、仰生天堂、即亦服義蹈道理端心者矣。」(T52, 018b)
- 38 【連寫】王度「奏議序」(『廣弘明集』卷六)「且佛之教義、綸綜有歸、前後文理、無相乖競。尋繹道經、濫竊何甚、不能自立一義、竝傍佛宗。或四果十地、連寫內經、或地獄天堂、全書佛旨。」(T52, 126c)
- 39 【宗科】『廣弘明集』卷二八・悔罪篇序「道安慧遠之儔、命駕而行茲術。至於侯王宰伯、咸仰宗科、清信士女、無虧誠約。」(T52, 330b)
- 40 【楊雄太玄】「楊雄」は、前漢末の思想家・文學者である揚雄のこと。蜀(四川省成都)の人。楊雄と書かれる場合もある。成帝の奢侈を風刺した「甘泉賦」を奏上したところ、帝はこれを珍重した。その後、『易』になぞらえて『太玄經』を著し、無欲で心靜かな生き方を守ろうとした。『漢書』卷八七下・揚雄傳下「哀帝時丁・傅・董賢用事、諸附離之者或起家至二千石。時雄方草太玄、有以自守、泊如也。」「同」卷八七下・揚雄傳贊「贊曰……實好古而樂道、其意欲求文章成名於後世、以爲經莫大於易、故作太玄。」
- 41 【抱樸】『老子』第十九章「見素抱朴、少私寡欲。」を典據とする語句であるが、ここでは、この典據から號をとった葛洪(號抱朴子)か、或いは著書『抱朴子』を指すと考えられる。
- 42 【開權】『法華經』解釋の教義で「開權顯實」の用語があるが、ここでは權方便として仮のあり方を開き示すことと解釋した。智顗說「摩訶止觀」卷三下「五明權實者、權是權謀、暫用還廢。實是實錄、究竟旨歸。立權略爲三意。一爲實施權、二開權顯實、三廢權顯實。如法華中蓮華三譬。」(T16, 034a)
- 43 【莊惠之流】「莊惠」とは莊周と惠施。惠施は梁の惠王に仕えた莊周と同じ頃の人で、莊周との交渉も密接であり、二人の間で行われた議論が『莊子』の全編にわたって見える。ここでは、「莊惠」で二人の議論を収めた『莊子』を指すと考えられる。劉峻「廣絶交論」(『文選』卷五五)「莫不締恩狎、結綢繆、想惠莊之清塵、庶羊左之徵烈。」
- 44 【南華近出】『莊子』を『南華真經』に改名したのは、唐の天寶中であることから、直接『莊子』を指すのか斷定できない。『隋書』經籍志には「南華論二十五卷梁曠撰、本三十卷。」と「南華論音三卷」が見える。「太宗下敕以道士三皇經不足傳授令焚除事」(『集古今佛道論衡』卷丙)「至如南華幽求、固是命家之作、不可及也。」(T52, 386b)

45 【命家】慧皎撰『高僧傳』卷一三・僧辯傳「明旦即集京師善聲沙門龍光普智新安道興多寶慧忍天保超勝及僧辯等、集第作聲。辯傳

古維摩一契、瑞應七言偈一契。最是命家之作。」(T50, 41b) 及び、(注44) 参照

46 【上皇之元、取漢徹之號】「上皇之元」は老子が周代にこの世に降った時の年號。「漢徹」は漢の武帝劉徹を指す。「取漢徹之號」

で、漢の武帝が創始した「年號」を取った、すなわち漢の武帝になって初めて年號が創始されたはずであるのに、それ以前に年號があるのはおかしいことを言う。この議論は、甄鸞『笑道論』(『廣弘明集』卷九) 年號差舛の條にある。冒頭に『道德經序』に云うとして「老子以上皇元年丁卯、下爲周師、無極元年癸丑、去周度關。」(T52, 14c) という記事を引用し、これに對して、「笑曰、古先帝王、立年無號。至漢武帝、創起建元。後王因之、遂至今日。上皇孟浪、可笑之深」(T52, 14c) と言つ、このあとも年號の誤謬について批判する。因みに、漢の武帝を「漢徹」と呼ぶ例は、『魏書』卷八三・文苑傳序に「及太和在運、銳情文學、固以頡頏漢徹、跨臨曹丕、氣韻高遠、豔藻獨構。」とあり、『續高僧傳』卷三・慧淨傳には「故能抑揚漢徹、孕育曹丕。」(T50, 43c) とある。

47 【剖生左腋、用比能仁之儀】釋迦が摩耶夫人の右脇から生まれたことに擬えて、淨妙夫人の左脇から生まれたとした。『南齊書』卷五四・顧歡傳「佛道二家、立教既異、學者互相非毀。歡著夷夏論曰、夫辨是與非、宜據聖典。尋二教之源、故兩標經句。道經云「老子入關之天竺維衛國、國王夫人名曰淨妙、老子因其晝寢、乘日精入淨妙口中、後年四月八日夜半時、剖左腋而生、墜地即行七步、於是佛道興焉。」此出玄妙內篇。」

48 【出竟】「竟」は「境」の意で、迷いの境界から出ること。智顗說『法華文句』卷一上「什師云、始出妻子家、應以乞食自資、清淨活命。終出三界家、必須破煩惱、持戒自守。具此二義、天魔怖其出境也。」(T34, 006c)

49 【統敍】『續高僧傳』卷一一・法侃傳「仁壽二年、文帝感瑞、廣召名僧、用增像化。敕侃往宣州、安置舍利。既奉往至、統敍國風、陶引道俗。」(T50, 513b)

(藤井政彦)

〔釋文〕

又序曰、夫解惑之生、存乎博見義舉、傳聞闡託、信爲難辯舟師。故四不壞淨、位居入流之始、一正定聚、方稱涉正之域。餘則初染輕毛、隨風揚扇、不退漆木、雖磨不磷。是以辯惑履正、開於悟達之機、宅形安道、必據稽明之德。自法流震旦、信毀相陵、多由臆斷、師心統決。三際必然之事、乃謂寓言、六道昭彰之形、言爲虛指。

夫以輪迴生死、隨業往還、依念念而賦身、逐劫劫而傳識。所以濠上英華、著方生之論、柱下叡哲、稱其鬼不神。可謂長時有盡、生涯不窮。禹父既化黃能、漢王變爲蒼犬、彭生豕見、事顯齊公、元伯纓垂、名高漢史、斯途衆矣。難備書紳。無識之倫、妄生推託、便言三后在天、勸誘之高軌。陳祭鬼饗、孝道之權猷。斯則乖人倫之典謨、越天常之行事、詭經亂俗、不足言之。

若夫繫述遊魂之談、經敘故身之務、昭穆有序、祖尊重親。追遠慎終、由來之同仰、踐霜興感、列代之彝倫。安有捐擲所生、專存諸己、橫陳無鬼之論、自許有身之術。前集已論、今重昌顯。固須讎校名理、尋討經論、卷部五千、咸經目閱、義通八藏、妙識宗歸。若斯博詣、事絕迴惑。

竊以、六因四緣、乘善惡而成業、四生六道、紹升沈之果報。茲道坦然、非學不達。豈可信凡庸之臆度、排大聖之明略哉。況復列十度之仁舟、濟大心於苦海、分四諦之階級、導小智之邪山。三學以統兩乘、四輪而摧八難。梗概若此。無由惑之。

又以寺塔崇華、糜費於財事、僧徒供施、叨濫於福田、過犯滋彰、譏嫌時俗、通汚佛法、咸被湮埋。故周魏二武、生本

幽都⁴⁷、赫連兩君、胤惟^j獵狁^k。卿非仁義之域、性絕陶甄之心。擅行殲殄、誠無足怪。今疏括列代、編而次之。庶或迷沒^l、
披而取悟。序之云爾。

〔校勘〕

a 曰^{||}無し(明) b 託^{||}記(宋・元・明・宮) c 辯^{||}辨(宋・元・明・宮) d 辯^{||}辨(宋・元・明・宮) e 能^{||}熊(宮) f
昭^{||}韶(宋・宮) g 祖尊^{||}尊祖(宋・元・明・宮) h 迴^{||}迴(明) i 事^{||}帛(宋・元・明・宮) j 惟^{||}唯(宋・元・明・宮)
k 獵^{||}狁(宋・元・明・宮) l 或^{||}惑(宮)

〔訓讀〕

又た序に曰く、夫れ惑を解くことの生ずるは、博く義學を見るに存し、傳聞闇託は、信に舟師を辯じ難しと爲す。故
に四不壞淨^{ふへじよう}は、位 流に入るの始めに居り、一正定聚^{しやうぢやうじゆ}は、方正しきに渉るの域に稱う。餘は則ち初染輕毛は、風に
隨い揚扇し、不退漆木は、磨すと雖も磷まらず。是を以て惑を辯じ正しきを履むには、悟達の機を開き、形に宅し道に
安んずるには、必ず稽明の徳に據る。法の震旦に流れてより、信毀相い陵ぐは、多くは臆斷に由り、心を師とし統決す
ればなり。三際必然の事、乃ち寓言と謂い、六道昭彰の形、言いて虚指と爲す。

夫れ以みるに輪迴生死は、業に隨い往還し、念念に依りて身を賦し、劫劫に逐いて識を傳う。所以に濠上の英華は、
方生の論を著し、柱下の叡哲は、其の鬼神ならずと稱す。謂うべし、長時は盡くる有るも、生涯は窮まらず、と。禹
父は既に黃能と化し、漢王は變じて蒼犬と爲る。彭生豕見われ、事齊公に顯わる。元伯の纓垂るは、名漢史に高し。斯
の途衆し。備には紳に書し難し。無識の倫、妄に推託を生じて、便ち言う三后天に在るは、勧誘の高軌なり。陳祭鬼饗
するは、孝道の權猷なり、と。斯れ則ち人倫の典謨に乖き、天常の行事を越し、經に詭^{そむ}き俗を亂す。之を言うに足らず。

夫の繫に遊魂の談を述べ、經に故身の務を敘ぶるが若きは、昭穆に序有り、祖尊びて親を重んず。遠きを追い終りを慎むは、由來の同に仰ぐものにして、霜を踐み感を興すは、列代の彝倫なり。安んぞ生る所を捐擲し、専ら諸れを己に存して、横に無鬼の論を陳べ、自ら有身の術を許すこと有らん。前集は己に論じ、今は重ねて昌顯す。固より、須く名理を鏤校し、經論を尋討す。卷部五千、咸く目閲を經、義は八藏に通じ、妙は宗歸を識る。斯の若く博く詣り、事は迴惑を絶つ。

竊かに以えらく、六因四縁は、善惡に乗じて業を成し、四生六道は、升沈の果報を紹ぐ。茲の道坦然たるも、學ぶに非ざれば達せず。豈に凡庸の臆度を信じ、大聖の明略を排すべけんや。況や復た十度の仁舟を列ね、大心を苦海より濟い、四諦の階級を分け、小智の邪山より導くをや。三學以て兩乘を統べ、四輪而て八難を摧く。梗概此の若し、之に惑うに由しなし。

又た以えらく、寺塔の崇華、財事を糜費し、僧徒の供施、福田を叨濫し、過犯^{ますま}滋す彰かにして、譏嫌の時俗、通ねく佛法を汚し、威な湮埋を被る。故より周魏の二武、生は本と幽都、赫連の兩君、胤は惟れ玃玃なり。卿は仁義の域に非ずして、性は陶甄の心を絶つ。擅まきに殲殄を行うも、誠に怪しむに足る無し。今列代を疏括し、編して之を次^{ついで}づ。庶くは或は迷没、披きて悟を取らんことを。之を序べて爾か云う。

〔譯文〕

再び序として述べる。いったい惑いを解消させることができるのは、示された義を見分けることにあり、うわさ話や曖昧な推測は、ほんとうに佛法を示し指導してくれる者を見分け難くさせるだろう。それだから三寶と戒を堅持する四不壞淨は、佛道に入る始めの段階に位置し、聖者の段階である正定聚は、正理を渡り歩く境地にかなっている。その他は佛道に入りたてで軽い毛のように行いと心が定まらないものは、風に乗って舞い飛ぶように「世閒に」翻弄され、不

退轉で漆木のように堅固なものは、いくら磨り減らしたとしても薄くならない。こういうわけで惑いを明らかにして正しき道を履むには、悟りへの機根をありありとさせ、今生の肉體に宿らせ佛法に安んずるためには、必ずや稽明の徳を據り所とする。佛法が中國に傳わってから、佛法を信じたり誹つたりすることが交互に現れたのは、憶測での判斷によつていて、己の分別にしがみ付きまとめて決めつけてしまっていることによる。三世は必然であるのに、たとえば話だといひ、六道輪廻はあきらかであるのに、根據のないでたらめな説だとしている。

思うに、六道中の何れかに生死を繰り返すことは、その業に準じ行き来して、肉體を刹那刹那の僅かな時間だけ付與し、その神（こころ）を永遠の時間傳えていることであろう。それだから莊子は、物事の相對性とそれを超えた境地についての論理を明らかにし、老子は、「無爲の道によれば」鬼神も祟ることがないと主張した。このようにも謂えるだろう、長い時でさえいつかは終わりが有るが、「六道に輪廻する」生涯（生死）は終わることがない、と。禹の父の鯀が黃熊と爲ったこと、漢の趙王が蒼犬と爲り崇ったこと、彭生が豕として現れ、齊の襄公に祟りをなしたことや、『後漢書』に明記されているように、元伯（張劭）の死の直後に友人の夢に現れ自らの死を知らせたことなど、このような事は多くあり、「大切なものであるけれども」詳しく大帯に記すのが困難である。無知なる人々は、考えなしに根拠の無い推測を起こして、このように言うのだ、「古の大王・王季・文王の神靈が天に在るのは、人々を正しい道に導き入れるすぐれた軌範である」や、「死者（特に兩親）の靈を宗廟に祭り祖神がそれを享けることは、孝道の方便的な道である」、と。これらは人が踏み行うべき教えから遠くなり、天道の目に見える事實を踏み越え、法に詭^{そむ}いて世の中を亂している。このようないふことは言うまでもない。

また『易』繫辭傳に天に昇り切らず浮遊している魂が變異をもたらすと述べ、經典に亡骸に對する務を敘べており、それは廟には昭穆の順序が有り、先祖を尊び親縁に親しむすがたをとる。遠い先祖を追慕し、自らの父母に對する葬式の禮を慎重に大切にするのは、祖先の靈を同じく仰ぐことで、霜を踐む行爲により「父母・祖先に對する」思いを興す

のは、世々の常理である。どうして「自らの」起源である父母・祖先を捨ててしまい、専ら自身の存在にのみ關心をよせ、勝手に無鬼の説を陳べ、自ら肉體を保つ術を當てにすることが有るだろうか。『弘明集』で已に神滅・不滅について論じられていて、今この『廣弘明集』でも重ねて顯かにした。固よりぜひとも、論理を正し、經藏・論藏に教えをたずね、卷部五千以上にもなる經典は、悉く讀み調べて、聲聞・菩薩の各四藏に通じてその義を知り、おおもとの歸着點である神妙たるものを知るべきである。このようにあまねく達すれば迷惑を絶つことになる。

心密かに思う。結果を引き起こす内・外の原因（六因四縁）は、理に順ずるか（善因果）違えるか（惡因果）に因つてその人の業を定め、どのように生まれるかの形式・出生する世界（四生六道）は、「安定せず」升ったり沈んだりする果報をつなぐ。このような道が明瞭な教えであっても、學ばなければ悟ることができない。愚凡な人の憶測を信じて、比類ない人の明快な教えを排せるはずがあるまい。ましてやかさねて十波羅蜜の教えを列ね、實際の無い苦そのものの海から悟りを求める心をすくい、四諦の順序を明らかにし、とるに足りぬ智慧の邪見より導き出さしめることこそなおさらに大切である。戒學・定學・慧學により聲聞・緣覺の兩乘をも一つにし、四輪により八つの佛道修行の障礙をくじく。大略はこのようなもので、これらのことに惑うのに理由などない。

又た寺塔を華美にするために、財物をぜいたくに使い、僧徒への供養では、「福德・功德を受けんがために、濫りに佛・僧等への奉仕を行い」福田の教をそこない、過ちがますます顯著になり、譏ったり嫌ったりする俗人（俗世間）は、すべて佛法を辱しめて、威なあとかたも無くしてしまう。北周の武帝と北魏の太武帝の二人の皇帝は、出生の地は本々北の果ての地で、匈奴の赫連勃勃と赫連昌の兩君は、血統は北狄であり、その場所が道徳が行われる土地柄ではなく、人々を導こうとする心を元來持っていない。これらの君主が廢佛の政策を行ったことはまことに怪しむに足らない。今代々の記録を整理してまとめ、順序立てて編纂した。願わくは迷惑に没在する人も、この書を開き見て、悟りを得んことを。以上、序を述べ。

【語註】

- 1 【義舉】『續高僧傳』卷二十二・明律篇論「自初開律、釋師號法聰。元魏孝文、北臺楊緒、口以傳授、時所榮之。沙門道覆、卽紹聰緒、讚疏六卷。但是長科、至於義舉、未聞于世。」(T50, 620c)
- 2 【聞託】『四分律刪繁補闕行事鈔』卷上・標宗顯德篇(T40, 004b)「研習積年、猶迷聞託、況談世論。」『四分律行事鈔資持記』卷上・一之下・釋標宗篇「聞託謂不達前事。」(T40, 179c)
- 3 【舟師】佛法を衆生に垂れ導く者の例え。『廣弘明集』卷一五・佛德篇序「序曰、夫以、蒙俗作梗、妙籍舟師、師之大者、所謂王也。故王者往也、若海之朝宗百川焉。王之取號、況於此也。」(T52, 395c)『集古今佛道論衡』卷丁・續附「佛垂法網、是舟師於形有。」(T52, 395c)
- 4 【一正定聚】三聚の一。三聚とは、邪定聚・正定聚・不定聚の三つをいう。正定聚は、既に解脫して佛となることが約された境地を指す。
- 5 【初染】修行の初期段階における僧をいう。般若流支譯『正法念處經』卷四五・觀天品之二四(夜摩天之十)「初染之時、歡喜愛多、後時苦多。」(T17, 267c)
- 6 【輕毛】風に吹かれる輕毛のように、未だ進退が不安定な菩薩のことをいう。鳩摩羅什譯『仁王般若波羅蜜經』卷下・受持品第七「善男子、習忍以前行十善菩薩、有退有進。譬如輕毛、隨風東西、是諸菩薩、亦復如是。」(T08831b)智顗撰『妙法蓮華經文句』卷二上「若六心已前輕毛、菩薩信根未立其位猶退。」(T34, 021a)
- 7 【漆木】佛の禪定の堅固なることを譬えていう。鳩摩羅什譯『成實論』卷一・發聚中佛寶論初具足品第一「又佛定堅固、如漆漆木、餘人禪定、如華上水、不得久住。又佛禪定、於無量劫、次第漸成。故能具足。又如來定、不待衆緣若人若處若說法等、餘人不爾。」(T32, 239b)
- 8 【雖磨不磷】『論語』陽貨篇「佛胥召、子欲往。子路曰、昔者由也聞諸夫子曰、親於其身爲不善者、君子不入也。佛胥以中牟畔、子之往也、如之何。子曰、然。有是言也。不曰堅乎、磨而不磷。不曰白乎、涅而不緇。吾豈匏瓜也哉。焉能繫而不食。」
- 9 【宅形】形(肉體)に宿らせることをいう。鄭道子「神不滅論」(『弘明集』卷五)「若其然也、則有意於賢愚、非忘照而玄會、順理玄會、順理盡形、化神宅形。子不疑於其始、彼此一理而性於其終耶。」(T52, 028c)
- 10 【師心】『莊子』內篇・人間世第四「仲尼曰、惡。惡可。大多政、法而不諱、雖固亦無罪。雖然、止是耳矣、夫胡可以及化。猶師心

者也。」

11 【虚指】 根據もなく述べているでたらめな言説をいう。『管子』白心篇「上聖之人、口無虚習也、手無虚指也。物至而命之耳。」甄鸞撰「笑道論」諸子道書（『廣弘明集』卷九・辯惑篇第二之五）「又說統收道經目錄、乃有六千餘卷。覈論見、本止有二千四十卷。餘者虚指未出。」（T52, 152c）

12 【輪迴生死】 六道（六趣）に生死を繰り返すことをいう。鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』方便品「以諸欲因緣、墜墮三惡道、輪迴六趣中、備受諸苦毒、受胎之微形、世世常增長、薄德少福人、衆苦所逼迫、入邪見稠林、若有若無等、依止此諸見、具足六十二。」（T08, 008b）

13 【念念】 刹那刹那の極めて短い瞬間。鳩摩羅什等撰『注維摩詰經』卷二・方便品「如空聚。……肇曰、……是身無常、念念不住、猶如電光暴水幻炎。亦如畫水、隨畫隨合。」（T38, 342b）

14 【劫劫】 法琳撰『辯正論』卷五・佛道先後篇第三「第四佛者、即釋迦文。自餘續興、終乎劫盡爾。乃劫、劫、相次、則佛佛無窮者也。」（T52, 521b）

15 【所以濠上英華、著方生之論、柱下叡哲、稱其鬼不神。】 及び【三后在天】 本文の當該箇所は、恐らく「明山賓答」を踏まえて書かれている。「明山賓答」のその箇所は、何れも神不滅を立證するために書かれている。「五經博士明山賓答」（『弘明集』卷十・莊嚴寺法雲法師與公王朝貴書（并公王朝貴答））「論者限以視聽、豈達曠遠。目睹百年、心惑三世。謂形魄既亡、神魂俱滅。斯則既違釋典、復乖孔教矣。焉可與言至道、語其妙理者哉。夫明則有禮樂、幽則有鬼神。是以孔宣垂範以知死酬問、周文立教以多才代終、詩稱三后在天、書云、祖考來格、且濠上英華、著方生之論、柱下叡哲、稱其鬼不神。爲薪而火傳、交臂而生謝。此皆陳之載籍、章其明者也。」（T52, 066c）

16 【濠上英華】 莊子のことをいう。惠子と濠梁の上に遊んだことにちなむ。『莊子』外篇・秋水第一七「莊子與惠子遊於濠梁之上。莊子曰、鯈魚出遊從容、是魚之樂也。惠子曰、子非魚、安知魚之樂。莊子曰、子非我、安知我不知魚之樂。惠子曰、我非子、固不知子矣。子固非魚矣、子之不知魚之樂全矣。莊子曰、請循其本。子曰『汝安知魚樂』云者、既已知吾知之而問我、我知之濠上也。」

17 【方生之論】 「彼」と「是」の相對性を説き、その一切の差別と對立を超越した「道樞」の境地となることをいう論。前半の此彼是非の相對性を説く部分は、惠子の説ではないとも言われる。『莊子』内篇・齊物論第二「物無非彼、物無非是。自彼則不見、自知則知之。故曰彼出於是、是亦因彼。彼是方生之說也、雖然、方生方死、方死方生。方可方不可、方不可方可。因是因非、因非因是。是

以聖人不由、而照之於天、亦因是也。是亦彼也、彼亦是也。彼亦一是非、此亦一是非。果且有彼是乎哉。果且無彼是乎哉。彼是莫得其偶、謂之道樞。樞始得其環中、以應無窮。是亦一無窮、非亦一無窮也。故曰莫若以明。」

18 【柱下叢哲】 老子のことを指す。周代に「守藏室之史（柱下史）」であったことにちなむ。『史記』卷六十三・老子韓非列傳第三「老子者、楚苦縣厲廬曲仁里人也、姓李氏、名耳、字聃、周守藏室之史也。」索隱「按、藏室史、周藏書室之史也。又張蒼傳、老子爲柱下史、蓋即藏室之柱下、因以爲官名。」

19 【其鬼不神】 無爲の道により天下を治めれば安らかに治まり、鬼神も鬼神としての靈妙な威力を持たない（祟らないようになる）ことをいう。『老子』六十章「治大國、若烹小鮮。以道蒞天下、其鬼不神。非其鬼不神、其神不傷人。非其神不傷人、聖人亦不傷人。夫兩不相傷、故德交歸焉。」

20 【禹父既化黃能】 『春秋左氏傳』昭公七年「鄭子產聘于晉。晉侯疾。韓宣子逆客、私焉曰、寡君寢疾、於今三月矣。竝走群望、有加而無瘳。今夢黃熊入于寢門。其何厲鬼也。對曰、以君之明、子爲大政。其何厲之有。昔堯殛鯀于羽山、其神化爲黃熊、以入于羽淵、實爲夏郊、三代祀之。晉爲盟主、其或者、未之祀也乎。韓子祀夏郊。晉侯有聞、賜子產莒之二方鼎。」

21 【漢王變爲蒼犬】 『史記』卷九・呂太后本紀第九「王有所愛姬、王后使人酖殺之。王乃爲歌詩四章、令樂人歌之。王悲、六月卽自殺。……三月中、呂后祓還、過軹道、見物如蒼犬、據高后掖、忽弗復見。卜之、云趙王如意爲祟。高后遂病掖傷。」

22 【彭生豕見事顯齊公】 『春秋左氏傳』桓公十八年「夏、四月丙子、享公、使公子彭生乘公。公薨于車。魯人告于齊曰、寡君畏君之威、不敢寧居。來脩舊好、禮成而不反。無所歸咎、惡於諸侯。請以彭生除之。齊人殺彭生。」『春秋左氏傳』莊公八年「冬、十二月、齊侯游于姑楚、遂田于貝丘。見大豕。從者曰、公子彭生也。（襄）公怒曰、彭生敢見。射之。豕人立而啼。公懼、隊于車、傷足喪履。……」

23 【元伯纓垂】 『後漢書』范式傳「范式字巨卿、山陽金鄉人也、一名汜。少遊太學、爲諸生、與汝南張劭爲友。劭字元伯。二人竝告歸卿里。……式仕爲郡功曹。後元伯寢疾篤、同郡郗君章・殷子徵晨夜省視之。元伯臨盡、歎曰、恨不見吾死友。子徵曰、吾與君章盡心於子、是非死友、復欲誰求。元伯曰、若二子者、吾生友耳。山陽范巨卿、所謂死友也。尋而卒。式忽夢見元伯玄冕垂纓屣履而呼曰、巨卿、吾以某日死、當以爾時葬、永歸黃泉。子未我忘、豈能相及。式恍然覺寤、悲歎泣下、具告太守、請往奔喪。太守雖心不信而重違其情、許之。式便服朋友之服、投其葬曰、馳往赴之。……」

24 【書紳】 『論語』衛靈公「子張問行。子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉。立、則見其參

於前也。在輿、則見其倚於衡也。夫然後行。子張書諸紳。」

- 25 【三后在天】三后は、大王・王季・文王を指す。この三王の神靈が天に在ることをいう。『詩』大雅・文王之什「下武維周、世有哲王。三后在天、王配于京。王配于京、世德作求。永言配命、成王之孚。成王之孚、下土之式。永言孝思、孝思維則。媚茲一人、應侯順德。永言孝思、昭哉嗣服。昭茲來許、繩其祖武。於萬斯年、受天之祜。受天之祜、四方來賀。於萬斯年、不遐有佐。」『尚書』盤庚中第十「故有爽德、自上其罰汝、汝罔能迪。」孔穎達疏「傳湯有至無辭。正義曰、訓爽爲明、言其見下。故稱明德、詩稱三后在天。死者精神在天、故言下見汝。」

- 26 【勸誘】慧遠撰「沙門袒服論」（『弘明集』卷五）「如此則情禮專向修之不倦。動必以順不覺形之自恭。斯乃如來勸誘之外因。斂鹿之妙跡。」（T52, 032c）

- 27 【陳祭鬼饗】『禮記』問喪篇第三五「親始死。鵲斯徒跽。扱上衽、交手哭。……祭之宗廟、以鬼饗之、微幸復反也。」

- 28 【天常】『春秋左氏傳』文公一八年「傲很明德、以亂天常。」

- 29 【繫述遊魂之談、經敘故身之務】本文の當該箇所は恐らく「侍中王蒜答」を踏まえて書かれている。『弘明集』侍中王蒜答は、梁武帝の「答臣下神滅論」をうけて書かれている。また侍中王蒜答中の「經述故身之義」は、武帝が神不滅を立證するのに『孝經』と『禮記』を引用しているのを踏まえて、おそらく『孝經』喪親章を意識しているとされる（『弘明集研究』參照）。梁武帝の神滅論や神不滅に關する論は、「神明成佛義記」（『弘明集』卷九、沈續の序注を含む）と「敕答臣下神滅論」（『弘明集』卷一〇）の二つがある。しかし、この二つを見る限り、直接『孝經』を引用している箇所は無く、引用されている經は、『孟子』（※『莊子』・『禮記』）と、『大般涅槃經』の三つである。或いは、「敕答臣下神滅論」では、「觀三聖設教、皆云不滅」とも言っているので、六經全體のことを言うとも考えられる。『侍中王蒜答』（『弘明集』卷一〇・莊嚴寺法雲法師與公王朝貴書（并公王朝貴答））「枉告并奉覽敕答臣下神滅論。聖旨玄照、啓瘡群蒙。義顯幽微、理宣寂昧。夫經述故身之義、繫敘遊魂之談。愚淺所辯、已爲非滅。況復叡思弘遠、盡理窮微。引文證典、煥然冰釋。肉眼之人、虔恭迴向、惑累之衆、悛改浮心。發明既往、訓導將來。伏奉淵教、欣蹈罔已。王蒜和南。」（T52, 062a）

- 30 【遊魂之談】天に昇り切らず浮遊している魂が何らかの變異をもたらすことをいう。『易』繫辭上傳「仰以觀於天文、俯以察於地理。是故知幽明之故。原始反終。故知死生之說。精氣爲物、遊魂爲變。是故知鬼神之情狀。」

- 31 【昭穆有序】『禮記』大傳「上治祖禰、尊尊也。下治子孫、親親也。旁治昆弟、合族以食、序以昭穆。別之以禮義、人道竭矣。」

- 32 【祖尊重親】親縁に親しみ、（その親縁の發生する源として）先祖を尊ぶことをいう。『禮記』大傳「自仁率親、等而上之至于祖、

自義率祖、順而下之至於禰。是故人道親親也。親、親、故、尊、祖。尊祖故敬宗。敬宗故收族。收族故宗廟嚴。宗廟嚴故重社稷。重社稷故愛百姓。愛百姓故刑罰中。刑罰中故庶民安。庶民安故財用足。財用足故百志成。百志成故禮俗刑。禮俗刑然後樂。詩云、不顯不承、無斁於人斯。此之謂也。』《集古今佛道論衡》卷丙・文帝幸弘福寺立願重施敘佛道先後事第八「帝謂僧曰、比以老君是朕先宗、尊祖、重親有生之本、故令在前。師等大應懷恨。」(T52, 386a)

33 【追遠慎終】「追遠」は、自分から遠くなった先祖をも、いつまでも追慕して、それらに對する祭祀を鄭重に行うこと。「慎終」は、人の死に對する儀式（特に父母に對する葬式）の禮を慎重に大切にすることをいう。『論語』學而篇「曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣。」

34 【踐霜】『易』坤「初六。履霜、堅冰至。象曰、履霜、堅冰、陰始凝也。馴致其道、至堅冰也。」

35 【無鬼之論】未詳作者「正誣論」(『弘明集』卷一)「凡俗人常謂、人死則滅、無靈無鬼。」(T52, 008a)『晉書』卷四九・阮瞻傳(阮籍兄子咸 咸子瞻)「永嘉中、爲太子舍人。瞻素執無鬼論、物莫能難、每自謂此理足可以辯正幽明。忽有一客通名詣瞻、寒溫畢、聊談名理。客甚有才辯、瞻與之言、良久及鬼神之事、反覆甚苦。客遂屈、乃作色曰、鬼神、古今聖賢所共傳、君何得獨言無。即僕便是鬼。於是變爲異形、須臾消滅。瞻默然、意色大惡。後咸餘、病卒於倉垣、時年三十。」『宋書』卷六九・范曄傳「曄常謂死者神滅、欲著無鬼論。」王充撰『論衡』卷二四・譏日篇「夫祭者、供食鬼也。鬼者、死人之精也。若非死人之精、人未嘗見鬼之飲食也。……實者、百祀無鬼、死人無知。百祀報功、示不忘德。」

36 【有身之術】「有身」は自分の肉體のこと。自らの肉體に執着して、それを保とうとすることをいう。『抱朴子』四卷・內篇・金丹「世人飽食終日、復未必能勤儒墨之業、治進德之務、但共逍遙遨遊、以盡年月。其所營也、非榮則利。或飛蒼走黃於中原、或留連盃觴以羹沸、或以美女荒沈絲竹、或耽淪綺紈、或控弦以弊筋骨、或博奕以棄功夫。聞至道之言而如醉、睹道論而晝睡。有身不修、動之死地、不肯求問養生之法、自欲割削之、煎熬之、憔悴之、澆汽之。而有道者自寶秘其所知、無求於人、亦安肯強行語之乎。」慧遠撰「沙門不敬王者論」出家第二(『弘明集』卷五)「出家則是方外之賓、跡絕於物。其爲教也、達患累緣於有身、不存身以息患、知生生由於稟化、不順化以求宗。」(T52, 030b)治城惠通撰「駁顧道士夷夏論」(『弘明集』卷七)「又道跡密而微。利用在己。故老子云、吾所以有大患者、爲吾有身。及吾無身、吾有何患。吾子以軀爲長保。何其乖之多也。夫後身而身先、外身而身存。惟云在己。未知此談以何爲辯。」(T52, 046c)『老子』十三章「何謂貴大患若身。吾所以有大患、爲我有身。及我無身、吾有何患。」

37 【八藏】聲聞乘と菩薩乘との四藏(經藏・律藏・論藏・雜藏)を合わせて、八藏とする。

- 38 【六因四縁】 結果を引き起こすための直接の内的原因を因といい、これを外から助ける間接的原因を縁という。四縁は、因縁・次第縁・縁縁・増上縁の四つを指す。鳩摩羅什譯『中論』觀因緣品第一「問曰、阿毘曇人言、諸法從四縁生。云何言不生。何謂四縁。因縁次第縁 縁縁増上縁 四縁生諸法 更無第五縁 一切所有縁、皆攝在四縁。以是四縁、萬物得生。因縁名一切有爲法。次第縁除過去現在阿羅漢最後心心數法、餘過去現在心心數法。縁縁増上縁一切法。」(T30, 002b~c)
- 39 【四生六道】 「四生」は、生物の生まれる四種の形式(胎生・卵生・濕生・化生)をいう。「六道」は、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の六つをいう。
- 40 【十度】 十波羅蜜に同じ。波羅蜜は、菩薩が迷いの此岸から悟りの彼岸に到るために修める行のこと。六波羅蜜(六種の行、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六つの波羅蜜)があり、十波羅蜜は、六波羅蜜に方便・願・力・智の四つの波羅蜜を加えたもの。
- 41 【仁舟】 隋薛道衡撰「弔延法師亡書」(『廣弘明集』卷二四・僧行篇五之二)「法師弱齡捨俗、高蹈塵表、志度恢弘、理識精悟。……信足以追蹤澄什、超邁安遠。而法柱忽傾、仁舟遽沒。匪直悲纏四部、固亦酸感一人。」(T52, 280b~c)
- 42 【四諦】 四聖諦や四眞諦ともいう。四種の間違いない眞理(苦諦・集諦・滅諦・道諦)のこと。佛陀が最初の説法(初轉法輪)で説いたとされ、佛教教義の大綱が示されている。苦諦・集諦は迷妄の世界の果と因を示し、滅諦・道諦は證悟の世界の果と因を示しており、夫々順序がある。
- 43 【邪山】 智顗説『摩訶止觀』卷五之上「觀能破闇、能照道、能除怨、能得寶、傾邪山、竭愛海、皆觀之力。」(T46, 058b)
- 44 【四輪】 淨影寺慧遠撰『大乘義章』卷八之末・八難義「次就四輪、以辨對治。何者四輪、如成實説、一住善處、謂生中國。二依善人、謂值佛世。三自發正願、謂具正見。四宿植善根、謂於現在諸根完具。此四唯在天下人有故、論名爲天人四輪。所言輪者、就喻名也。能摧八難、出生聖道無漏法輪。故名爲輪。四輪如是。」(T44, 629c)
- 45 【八難】 地獄・餓鬼・畜生・長壽天・邊地・盲聾瘖啞・世智辯聰・佛前佛後の八つをこゝ、佛道修行の障礙となる難所のこと。竺佛念譯『長阿含經』卷九・第二十上經第六「云何八難解法。謂八不閑妨修梵行。」(T1, 055c) 鳩摩羅什等撰『注維摩詰經』卷一・佛國品第一「說除八難、是菩薩淨土。菩薩成佛時、國土無有三惡八難。肇曰、說除八難之法、土無八難也。」(T38, 336b)
- 46 【福田】 福德を生み出す田の意味。佛・僧・父母・苦しみ悩む者に敬いつかえて施し、福德・功德を得ること。曇無讖譯『優婆塞戒經』供養三寶品第一七「善生言、世尊、菩薩已受優婆塞戒、復當云何供養三寶。善男子、世間福田凡有三種。一報恩田、二功德田、三貧窮田。報恩田者、所謂父母師長和上。功德田者、從得煖法、乃至得阿耨多羅三藐三菩提。貧窮田者、一切窮苦困厄之人。」(T24,

1051c)

47 【幽都】『尚書』堯典「申命和叔、宅朔方、曰幽都。」

48 【迷沒】迷惑に沒在する人のこと。康僧鎧譯『無量壽經』卷下「癡惑於愛欲。不達於道德。迷沒於瞋怒。貪狼於財色。坐之不得道。」

(T12, 275a)『續高僧傳』卷二十四・釋法通傳「故能光開佛日。弘導塵蒙。攝迷沒之鄙夫。接戒濁之澆首。」(T50, 642a)

(河邊啓法)